ISSN 0286-5424

京都府埋蔵文化財情報

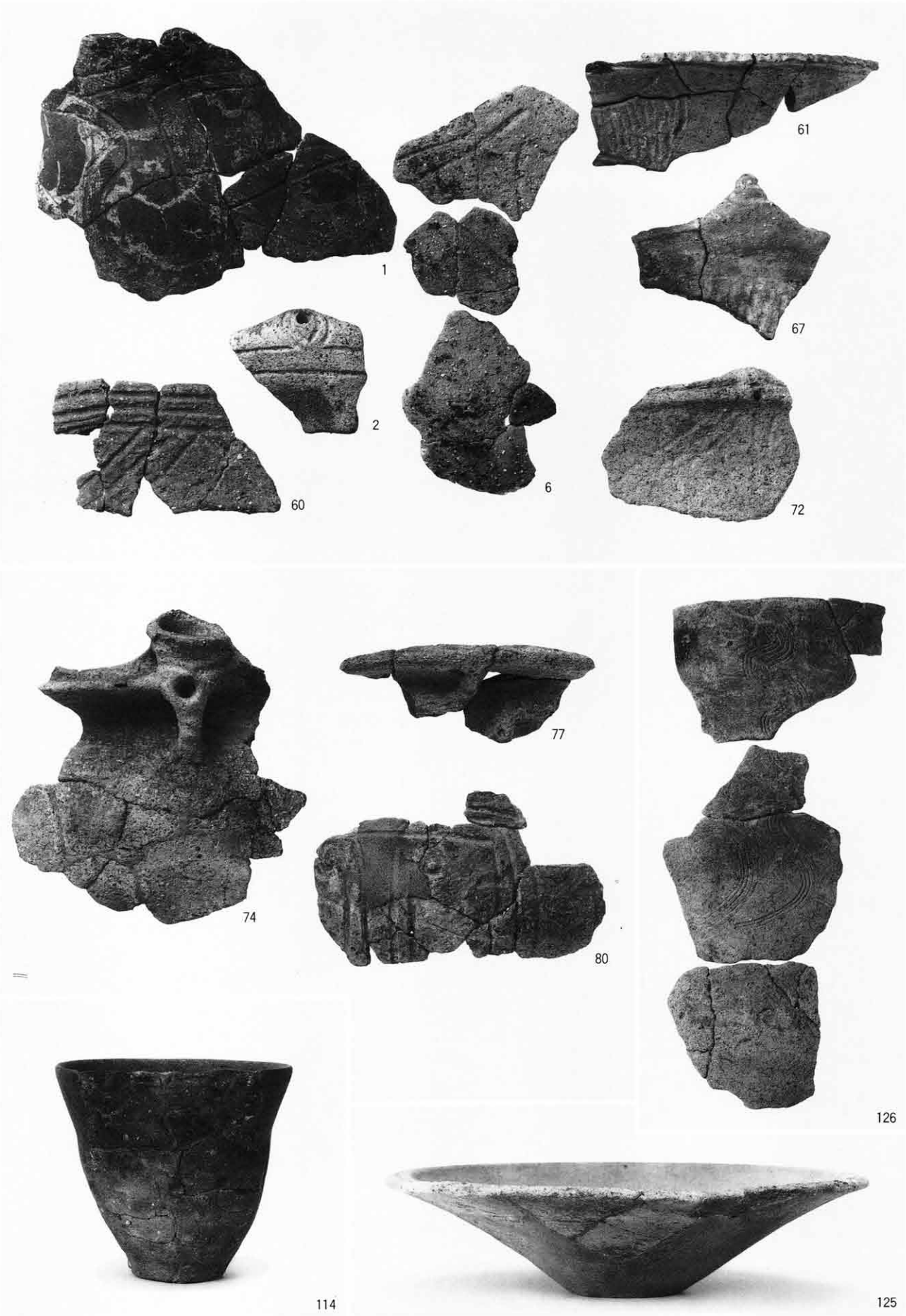
第56号

考古学と中国古代史研究・後編—ある方法論の探求----------杜　正　勝-----1
平成7年度発掘調査事業予定----------水谷　壽克----11
平成6年度京都府埋蔵文化財の調査----------辻本　和美----14
左坂古墳群第7次の発掘調査----------石崎　善久----21
瓦谷遺跡の埴輪棺 再考----------石井　清司----26
－平成6年度発掘調査略報－----------37
21. 滝谷遺跡・石ヶ原古墳群　27. 丹波亀山城跡第4次
22. ニゴレ遺跡　28. 内里八丁遺跡
23. 引地城跡　29. 北稲・柿添遺跡
24. 今林遺跡・今林2号墳　30. 釜ヶ谷遺跡
25. 大俣城跡　31. 長岡京跡右京第466次
26. 青路古墳・銭塚古墓
資料紹介　東土川遺跡出土の縄文時代遺物について----------小島　孝修----55
府内遺跡紹介　66. 白河北殿跡----------68
長岡京跡調査だより・53----------71
財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター組織及び職員一覧----------74
センターの動向----------75
受贈図書一覧----------77

1995年6月

財団法人　京都府埋蔵文化財調査研究センター

巻頭図版　東土川遺跡出土の縄文時代遺物について



東土川遺跡出土縄文土器（番号は挿図に対応）

考古学と中国古代史研究・後編
―ある方法論の探求―

杜　生　勝

4．考古資料は歴史学の手引き

すぐれた歴史学研究は社会の表層から深層まで対象としなければならず、考古学者が埋葬施設あるいは集落遺跡をもとに原始氏族社会を復原する努力は、十分歴史家の模範になりうる。ただし、近代社会科学は一部の民族誌から発展してできた概念で、もし合理的に資料を解釈できなければ、歴史学者もこの概念に執着することはできない。歴史学は社会発展が遺伝性を具え持つと認識しており、「未来の人が現在を見るは、まるで現在の人が昔を見るようなものである」、それ程離れていない時期の若干の史論はかえって研究の参考にできる。もし歴史学者が巧みに史料を手掛かりとし、新出の資料を解釈すれば、古代社会史の新しい面を構築することができるかもしれない。これはまさに本文で言うところの「歴史学の手引き」である。

三代以前の歴史を記載した史料は非常に少なくてはっきりしない。司馬遷は伝説の系図から推測して黄帝から歴史を著した。黄帝の時代は、おおよそ典型的な龍山文化の始まりに相当し、西暦紀元前2500年以前を遡ることはない(注32)。このため相対的な考古学上の仰韶文化と一部分の龍山文化は、比較的信用できるにしても、ほとんど参考にならない。先秦の子書(諸子百家の書物)にも原始社会の進化に関する叙述があるが、ひどいものになると早期の人類は「その母を知って、その父を知らず」と説いており、現代社会科学から生まれた概念と比べればはるかに大雑把になる。たとえば『礼記・礼運』篇で述べられている「大同」社会では、ただ親はその子の親であるだけではなく、ただ子はその親の子だけではなく、やもめ・孤児・障害者を助けて養うところのものがあり、貨幣は己のために蓄える必要はなく、力は己のためには必要なく、窃盗・暴徒にはならず、首長(公共の指導者)は選挙を通して生まれる。この「大同」社会は一般のいわゆる原始氏族社会と類似しているが、もし今日の科学的な考古資料を検証したいなら、それ程正確ではない。

しかし、まさに古代社会を「大同」と「小康」の二つの異質段階に分けた『礼運』篇は、なお一つの参考になる骨組みを持っている。とりわけ「小康」時代の規範に対しては近代学術水準をもって良否を評定しても、依然相当高い価値をもっている。いわゆる「大同」から「小康」に移るということは、すなわち今日の社会科学が国家の起源を探求する問題においては、おおよそ伝統的歴史学でいう夏王朝に当たる。『礼運』の作者は戦国時代に生まれ、三代社会に対してなお熟知しているので、『礼運』の記述は比較的事実に近い。三代社会とそれ程離れていない時期の評論は同一文化系統の産物であるから、比較的容易に当該文化の特質を反映しており、『礼運』の論述は研究の指針になる。そこで、試みに中国の特色をもつ歴史解釈を示してみよう。

『礼運』篇作者は以下にこの新しい社会段階－「国家」の誕生の良否の判定ができる四つの規準を挙げている。

1.天下を家と為し、それぞれの親はその親、それぞれの子はその子、財力は己の為。

2.大人(首長・権力者)の世襲をもって礼とみなす。

3.城郭溝池をもって要害とみなす。

4.礼儀は規律(おきて)とみなす。

第一点に関して、血縁家族は社会単位になるだけではなく、経済単位でもある。近親家族に対して特別に配慮するが、氏族集団との間は相対的に疎遠になる。第二点に関して、首長権は世襲され、統治機構は少数の人およびその家族によって利益を独占される。この二点は氏族の分化、家系の変化に係わっている。中国考古学界ではこれらに論及した論文はすでに多く、まさしく上文の分析のとおりであるが、現在これらの命題を詳細に論述する考古資料はなお不足している。古代史の伝説によれば、中国国家の形成はあるいくつかの選ばれた家族の勢力が強くなるのと関係があるらしい。しかし、今日の副葬品の「富(財産)」と「貴(地位)」に対する所見は一般的にはただ個人を反映するだけで、家族を確定することは容易ではない(墓地の区分はかならずしも家族群を代表しない)。第三・四の二点は前述の二点とは異なっている。第三点は城壁のことで、70年代になっても龍山時代の古城の検出は依然極めて限られたものであったが、近年公表された資料ですでに国家起源の問題を検討することができる。第四点は礼のことで、中国古代の政治社会秩序を維持するのは主に「礼」によっており、考古資料に反映されるのは、身分階級を示す礼器と、統治を象徴する宮室である。だから、発掘調査によって発見された大型集落と埋葬施設はまさに『礼運』篇が述べるところの国家形成の四要素の第三・四の二項に符合する。

中国人はこれまで「城」と「国家」の関係は密接不可分なものであると認識している。「国家」の文字に関する古い文字は「邑」・「或(国)」のようにみな城壁を表わしている。考古学者のV.G.Childeが言う人類社会第二の大変革である「都市革命」は、彼が定義した10個の規準によっている。大型集落、生産に従事しない人口、徴税制による富の集中、巨大な公共建築、知的労働者と肉体労働者の階級分化、文字、科学、芸術、商品貿易と専門工人(職人)[注33]、まさしくこれが国家である。彼の理論と伝統的な中国人の認識は同工異曲の妙がある。張光直氏は中国古代社会の事実をもとに、三種の対立関係を提唱した。階級と階級の間、都市と農村の間、および国家と国家の間の対立は、氏族社会が「国家」に進んだ表象となる[注34]。この三種の対立関係の中で考古学が直接観察できるものは、ただ城だけである。だから『礼運』篇の作者が城郭溝池をもって国家の要件としたのは、かなり「現代」的理論であると言うことができる。

実際、城はもう一つの意義を含んでおり、近代社会科学のある若干の理論を証明することができる。エンゲルスの『家族・私有財産および国家の起源』には「国家」と「氏族社会」の違いを定義するのに次の三点がある。第一は、地区によって国民が区分され、集落組織は血縁結合から地縁結合へと移り変わった。第二に、公権力が設立された。例えば軍隊・警察・法律と監獄などの強制機関。第三は、対立する階級が形成される。この三つの要件が達成されると国家になる。

これはエンゲルスが古代ギリシャ・ローマとドイツの歴史から得た結論で、現代の考古資料が彼の三つの定義を証明する直接的証拠を探し出すことは決して容易ではないが、考古学的手順によって発見された城壁はかえってこの方面の手掛かりを暗に示している。中国の古城はみな版築の城壁で、一定の工事の順序がある。設計・測量から、工人集めと材料選び、土選び・土運びと版築に至るまで、過程が煩雑で、多くの労働力の集中を必要とする。築城工事は政府の行政手腕を窺い知ることができる。たとえば大量の労働力を組織し、編成指揮することは、行政組織の発展の程度を反映し、築城労働力を養うための糧食を用意できることも統治者が余剰生産物の量をコントロールしていることを顕示している。だから、城壁規模の大小を考古学的に検討することによって、まさに資源の集中・人力のコントロールそして行政組織の発展度合いを推測することができる。[注35] 沈黙をしている城壁も考古学者の発掘を経たなら、はっきりと我々に語りかけてくれる。城壁からエンゲルスが定義した「国家」の一要素すなわち公権力を読みとることができ、物的証拠を得るのが難しい警察と法律を検討する必要がなくなり、これも我々が国家の起源を討論する時に特に検出した古城跡を重視する要因となっている。

『周礼』の六官の序官では冒頭に内容の大要を示して、「ただ王が国を建て、国体を護持し野をおさめる」と述べている。国家を構成する要素は「国」と「野」であることを顕示しており、国とは城邑(城壁に囲まれた集落)のことであり、野とは農村のことで、国家の核心はとりわけ城壁にある。故に国家が出現し中央集権国家が形成されるまでの間は「城邦時代」と称することができる。古い城跡の考古学的研究に関しては、一般的に城壁範囲のトレンチ調査だけにとどまり、特定の地点は発掘するけれども、城内城外の配置に対する知見は依然非常に限られたものである。単に城壁の範囲だけからみても、時間をかけて比較すれば、古代国家の特質およびその発展を理解するのに手助けとなるものがまだある。今まで、検出した龍山文化古城の範囲はずっと小さく、各城の格差もまた小さい。これらの城は、たぶん古文献にいういわゆる「万国」に符合し、すなわち城邦林立の状況で、「部落聯盟」と呼ぶ人もある。夏代以降各城の格差は徐々に大きくなり、文献に書かれた階級状態を呈し、封建社会の階級秩序を反映しており、「封建城邦」と称することができる。戦国になって、大きく拡充した都城は、各国の中央政府に権力が集中し、列強が対立する象徴である。秦漢以降、都と郡県の城の規模を比較すれば、雲泥の差があり、統一国家下における「天子独尊」の表現に他ならない。[注36] 考古学的に調査された城壁から、国家の起源を議論することができるばかりではなく、国家の発展を推測することもできるのである。

次に、埋葬儀礼の制度は国家発展の重要な指標である。上述のように、時代が下がれば下がるほど個別の埋葬施設の副葬品が豊かになり、埋葬施設間の格差が大きくなる。大汶口文化の副葬品は豊富になり、大汶口10号墓に埋葬された老婦人の副葬品は量が多くて、珍貴さは全墓地のトップクラスにあり、まさしく富裕な階層に属している。ただし、後世の礼器と直接関連のある儀礼的な遺物はまだ発見されていない。したがって、我々が当時の社会に昔の人が言う「礼制」が形成されたかどうかを、断定する方法はない。「礼制」は統治意義を含んでおり、儀礼用具の質量が特殊なものを除けば、ある程度の規格を具えている。さらに、大汶口文化系統中やその前後

の文化系統にも関連があって、山西省陶寺遺跡はすなわち一つの典型的な例である。陶寺遺跡の大型埋葬施設は副葬品の数量が多いだけではなく、龍盤・鼉鼓・特磬・玉器も出土している。中国歴史の発展からみて、これらの礼器は確実に統治を象徴するものである。文献史料によく見られる「礼制」を採用せずに、「私有制」の概念を踏襲して中国国家の形成を論述する考古学者達が若干いる[注37]が、中国の実情に符合しているとは限らない。私有制の基本意義は「富」であり、礼の基本意義は「貴」である。春秋時代以前は「貴」より「富」の階級(身分は高くないが、富裕な階級)は存在しない。統治観念から言えば、「貴」は「富」に先んじるものである。たとえば衛国の仲叔が奚で戦功を立てた時、衛君の賞邑を辞して、庁堂の上に三面の楽器(曲県)を懸けたり、朝廷にあがる馬車を特別な馬飾(繁纓)を取付けて飾ることができる諸侯の「礼」遇を受けたいと求めたことである。衛君が希望に応じたことに、孔子は以下のとおり論評した。「惜しいかな、与えられる邑は多いにしかず。ただ礼器と名分は人に与えることはできず、君主の司る所なり」(『左伝』成公二年)。周代採邑経済の効果は高く、礼楽の器の政治的意義は大きいが、政治の「貴」は経済の「富」より高く、礼器が身分を定め、身分が政治社会秩序を維持しているために、礼器の形成は国家形成の判別の大きなキイポイントである。陶寺遺跡を発掘された高煒氏と私は、期せずして「礼制」という用語を一致して使用した。この伝統的概念は龍山時代の特殊大墓の政治意義を表現しており、私有制に比べて更に階級と統治の関係を説明しやすくなったばかりではなく、考古資料の性質と合致するようである[注38]。

古く文献に「国の大事は祭祀と軍事にある」と書かれている。城邦時代では、「大事」な儀物の多くは青銅器が主であり、容器は祭祀につかい、武器は軍事に使うことを示している。ただし青銅礼器は龍山文化期にはまだ形成されていないようであるが、二里頭文化期には出現発生していたかもしれない。二里頭三期ではまだ大型墓が発見されておらず、二里岡期の青銅礼器のセットのごときものはまだ見られないが、当時の宮殿規模をもって推測すれば、礼制がありそれが制度化されたものであったはずである。二里岡期以降は礼器セットの副葬は普遍的に出現し、これが墓主の階級身分を示している。商・周で重視される礼器は、商の人は爵・觚等の酒器を尊び、周の人は鼎・簋等の食器を重んじた。兪偉超氏は公羊家の「天子九鼎、諸侯七、卿大夫五、元士三」の礼祭制度をもとにして考古資料を検証して、周代の用鼎制度を論述し、その形成と崩壊の過程を組み立てた[注39]。しかし全体的に見て、身分を体現した埋葬施設資料は銅鼎のみに限られてはいないようで、『左伝』記載の魯の大夫・藏哀伯が治道を論じる時に、「清廟茅屋、大路越席。衮冕黻珽、帯裳幅舄、衡紞紘綖。藻率鞞鞛、鞶厉游纓。火龍黼黻。五色比象。錫鸞和鈴。三辰旂旗天子」(『左伝』桓公二年)を挙げている。これには、「車」・「服」・「器」・「用」の規定が含まれ、それらは墓から発掘された副葬品の品目と大体符合する。「器」と「用」は、青銅の礼器と兵器を主とし、「車」は車馬器を指し、「服」は腐朽はするが、玉器飾りはその象徴となる。我々は編年可能な墓をもとに副葬された礼器を分析して、封建身分礼制発展の筋道をおおまかに理解することができる[注40]。およそこれらの研究は、明白にされた文献の助けを借りて索引を作ることによって、黙して語らない墓が当時のにぎやかな人生を我々に告げてくれる。

考古学的に調査された大型建築基礎跡も国家起源と発展の指標となる。V.G.Childeの「都市革命」十項目の規準の一つである巨大公共建築は、中国の歴史経験上にあっては宮殿(宗廟)建築のことであり、偃師二里頭・屍郷溝商城・黄陂盤龍城・岐山鳳雛村・扶風召陳村そして鳳翔馬家庄など続々と宮殿の基礎が発見されている。我々はそこで夏・商から春秋にいたる宮殿建築のプランは大体同じであると確定できる。基本原則は左右対称、幾重にも門があり奥深いことである。[注41] 大門をはいれば中庭で、中庭を過ぎれば、階段をのぼって堂にあがる、堂の後ろは室となり、両側には回廊と脇殿(母屋の両脇の建物)がある。堂・階段・庭はみな政治意義を具えており、漢代の賈誼は「人主之尊如堂、郡臣如陛、衆庶如地(君主の尊きこと堂の如し、群臣は宮殿の階段の如し、大衆は地の如し)」と比喩している(『漢書・賈誼伝』)。中庭が含んでいる政治性とは、たとえば商王・盤庚が人民の代表と庭で会見したことや(『尚書・盤庚』)、古文献のいわゆる「来庭」あるいは「不庭」という用語が、即ち方国(地方政権)が臣服しているかどうかを示している等のことである。一定の規模をもった宮殿建築で、現在もっとも古いものは、二里頭三期にまで遡り、今後さらに多くの龍山文化期の宮室あるいは宮殿群が検出されれば、当然中国国家起源の奥義を解き明かすことができるであろう。

古く半坡類型時代には、集落にいわゆる「大家屋」があり、その建物の中にはまだ生活用具は見られず、一般に公共活動の場所と推測されている。「大家屋」はまた世界各地の民族誌にみられ、用途は様々である。[注42] 半坡・姜寨の大家屋は、まだ国家形成時期の統治意義はないようであるが、仰韶文化晩期になって秦安大地湾901号住居跡のように少し様相が異なってくるようである。この建築の前堂後室、左右脇殿、大門の前には庭があり、主と従がはっきり分かれ、基本的には広大な宮殿の配置と符合し、報告者は「部落会堂」と称している。[注43] 現在、大地湾のこの家屋の配置と国家時期の宮室が非常に類似していることによって、宮殿の出現時期は仰韶文化晩期に遡り、一般に理解されている国家の形成に比べてはるかに古く、中国国家起源の年代は従来の説に比べて500年あるいは1000年も繰り上げられるのだろうか？このことについては、紅山文化から解答を探し出すことができるかもしれない。遼寧省喀左県東山嘴出土の左右対称の祭壇と、そこからあまり離れていない牛河梁発見の積石塚と「女神廟」[注44]を、蘇秉琦氏が提出した「古文化－古城－古国」の概念[注45]で解釈することを提議した。大地湾901号住居跡と東山嘴・牛河梁はほぼ年代が同じで、中国国家起源前の一種の政治形態を代表している。春秋時代の楚の大夫が射父に対して説くところによれば、かつて「民神雑揉、不可方物、夫人作享、家為巫史」(『国語・楚語下』)の段階があり、夏代にあって祭・政・軍の三者は合一していたかもしれない。「神道設教」の政権形態以前に、「以人事神」時期があり、ほぼ後世の政治形態を具えてはいるが、社会の原動力は宗教が担っていた。[注46] 仰韶文化晩期から龍山文化早期になって、少し礼制の雛型をもつようになるが、宗教的雰囲気の濃厚な遺跡・遺物もみられる。上述の遺跡を除いて、その他の濮陽県西水坡と余杭県反山・瑶山[注47]の各遺跡は、おおよそこの種の「前国家」段階の社会的特質を反映している。先秦時代の典籍で、古代神権に関係ある記述の観念の一部を適度に借用し、国家起源前の政権の性質を含む考古資料を解釈すれば、「部落聯盟」あるいは「酋邦(chiefdom)」等の概念に含まれない歴

史的実情を理解できるかもしれない。

5．結語；歴史学と考古学提携への展望

古く「古史辨運動」が起こる以前に、王国維は甲骨文の卜辞をもって『史記・殷本紀』の世系を補正し、続けて「二重証拠法」を提出して、文献史料と考古資料の結合を唱え(注48)て、古代史研究の唯一の研究法を作り上げた。殷墟発掘後、殷・商の文化と歴史を論証し地下の新材料の範囲を文字から非文字にまで拡充し、正式に歴史学と考古学の提携のきまりを定めた。数十年来、考古資料は絶えることなく累積し、考古学概念も途切れることなく更新され、古代史研究の無窮の天地が開け(注49)られ、考古学なしでは古代史研究はないといっても過言ではない。我々も敢て予測すれば、将来の優れた古代史研究はおそらく考古学の上に打ち立てなければならないであろう。

歴史学と考古学の提携は必然的な趨勢ではあるけれども、その間の境目と限界も軽視してはならない。過去数十年の考古学と古代史研究の発展を回顧すれば、新資料は一面では歴史の認識を増加させるけれども、ある段階に達すれば、往々にして議論百出し、定説の得難い局面が出現する。ただ思考上の筋道を通せば、さらに多くの意義を明らかにすることができる。大型遺跡と歴史上名高い都とを照らし合わせることが、歴史学と考古学の境目の問題を最もよく説明することができるのである。

大型遺跡(とりわけ大城－城壁をもった城郭)は往々にして容易に文献史料と照合され、学者も好んで文献に従って出土資料を解釈している。ところが最近にいたるまで、両者が最も強固に結び付けられたところは相変わらず60年ばかり前に発掘された殷墟なのである。ここでは、歴史地理学的論争は比較的少なく、その上文字資料も出土しているので、それ程推測に頼る必要がなかった。殷墟に比べて古い鄭州商城については意見が多岐に分かれる。結局のところ仲丁が移ったところである隞、あるいは湯が定めた都の亳なのだろうか。商代の雄族である鄭族の邦国なのか、それとも他の可能性が別にあるのであろう(注50)か。各人の論点にはすべて若干の道理があるようである。時代の古い鄭州の二里頭三期遺跡は、結局夏の桀の都斟尋、あるいは成湯の西亳(注51)なのかまだ定説がない。更に、古い登封県王城崗遺跡、淮陽県平粮台遺跡、襄汾県陶寺遺跡にいたっては、大禹、大昊、帝堯の都(注52)なのかどうか証拠はさらに薄くなる。歴史学と考古学の提携はかなり困難であるのは、伝統的な歴史地理学自身にも異説があるからである。関連を指摘される地勢はただ概略性を備えるだけで、かならずしも今日の正確な地点と符合しない。しかし、上述のごとき大型遺跡の実証を得られることができれば、古代史研究をもう一段階上までひきあげることができる。

考古学はもともと生活器具の特色によって文化を分類することを基礎としている。検出した遺跡を根拠にして、典型的な考古学文化として命名する。この種の研究方式は本来歴史学と「互いに領分を犯さない」関係であり、歴史学の難題に考古学が直面することはなかった。しかし、考古学にとって古代社会を理解することが重大な使命であるならば、中国はまた悠久の時代に亘る文献史料をもつ国家であり、文献史料が引き起こす問題は遅かれ早かれ考古学者も直面しなければならなかった。事実上、考古学者が一旦歴史学用語を採用して文化を命名するならば、新出土

資料で歴史の問題を解答し始めることになる。その困難さは単なる考古学文化の検討よりさらに複雑になってくる。たとえば、考古学者がよく使う「夏文化」の「夏」は少なくとも夏代・夏朝・夏族の三つの意義を含んでいる。[注53]「楚文化」の「楚」も地域、国家、民族、文化の四つの概念を含んでいる。[注54]その他「商文化」あるいは「周文化」も例外ではない。これらの概念のうち、とりわけ民族(あるいは部族)が最も難しい。慎重な考古学者ならば、文献史料に記載された民族をすぐに比定しないで、先ず各地の考古学文化の内容・特徴・時間と空間を明瞭に整理してから提議すべきである。[注55]

考古学的文化で歴史上の民族を推測することには相当な困難が存在するけれども、中国古代考古学の時間・空間の体系はすでに大体確立されているので、ただ文献史料に記載された時間と地域を符合しさえすれば、民族の研究も不可能ではない。近年、多くの考古学者がさまざまに考古学文化をもって、古代史の各民族の歴史を解読しつつある。商代以前・周代以前の認定から、東夷・呉楚・百越・巴蜀・氐姜・狄戎の推測まで、議論は百出している。その議論の中で地域あるいは民族間の交流に言及するものは、古代史研究の多くの新領域を確かに開くことができた。これは考古学の発展が一定の段階にまで達した成果であり、この研究の趨勢は考古学と歴史学の結合を確実に近付けることになった。同時に考古学の成果がさらに古代史研究の内容を充実させている。

今までに蓄積された考古学的資料は、伝統的文献の解釈あるいは近代に流行した概念を超越し、我々に新たな歴史的問題を提議している。もしも学者が偏見を捨てさることができれば、本当に古代史研究の新領域を創造することが可能になる。すでに述べたように、考古学者が考古資料を用いて「氏族社会」を論じる方法に対して、多くの議論がある。実際、今日の資料から言えば、考古学者は原始社会がもつ家系・所有制以外のものを考え直し、古代人の生活の新しい面をうち建てることができる。新石器時代の埋葬法に関する報告には多くの人骨の年令・性別・疾病の資料を含んでおり、[注56]それらの年令・性別を根拠に歴史人口学的な分析を行えば、おおむね集落の人口構成を理解することができる。人骨に顕れた病歴を根拠にして当時の人の健康状態・労働習慣と飲食文化をおおむね推測することができる。集落遺跡の動植物資料も原始社会の生活資源と生態環境を具体的に表すことができる。[注57]以上述べた様々な点は、人民の歴史の大きさや奥深さに関している。その重要性はまさに母系・父系社会あるいは公有・私有性に劣らず、本文を検討した若干の考古学者も実際これらの問題の意義についてすでに注意をしていた。[注58]

過去40年を回顧すれば、中国の考古学者は家族・私有制と国家の起源に対する解釈をすでに出し尽くしており、家系の問題に注目する人は母系・母権の存在および母系社会から父系社会へ移る軌跡を証明することに努力している。所有制に注目をする人は、公有制から私有制へ変わり、一旦父系社会と私有制が確立すれば、即ち「国家」の成立であることを証明しようとしている。しかし、ある学説は資料がまだ不十分な時、往々にして簡明ではっきりと比較できる概念を構築しがちである。資料が増加すればするほど、自然に既定概念が簡略化しすぎたことに気付き、そこで修正を試みるか、あるいは資料を再整理して論述する。もしも資料が再び累積すれば、旧概

念は益々配慮が不十分であることがわかり、毅然として旧説を放棄し資料自身に回帰して、改めて問題を考えなければ証拠の理論に符合したものを得ることはできない。今まで、古代社会に対する中国考古学の解釈は、だいたい第一・二の両段階を経てきている。

第三段階は目の前にあるようだ。学者が古代史を議論する場合、いわゆる原始氏族と文明国家はまぎれもなく二つの異質な社会であるが、もしも始めと終わりを対比すれば、ある傾向をはっきり区別できる。しかし真に正しい歴史とは前後に連なったものであり、その変遷過程も緩やかなものである。今まで、原始社会の考古資料については、新石器時代前期の資料は比較的多いが、国家形成と直接係わる新石器後期の考古資料は却って乏しいので、原始社会から文明国家に入る過程は明らかになっていない。現在関連する資料は少し増えたが、今後龍山時代城址の内外の配置がさらにはっきりと明らかにすることができ、そして類似の牛河梁・東山嘴・台地湾あるいは瑶山・反山などの遺跡をもっと継続して調査すれば、中国原始社会から文明国家に入る扉を開く鍵になるはずである。その時になると、国家形成時の社会性質を把握できるばかりではなく、原始社会の議論に対してはっきりさせる役割を果たすことができ、中国考古学の古代社会解釈史の第三段階がやって来るかもしれない。

数十年来の考古学の古代史に対する貢献を総括すれば、絶対に肯定すべきものである。新出資料は古代史研究の確かな基礎となるが、解釈の方面ではなおかなり大きな余地が残されている。古代社会は複雑であるからこそ、理解方式も当然多様にならざるをえない。父系・母系・公有・私有・奴隷制・封建制あるいは巫的文明[注59]・「華夏国家[注60]」・「封建城市[注61](都市)」等々の概念にかかわらず、すべて解釈の参考にすることができるが、資料が十分かどうか、論述が合理的かどうかをもって選択の規準としなければならない。社会科学概念は古代史研究に対してかなり役立つ。各文化系統の特質をもっと理解する一方、古典文献を参照すれば、中国古代社会の理解をも深めることができるかもしれず、いわゆる中国歴史の特性を検討することもさらに具体的になるだろうと信じている。

(Du Zheng Sheng ＝中央研究院歴史語言研究所)
(訳者・木下保明＝(財)京都市埋蔵文化財研究所)

注32　杜正勝：『从村落到国家』、前掲『中国文化新論・根源篇』53頁。

注33　V.G.Childe, The Urban Revolution, The Town Planning Review, Vol.XXI, No.1,1950年。
張光直：『中国青銅時代』二集、2～3頁。

注34　張光直：『从夏商三代考古論三代関系与中国古代国家的形成』、『屈万里先生七秩榮慶論文集』、台北、聯経出版公司、1978年。『中国青銅時代』、聯経出版公司、1983年所収、62頁。

注35　杜正勝：『从考古資料論中原国家的起源及其早期的発展』、『歴史語言研究所集刊』58本1分、1987年。

注36　杜正勝：『関于周代国家形態的蠡測―「封建城封」説争議』、『歴史語言研究所集刊』57本3分。
『城垣発展与国家性質的転変』、『慶祝高暁梅先生八秩榮慶論文集』、台北、正中書局、1989年完稿、印刷中。

注37　石興邦：『从考古学文化探討我国私有制和国家起源的問題』、『史前研究』創刊号、1983年。
佟柱臣：『从考古材料試探我国的私有制和階級的起源』、『考古』1957年4期。

注38　高煒：『龍山文化時代的礼制』、『慶祝蘇秉琦考古五十五年論文集』。及び『考古』1989年12期『中国文明起源座談紀要』での高煒の発言。
杜正勝前掲書『从考古資料論中原国家的起源及其早期的発展』。

注39　俞偉超：『周代用鼎制度研究』、『北京大学学報』（哲学社会科学版）1978年１・２期、1979年１期。
『先秦両漢考古学論集』所収。

注40　杜正勝：『周礼身分的象徴』、『中央研究院第二届国際漢学会議論文集』、1989年。
：『周礼身分制之確立及其流変―特从随葬礼器論』、『中央研究院第二届国際漢学会議』発表論文、1986年。

注41　杜正勝：『宮室、礼制与倫理―古代建築基址的社会史解釈』、『国史釈論』（陶希聖先生九秩榮慶祝寿論文集）、台北、食貨出版社、1987年。

注42　汪寧生：『中国考古発現中的「大房子」』、『考古学報』1983年3期。
前掲書91～105頁。

注43　『甘粛秦安大地湾901号房址発掘簡報』、『文物』1986年2期。

注44　郭大順・張克挙：『遼寧省喀左県東山嘴紅山文化建築群址発掘簡報』、『文物』1984年11期。
遼寧省文物考古研究所：『遼寧牛河梁紅山文化「女神廟」与積石塚群発掘簡報』、『文物』1986年８期。

注45　蘇秉琦：『遼西古文化古城古国』、『文物』1986年８期。

注46　杜正勝：『夏代考古及其国家発展的探索』、『考古』1991年１期。

注47　『余杭瑶山良渚文化祭壇遺跡発掘簡報』、『浙江余杭反山良渚墓地発掘簡報』、『文物』1988年１期。
『河南濮陽西水坡遺跡発掘簡報』、『文物』1988年３期。

注48　王国維：『殷卜辞中所見先公先王考』、『続考』、『観堂集林』、世界書局コロタイプ所収。
：『古史新証』、『王観堂先生全集』冊六、台北、文華出版公司。

注49　杜正勝：『中国古代社会史重建的省思』、『大陸雑誌』82巻１期、1991年。

注50　安金槐：『試論鄭州商代遺跡―隞都』、『文物』1961年４・５期。
鄒　衡：『鄭州商城即湯都亳説』、『文物』1978年２期。
白川　静：『殷代雄族考其一鄭』、『甲骨金文学論叢』五集（謄写版印刷）、1957年。

注51　張光直：『殷商文明起源研究上的一个関鍵問題』、『沈剛伯先生八秩榮慶論文集』、台北、聯経出版公司、1976年、『中国青銅時代』所収。
高去尋：『商湯都亳的探討』、『董作賓先生九五誕辰紀念』、1988年。
杜正勝：前掲『夏代考古及其国家発展的探索』。
殷瑋璋：『二里頭文化探討』、『考古』1978年１期。

注52　安金槐：『試論登封王城崗龍山文化城址与夏代陽城』、『中国考古学会第四次年会論文集』、北京、文物出版社、1985年。
曹桂岑：『淮陽平粮台龍山文化古城城名考』、『中原文物』1983年特刊。
王文清：『陶寺遺存可是陶唐氏文化遺存』、田昌五主編『華夏文明』第一集、北京大学出版社、1987年。

注53　杜正勝：『夏文化可討論嗎?―1990年洛杉磯加大「夏文化国際研討会」紀要』、『新史学』１巻２期1990年を参照。

注54　蘇秉琦：『楚文化探索中提出的問題』、『中国考古学会通訊』第二期、前掲書218頁。

注55　蘇秉琦：『関于考古学文化的区系類型問題』、前掲書226頁。

注56　陳必忠・蘆守群・任惠民・張永潔：『元君廟仰韶墓葬人骨年令性別鑑定』、『元君廟仰韶墓地』付録二、または付録三『元君廟仰韶居民的健康状況』。
杜百廉・范天生：『下王崗遺跡人骨骨病所見』、『河南医学院学報』1976年１期、『淅川下王崗』付録

三。

注57　李有恒・韓徳芬：『半坡新石器時代遺跡中之獣骨骨骼』、『古脊椎動物与古人類』１巻４期、『西安半坡』付録二。

浙江省博物館自然組：『河姆渡遺跡動植物遺存的鑑定研究』、『考古学報』1978年１期。成慶泰：『三里河遺跡出土的魚骨・魚鱗鑑定報告』、すべて『膠県三里河』付録二・三。

祁国琴：『姜寨新石器時代遺跡動物群的分析』。翟允禔：『姜寨遺跡出土的黍粒稃的鑑定報告』。ともに『姜寨』付録三・四・五。

賈蘭坡・張振標：『河南淅川下王崗』付録四。

注58　張忠培：『史家墓地的研究』、前掲書67頁。

厳文明：『紀念仰韶村遺跡発現六十五周年』、前掲書342頁。

注59　張光直：『中国青銅時代』二集、北京、三聯書店、1990年。または、Art, Myth and Ritual —The Path to Political Authority in Ancient China, Harvard University Press,1983年。

注60　許倬云：『西周史』、台北、聯経出版公司、1984年。

注61　杜正勝：『関于周代国家形態的蠡測—「封建城邦」説争議』、『歴史語言研究所集刊』57本３分、1986年。

訳出した論文は、黄暁芬先生に指導していただいている中国考古学勉強会のテキストとして使用したものである。訳者は勉強会の成果を記録したに過ぎず、直訳で、文章としての体裁をなさないものを、勉強会の各氏(安藤信策、磯野浩光、上田雅之、清水みき、高橋美久二、土橋　誠、山中　章)と共に推敲・校正したものである。

平成７年度発掘調査事業予定

水谷壽克

財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターは、国・公社・公団及び府の開発事業等に伴い、どうしても避けられない遺跡について事前に調査を実施している。年間受託事業は、京都府教育庁指導部文化財保護課が開発事業者と文化財保護法による事前の協議を行ったうえ、当調査研究センターと調整を図り決定される。事務局の体制は、後掲する組織及び職員一覧のとおり、３課７係体制をとり、業務の円滑化を図っている。

平成７年度に予定している受託事業件数は30件、遺跡調査箇所数は44遺跡を数える。開発行為では、道路建設に伴う調査が19件、庁舎・学校・住宅建設・施設整備等に伴うものが８件、ほ場整備等に伴うものが３件である。また原因者別にみると、国・公社・公団関係の受託件数が９件で全体の約３割程度であるが、名神高速道路拡幅事業や国営農地開発事業など大規模開発に伴うものが多く、事業費総額では約７割を占める。

今回特にその成果が期待されるものは、以下のとおりである。

黒部製鉄遺跡・左坂古墳群ほかは、丹後国営農地開発事業に伴う調査である。黒部製鉄遺跡は、平成４年度からの継続調査で、昨年度までに８世紀から９世紀にかけての製鉄炉10基・炭窯31基・住居跡等を検出している。今年度は、「金屎（かなくそ）谷」と呼ばれる谷部の調査を実施する予定であり、字名から、その成果が期待される。また、左坂古墳群が築かれている大宮町周枳集落背後の丘陵部は、弥生時代から古墳時代にかけての大規模な墓域として知られている。今回は、丘陵裾部の墳丘墓および古墳７基の調査を実施する。

竹野遺跡は、国道178号道路改良事業に伴う調査で、昨年度からの継続事業である。弥生時代前期の著名な集落遺跡であるが、昨年度の調査は遺跡の縁辺部にあたり顕著な遺構や遺物は検出されなかったが、今年度は遺跡の中心部に向かって調査を行い、遺跡の広がりやその性格を明らかにする。

嶋遺跡は、舞鶴火力発電所建設に伴う調査である。昨年度舞鶴市教育委員会が東舞鶴東北部の浦入湾一帯の試掘調査を実施した。丘陵部には古墳群が、湾岸部には縄文時代から平安時代に至る土器類が出土し、縄文時代後期には集落が営まれていたことや、平安時代には大規模な塩生産が行われていたこと等が明らかになっている。今年度から市教育委員会と地区を分担して面的調査を実施することとなり、当センターは湾口部の平均海抜0.8mの砂州に広がる嶋遺跡約3,200m²の調査を実施する。

引地城跡は、沖積平野を一望できる由良川右岸の丘陵に築かれた連郭式山城である。府道拡幅

工事に伴い城全体の約３割の調査を昨年度から実施しており、主郭と帯郭・土塁が比較的良好に残存することが明らかとなった。今年度は細部にわたる面的調査を実施する。

大俣城跡は、京都縦貫自動車道(綾部・宮津道路)建設に伴う継続調査で、昨年度は主郭・帯郭を中心として調査を行い、建物跡・土壙等を多数検出している。今年度は斜面地の竪堀・城戸口・通路等の調査を行い、城全体の構造について明らかにする。

園部城跡は、但馬国出石城主小出信濃守吉親の陣屋として元和７(1619)年に開城し、明治４年の廃藩置県の折りその主な建物は移築・解体されている。園部高校敷地内には櫓門・巽櫓・石塁が現存し、また校舎増改築に伴う２回の発掘調査においても石組み溝・塀跡等を検出している。今回の調査地は「園部城郭図」では堀跡が想定されており、その成果が期待される。

千代川遺跡は、亀岡市北西部の推定丹波国府を包蔵する縄文時代から中世にかけての大規模な集落遺跡で、過去19次にわたる調査が行われている。今回は、河川改修に伴い縄文後期の遺構が検出された第11次調査の縁辺で調査を実施する。

植物園北遺跡は、京都市街地北東部を占める縄文時代から中世に至る大規模な集落遺跡として知られている。今回の調査は、府職員住宅２期工事建設に伴うもので、平成５年度実施した調査地の南に当たり、古墳時代前期の集落跡の検出が予想される。

内里八丁遺跡は、第２京阪道路建設に伴い平成２年度からの継続調査で、弥生時代の稲株痕跡を検出した遺跡として著名である。昨年度の調査は、水田遺構が検出された北西部の舌状に張り出した台地部の調査を行い、中世・奈良時代・古墳時代後期・古墳時代前期の４時期の遺構面を検出した。今年度はさらに北西部の面的及び試掘調査を行い遺跡の広がりを確認する。

柿添遺跡は、山手幹線建設に伴う調査で、昨年度実施した北稲遺跡に隣接する。北東方向に舌状に張り出す微高地に古墳時代後期・奈良時代・中世に至る３時期の集落跡が想定される。

長岡京跡関係では、６件の調査を予定している。名神高速道路拡幅事業に伴う調査では、昨年度から約50,000㎡を対象として桂川パーキング建設部の調査を実施しているが、今年度は左京南一条四坊四町及び三坊十三町の二町域約14,000㎡の大規模な面的調査を実施し、東三坊大路・南一条大路等の条坊や宅地割りが明らかにされることが期待される。また、府営住宅建設に伴う左京四条一坊十町の継続調査では、東一坊坊間東小路・四条条間小路の側溝や交差点付近を中心に長岡京期及び平安時代の遺物を含む流路を検出している。今年度は２期工事分約3,000㎡の調査を実施する。

普及啓発事業では、機関誌「京都府埋蔵文化財情報」の刊行(年４回)、一般府民を対象とした研修会「埋蔵文化財セミナー」(年３回)、また平成６年度に京都府管内において実施された発掘調査の成果を一堂に展示する「第13回小さな展覧会」を、平成７年８月12日(土)から８月27日(日)まで向日市文化資料館で開催する予定である。

（みずたに・としかつ＝当センター調査第１課長補佐兼企画係長）

付表　平成７年度事業一覧

番号	遺跡名	種別	所在地	調査予定期間	調査予定面積（㎡）	調査方法	調査原因
1	黒部製鉄遺跡	生産跡	弥栄町	４月～７月	3,000	発掘	農地開発
2	奈具岡南古墳他	古墳他	弥栄町	４月～12月	古墳８基ほか	発掘	
3	中原城跡	城跡	峰山町	４月～７月	500	試掘	
4	遠所古墳群	古墳	網野町	７月～10月	古墳４基	発掘	
5	枯木谷遺跡	古墳	大宮町	９月～12月	1,000	発掘	
6	左坂横穴他	横穴	大宮町	４月～７月	古墳７基ほか	発掘	
7	南谷古墳群	古墳	久美浜町	８月～12月	古墳２基	発掘	
8	上野古墳群	古墳	丹後町	８月～12月	古墳７基	発掘	道路建設
9	竹野遺跡	集落跡	丹後町	７月～10月	1,400	発掘	道路建設
10	奈具岡遺跡	集落跡	弥栄町	７月～10月	1,200	発掘	道路建設
11	引地城跡	城跡	大江町	９月～12月	1,000	発掘	道路建設
12	嶋遺跡	集落跡	舞鶴市	６月～２月	3,400	発掘	施設整備
13	池下城支城	城跡	舞鶴市	９月～12月	1,000	試掘	道路建設
14	堀古墳	古墳	舞鶴市	11月～12月	１基	発掘	
15	大俣城跡	城跡	舞鶴市	４月～８月	3,000	発掘	道路建設
16	桑原口古墳群	古墳	宮津市	５月～８月	古墳２基	発掘	
17	桑原口遺跡	散布地	宮津市	８月～12月	1,000	試掘・発掘	
18	城山谷古墳群	古墳	宮津市	７月～12月	古墳３基	発掘	
19	小田大谷古墳	古墳	宮津市	９月～11月	古墳１基	発掘	
20	小田蛭子谷古墳	古墳	宮津市	10月～12月	古墳１基	発掘	
21	井倉新町遺跡	集落跡	綾部市	８月～10月	1,000	試掘	住宅建設
22	園部城跡他	城跡	園部町	５月～９月	2,000	発掘	校舎建設
23	千代川遺跡	集落跡	亀岡市	７月～８月	300	試掘	道路建設
24	宮川遺跡	散布地	亀岡市	４月～８月	1,500	発掘	ほ場整備
25	上中太田遺跡	散布地	京北町	10月～２月	1,700	発掘	
26	篠窯跡群	生産跡	亀岡市	10月～12月	窯跡２基	発掘	道路建設
27	長岡京跡	都城跡	向日市	４月～２月	3,400	発掘	住宅建設
28	植物園北遺跡	集落跡	京都市	４月～８月	1,000	発掘	住宅建設
29	中海道遺跡	集落跡	向日市	９月～11月	500	発掘	道路建設
30	長岡京跡	都城跡	長岡京市	５月～８月	600	発掘	道路建設
31	長岡京跡	都城跡	長岡京市	９月～12月	1,000	発掘	道路建設
32	内里八丁遺跡	集落跡	八幡市	４月～２月	5,000	発掘	道路建設
33	井尻遺跡	散布地	宇治市	６月～10月	1,200	発掘	住宅建設
34	宇治市街遺跡	散布地	宇治市	10月～１月	1,000	発掘	道路建設
35	田辺城跡他	城跡	田辺町	６月～10月	2,500	試掘・発掘	道路建設
36	柿添遺跡	散布地	精華町	８月～11月	1,000	試掘	道路建設
37	弓田遺跡	集落跡	木津町	４月～９月	3,000	発掘	道路建設
38	釜ヶ谷遺跡	散布地	木津町	４月～８月	2,000	発掘	団地造成
39	長岡京跡	都城跡	京都市	４月～２月	14,400	発掘	道路建設
40	長岡京跡	都城跡	京都市				
41	長岡京跡	都城跡	京都市				
整1	ニゴレ遺跡	生産跡	弥栄町	４月～３月	—	整理報告	施設整備
整2	今林古墳	古墳	園部町	４月～３月	—	整理報告	道路建設
整3	北稲遺跡	集落跡	精華町	４月～３月	—	整理報告	道路建設

平成６年度京都府埋蔵文化財の調査

辻本和美

平成６年度に京都府内においては、土木工事や建築工事に伴って約1,500件を越える発掘届出や通知書が提出されており、発掘調査の実施例も、ここ数年同様200件近くに達している。開発に伴う発掘調査は、景気の現状に反映した公共事業の増大もあり依然増加の傾向を示している。以下、昨年度に府内で行われた数多くの発掘調査のうち、主なものについて調査成果の概要を紹介する。

縄文時代

例年同様、まとまった調査例は少ない。その中で、山城地域では散発的ながら当時期に関する遺跡の調査が行われ、本地域の乏しい資料を補うことになった。山城町千両岩遺跡では、古墳時代後期の群集墳の調査に伴って、縄文時代早期の高山寺式の押型文土器片が出土した。京都市北白川追分町遺跡では、中期から後・晩期の土器と共に、トチの実を集積する晩期の土坑がみつかり、中臣遺跡では、石皿等の遺物が出土した。南山城地域の木津町燈籠寺遺跡では、奈良時代の遺物を含む河川堆積層の下層から、中期から後期にかけての土器がまとまって出土した。これらの土器群は、従来の土器編年から５群に分けることができ、中期後葉の船元Ⅱ期から後期末葉の宮滝式まで継続して認められることから、今回の調査地の近辺に長期にわたって営まれた集落跡が存在するものと考えられる。同町の弓田遺跡で、小片ながら口縁に突帯文をもつ晩期の船橋Ⅱ式土器が、恭仁宮跡に近接する加茂町金ケ辻遺跡でも、河川堆積層から滋賀里Ⅱ式を含む晩期の土器がまとまって出土しており、これまで資料の少なかった南山城地域のこの時期に有益な資料を提供した。また、乙訓地域でも、向日市石田遺跡で土坑群、長岡京市開田城ノ内遺跡で土器棺墓などが調査されており、晩期に属する資料の発見が目立った。

弥生時代

(集落跡)　弥生前期の注目される調査として、京都市の京都大学総合人間学部構内遺跡からみつかった府内最古の水田跡があげられる。水田跡は、畔によって短冊形と小方形状に整然と区画されており、耕作面からは田起こしの跡と思われる凹凸の痕跡がみつかった。長岡京市南栗ケ塚遺跡では、布目圧痕をもつ前期の壺形土器片がみつかった。中期以降の調査は、数多く行われている。府北部では、福知山市興・観音寺遺跡で中期の集落に伴う環濠跡の一部がみつかった。弥栄町オテジ谷遺跡では、丘陵頂部から中期の竪穴式住居跡１基がみつかり、丹後地域の高地性住居の例として注目される。園部町今林遺跡では、後期末～古墳時代初頭にかけての円形と方形の竪穴式住居跡10基以上が、丘陵斜面から密集してみつかった。特に、最高所にある径8.2mの円形

付表　平成６年度発掘調査地一覧表

番号	遺跡名	種別	所在地	担当者	調査期間	概要
1	黒部製鉄遺跡	生産跡	弥栄町	増田孝彦	4/18～3/3	製鉄炉３基、炭窯18基
2	糖谷城跡	城　跡	弥栄町	増田孝彦	9/13～12/22	郭跡
3	奈具墳墓・奈具古墳群	古　墳	弥栄町	河野一隆	5/13～10/13	弥生墳墓７基、木棺直葬墳３基
4	奈具岡古墳群・奈具岡南古墳群	古　墳	弥栄町	河野一隆	9/9～12/22	顕著な遺構・遺物なし、古墳５基確認
5	左坂古墳群	古　墳	大宮町	石崎善久 田代　弘	7/25～3/3	Ｂ支群５基、Ｃ支群８基
6	裾谷横穴群	横　穴	大宮町	筒井崇史	5/17～10/13	横穴２基、竪穴式住居跡26基
7	北谷古墳群	古　墳	久美浜町	田代　弘	4/25～10/21	木棺直葬墳４基
8	石ヶ原古墳群・滝谷遺跡	古　墳	丹後町	柴　暁彦 筒井崇史	10/7～2/24	竪穴式住居跡、古墳状隆起９基
9	竹野遺跡	集落跡	丹後町	柴　暁彦	7/25～9/22	中世の集石土坑
10	ニゴレ遺跡ほか	生産跡	弥栄町	岡崎研一	4/18～2/24	製鉄炉、炭窯、祭祀遺構
11	奈具岡遺跡(府道)	集落跡	弥栄町	柴　暁彦	5/23～2/16	流路、竪穴式住居跡１基以上、溝
12	金谷１号墓	墳　墓	峰山町	石崎善久	5/20～9/2	墳丘墓、主体部17基
13	定山遺跡	集落跡	岩滝町	黒坪一樹	6/21～7/22	谷部流路
14	青路古墳	古　墳	舞鶴市	野島　永	12/5～12/22	顕著な遺構・遺物なし
15	銭塚古墓	古　墓	舞鶴市	野島　永	2/6～2/16	顕著な遺構・遺物なし
16	山尾古墳	古　墳	綾部市	野島　永 野々口陽子	4/18～9/13	横穴式石室墳、方形４段築成、基壇状列石
17	大俣城跡	城　跡	舞鶴市	引原茂治 尾崎昌之 大岩洋一	5/12～1/27	主郭、帯郭、柵列、建物跡
18	西飼神社遺跡	散布地	舞鶴市	黒坪一樹	4/18～5/27	顕著な遺構・遺物なし
19	洞中古墳	古　墳	舞鶴市	尾崎昌之	4/20～6/16	古墳状隆起、近世墓
20	龍尾寺跡	散布地	舞鶴市	引原茂治	5/9～5/12	顕著な遺構・遺物なし
21	今林古墳群・今林遺跡	古　墳	園部町	野々口陽子	9/7～3/3	木棺直葬墳、竪穴式住居跡、焼土坑
22	塔遺跡	集落跡	京北町	小池　寛	6/28～8/12	弥生時代流路、甕棺墓、平安時代土坑
23	引地城跡	城　跡	大江町	黒坪一樹	10/7～11/29	主郭、帯郭、建物跡
24	亀山城跡	城　跡	亀岡市	尾崎昌之 引原茂治	9/21～2/27	近世屋敷跡、石垣・土坑・井戸他
25	長岡京跡	都城跡	向日市	小池　寛	11/7～3/3	条坊側溝、掘立柱建物跡
26	上津屋遺跡	散布地	八幡市	岸岡貴英	5/13～5/24	顕著な遺構・遺物なし、噴砂
27	内里八丁遺跡	集落跡	八幡市	竹原一彦	5/9～3/3	竪穴式住居跡、掘立柱建物跡、流路
28	若林遺跡	集落跡	宇治市	岸岡貴英	7/18～9/9	弥生～中世土坑、建物跡他
29	宇治市街遺跡	集落跡	宇治市	森正哲次	10/4～12/20	土坑・溝状遺構
30	北稲遺跡・柿添遺跡	集落跡	精華町	伊賀高弘	7/20～2/27	竪穴式住居跡、流路、掘立柱建物跡
31	弓田遺跡	集落跡	木津町	石井清司 橋本　稔	4/18～12/27	弥生時代溝、平安時代井戸、建物跡
32	梅谷瓦窯跡	生産跡	木津町	有井広幸	4/11～1/20	瓦窯跡３基、灰原
33	市坂３号墳	古　墳	木津町	石井清司	6/3～7/14	古墳状の隆起、顕著な遺構なし
34	市坂瓦窯跡	生産跡	木津町	森島康雄	4/11～11/17	瓦窯跡２基
35	釜ヶ谷遺跡	散布地	木津町	石井清司	1/23～2/27	流路・祭祀遺物

36	燈籠寺遺跡	集落跡	木津町	伊賀高弘	4/18～7/12	流路跡、溝、建物跡ほか
37	甕原離宮推定地	離宮跡	加茂町	有井広幸	11/7～12/14	溝跡、瓦片多数
38	金ヶ辻遺跡	散布地	加茂町	森島康雄	8/22～9/28	縄文土器、弥生土器
39	長岡京跡・東土川遺跡(PA工区)	都城跡 集落跡	京都市	戸原和人 竹井治雄 石尾政信 岩松　保 中川和哉 岸岡貴英 森島康雄 (鍋田　勇)	4/11～2/27	条坊側溝、掘立柱建物跡、流路(堰)、方形周溝墓ほか
40	長岡京跡 (向日工区)	都城跡	向日市			
41	長岡京跡 (下植野工区)	都城跡	大山崎町			
42	長岡京跡	都城跡	長岡京市	野島　永	6/7～9/5	建物跡、平安時代溝、中世墓ほか

竪穴式住居跡は、調査以前から皿状の窪地として地表に現われていたものであった。府南部では、京都市上久世遺跡で集落の環濠とみられる溝と中期から後期の竪穴式住居跡が、西京極遺跡では、中期の竪穴式住居跡６基が調査され、木津町弓田遺跡では後期の流路跡がみつかった。

(墳墓)　丹後の弥栄町奈具墳墓群では、中期の台状墓７基と方形周溝墓２基が調査された。台状墓のうち３基は、長辺約20m・短辺約10mを測る大型の墳墓で、各墳頂部から箱形木棺を墓壙に納める多数の埋葬施設がみつかった。棺上に目印の標石を置くものがあり、また、棺上や墳墓の区画の溝内からは、供献された土器類がみつかった。葬られた人々は、水晶等を用いて玉作りを行っていた奈具岡遺跡の村人達と考えられる。峰山町金谷１号墓では、後期に属する一辺14m・高さ２mの台状墓が調査された。墳頂部や裾部から合わせて17基の埋葬施設がみつかり、各棺内から、鉄剣・鉄鏃・ヤリガンナ等の鉄器類のほか、ヒスイ製勾玉や約400個を数えるガラス小玉等の多数の玉類がみつかった。埋葬に当たっては、箱形と舟形の２種類の異なった形態の木棺が使用されており、被葬者の出身地の違いや性別を反映するものと考えられている。方形周溝墓については、前述の奈具墳墓群・西京極遺跡(２基)のほか、中期のものが北白川追分町遺跡・東土川遺跡で、後期のものが京都大学構内遺跡でみつかっている。また、京北町塔遺跡では、甕棺墓がみつかっている。

古墳時代

(集落跡)　府北部の丹後町滝谷遺跡から前期末の竪穴式住居跡１基が、京北町塔遺跡では、後期の掘立柱建物跡群がみつかっている。府南部の、向日市鴨田遺跡と中海道遺跡では、これまでの調査と同様に、弥生末から古墳前期にかけての竪穴式住居跡群や溝等がみつかった。八幡市内里八丁遺跡では、前期の方形竪穴式住居跡５基と掘立柱建物跡１棟、中期の造り付けカマドを持つ竪穴式住居跡３基がみつかり、遺跡内でのこの時期の居住区域が判明した。出土遺物としては、須恵器の有孔無頸壺や庄内式から布留式に至る時期の土器がある。精華町北稲遺跡では、竪穴式住居跡６基が調査され、町内では初めての前期の集落跡の発見となった。このほか、昨年度の調査で注目された出土遺物としては、長岡京跡左京第339次調査の完形の木製壺鐙、同334次調査の斜縁神獣鏡の破片、北稲遺跡・西隼上がり遺跡の韓式系土器片がある。

(生産遺跡)　宇治市西隼上がり遺跡では、５世紀末～６世紀初頭頃の半地下式の埴輪窯１基と工房跡と思われる竪穴式住居跡がみつかった。灰原の状況からみて比較的小規模な操業であったと考えられる。これまで府内での埴輪窯の調査は、木津町の瓦谷埴輪窯と上人ヶ平埴輪窯の前半期に属する２例のみであり新たな資料が加わった。

(古墳)　古墳の調査は、例年同様、特に丹後地域で目立った。まず前期古墳の調査としては、久美浜町北谷古墳群がある。その中の１号墳は、長軸40m・短軸36m・高さ５mの楕円墳で、上段墓壙の長さ約6.5mを測る棺の内部から、玉杖等の飾りに用いられたとされる碧玉製紡錘車形石製品や鉄剣・鑿がみつかった。出土した土器から４世紀中頃に築造されたこの地域の首長墓と考えられている。また、５号墳では、琥珀製勾玉等の玉類と鉄製ヤリガンナがみつかっている。府内でも基数において最大規模をほこる大宮町左坂古墳群は、継続して調査が行われており、今年度は、Ｂ支群５基、Ｃ支群７基の調査があった。この結果、木棺直葬や土器棺墓等の埋葬施設から、剣・刀等の鉄製武器類・工具類・ガラス小玉等の遺物が出土し、４世紀後半から５世紀段階にかけての築造過程が明らかになってきた。このほか府北部では、網野町遠所古墳群や奈具古墳群で前期から中期にかけての古墳の調査があったほか、大宮町裾谷古墳群、宮津市中村13号墳で中期の木棺直葬墳が調査された。丹波南部の園部町今林２号墳は、直径15mを測る円墳で、５世紀末から６世紀中頃にかけての４基の木棺直葬の埋葬施設が営まれ、鉄製楕円形鏡板付轡等の馬具や須恵器の器台が副葬されていた。同じく園部町徳雲寺北古墳では、埴輪・葺石の存在が試掘調査でわかった。宇治市若林遺跡からは、墳丘の存在は明らかでないが、棺底に河原石を敷く長さ1.8mの土壙墓からヒスイ製の勾玉４点のほか、管玉・棗玉・臼玉等約456個の玉類と鉄製刀子が出土した。構築時期は、４世紀末から５世紀初頭と考えられる。同じ市内の菟道遺跡では、墳丘を削平された、全長34m・後円部径20mの造り出し付きの前方後円墳がみつかった。周濠内からは、６世紀中頃～後半期の人物・馬・石見型盾等の形象埴輪や円筒埴輪のほか、須恵器・金環等が出土し、門ノ前古墳と名付けられた。５世紀前半の木製笠形埴輪の発見で有名な長岡京市今里車塚古墳からは、埴輪棺のほか、後円部北西部の周濠調査で、直線と孤線のレリーフを刻んだ木製腰掛の一部がみつかった。大型古墳の範囲確認調査も、城陽市久津川車塚古墳・同芭蕉塚古墳・宇治市二子塚古墳・八幡市西車塚古墳等で行われた。次に、横穴式石室墳の調査としては、長岡京市稲荷塚古墳では、昨年行われた調査で全長45m・後円部径29mの埴輪・葺石をもたない前方後円墳であることがわかったが、今回、前方部から木棺直葬、さらに後円部から横穴式石室の、２基の埋葬施設がみつかった。木棺墓出土の遺物から古墳の築造時期は６世紀前半とみられ、乙訓地域では向日市物集女車塚古墳と並んで最古の横穴式石室であることが明らかになった。加悦町滝岡田１号墳では、径20mの円墳から全長9.82m・玄室長4.12mを測る片袖式の横穴式石室がみつかり、多数の須恵器や馬具類と共に金銅装の大刀が出土した。石室床面の敷石の下からは、「もがり」の施設と思われる４個の柱穴もみつかっており、築造時期は６世紀末～７世紀初めとされている。山城町千両岩古墳群では、範囲確認のため５基の円墳の試掘調査が行われ、このうち３基で横穴式石室が調査された。２号墳は墳丘径20mを測り、横穴式石室の玄室側壁はやや持

ち送りをもって構築されていた。出土した須恵器や馬具類から本古墳群の築造時期が6世紀初頭から7世紀前半であることが判明し、山城最古の寺院跡である高麗寺跡を建立した渡来系氏族高麗氏との関連も考えられている。このほか、久美浜町塚ヶ谷2号墳、田辺町宮ノ口4号墳で横穴式石室の調査があった。

飛鳥・奈良時代

(集落跡)　70数次におよぶ発掘が行われている京都市中臣遺跡では、昨年度の調査でも古墳時代から室町時代にかけての竪穴式住居跡や掘立柱建物跡が多数みつかったが、これまで未確認であった7世紀後半の竪穴式住居跡8棟が新たにみつかり遺跡の空白時期を埋めることになった。京都市小倉町別当町遺跡では、竪穴式住居跡10基が調査され、全国の出土例としては初めての「高志」の文字が線刻された無文銀銭1枚がみつかった。精華町北稲遺跡では、飛鳥時代頃の掘立柱建物跡6棟がみつかっている。府北部の大宮町裾谷横穴群や同じ丘陵の反対斜面にあるエノボ横穴周辺の調査では、丘陵裾部や斜面を造成した平坦部から、飛鳥時代から奈良時代にかけての竪穴式住居跡や掘立柱建物跡が多数みつかった。これらの住居跡と同時期に営まれた横穴墓との関連が注目される。

(都城跡)　加茂町恭仁宮跡では、宮域北辺の範囲確認調査が本年も行われた。今回は、昨年度にみつかった北面大垣の延長と思われる遺構と、東面大垣との交点に当たる北東隅がみつかった。この結果、宮域の南北長が約750mであることが確かめられ、平城宮の約四分の三の規模をもつことがわかった。また、同町甕原離宮推定地の試掘調査では、離宮や国分尼寺に直接つながる遺構はみつからなかったが、恭仁宮跡で出土しているのと同じ文字瓦が出土し注目される。

(寺院跡)　山城町蟹満寺跡では、寺域の範囲確認調査が行われ北側にさらに広がることがわかった。木津町燈籠寺廃寺では、寺域北東部の調査で白鳳期(7世紀後半)から奈良時代の瓦類や墨書土器等がみつかり、推定通り一辺が約130mの寺域規模をもつことがわかった。この寺跡を山城国分尼寺跡に当てる説があるが、出土瓦に、山城国分寺跡と同笵の軒瓦がみられ注目される。

(墳墓)　綾部市山尾古墳では、4段の基壇状の石積みをもつ古墳終末期の横穴式石室墳が調査された。丘陵頂部の斜面を「L」字形にカットした面に、一辺の長さが上段で7.6m、下段で8.9mの二段築成の墳丘を築き、各段には石垣状の外護列石が巡っていた。内部には、奥部にのみ敷石をもつ全長5.4mの無袖式の横穴式石室を構築し、石室前面の斜面下方には、さらに二段にわたって外側を「コ」の字形に列石が取り囲むテラス状の平坦面が造られていた。列石を巡らすテラスの前面幅は、最も外側の列石で21.6m、内側で14mを測る。築造時期は、7世紀中頃から後半と考えられ、全国的にも珍しい資料として注目される。前述した大宮町裾谷横穴群で調査された2基の横穴は、成人の埋葬が困難な小規模なもので、内部から焼骨や炭がみつかっていることから火葬骨を納めたものと考えられている。同様な事例はこれまでに、大宮町左坂横穴B支群の1基でもみつかっている。同じく、エノボ横穴では、地下式横穴に類似する横穴2基が調査された。

(生産遺跡)　木津町市坂瓦窯跡は、平城宮大膳職造営に係わる大規模な瓦生産工房跡である上人ヶ平遺跡に付属する窯跡で、昨年度の試掘調査によって8基の窯跡の存在が確かめられている。

今回、このうちの２基が調査され、焼成室床面に火床、燃焼室との境に分焔柱をもつ、非常に残りの良い地下式平窯の構造が明らかになった。興福寺の創建瓦を焼いていたことで知られる木津町梅谷(うめだに)窯跡では、３基の窯跡と灰原の調査が行われ、同一群内で、窖窯から平窯へと試行錯誤を繰り返しながら窯の構造が変遷していく様子が、これまでの調査成果と合わせて明らかになった。製鉄遺跡の調査は、弥栄町ニゴレ遺跡と黒部(くろべ)製鉄遺跡で、奈良後半から平安時代にかけての製鉄炉跡が調査された。ニゴレ遺跡では、製鉄に係わる祭祀を行ったとみられる炉を模した祭壇状の遺構がみつかった。

平安・鎌倉時代

(都城跡)　長岡京・平安京の調査は本年度も活発に行われた。長岡京左京二条二坊十町の推定東院跡西外郭の調査が行われ、大型建物跡２棟と共に勅旨所の存在を示す刻印瓦がみつかった。京域の北限に近い左京北一条二坊四町では、東二坊坊間西小路が確認され、祭祀遺物を含む流路内から民部省の施設である「廩院」の文字が記された墨書土器がみつかった。名神高速道路パーキング新設に伴って行われている左京南一条四坊周辺の調査では、条坊大路側溝や長岡京期から平安時代にかけての掘立柱建物跡が多数みつかっている。左京四条一坊十町では、東一坊坊間東小路の周辺から吉志部瓦窯産の軒瓦や緑釉・灰釉陶器、凝灰岩等がみつかっており、従来から指摘されている通り、長岡京廃都直後に貴族の邸宅か何らかの公的施設があったものと考えられる。京域の北側に隣接する向日市久々相(くぐそう)遺跡からは、奈良時代中頃から平安初期にかけての掘立柱建物跡群がみつかり、京外にもこの時期の大型の建物跡が広がることがわかった。また、中海道遺跡でも平安時代の官衙的様相をもつ建物跡がみつかっている。このほか昨年度の京域内の調査では、写実的な立体人形、漆紙文書、延暦四(785)年・同十三(794)年の年紀をもつ木簡等、注目される遺物がみつかっている。

平安京跡では、立会調査を含めたきめの細かい調査が行われている。宮内では、立会調査で大極殿の基壇跡が初めてみつかり「平安建都1200年」の記念の年に彩りを添えた。また、内裏を囲む西側回廊の凝灰岩切石基壇の地覆石や雨落溝が、極めて残りの良い状態でみつかった。左京六条四坊十一町では、河原院に付属する池跡がみつかった。このほか、右京八条二坊二町周辺の調査では、西靭負小路側溝が確認され、四行八門制に基づく平安前期の町割りがあきらかになった。

(集落跡)　八幡市内里八丁遺跡では、祭祀遺物を含む奈良末から平安初期の溝や暗渠排水の木樋をもつ池状遺構が調査され、周辺から多数の墨書土器のほか、和同開珎11・萬年通寶・神功開寶の銅銭がみつかった。この遺跡は、古山陰道の推定線に沿っており、これまでの調査成果を合わせ役所等の施設の存在が考えられる。

(生産遺跡)　京都大学構内遺跡では、平安時代中期の梵鐘鋳造遺構３基がみつかった。これまでにみつかったものを合わせて５基になり、大規模な梵鐘工房であったことがわかった。JR京都駅構内の八条院(はちじょういん)町の調査地では、鎌倉から室町期にかけての銅磬等の仏具や和鏡を生産した鋳造工房跡がみつかり、中世職人町の姿がうかびあがってきた。

(寺院跡)　京都市岡崎公園の最勝寺(さいしょうじ)跡の立会調査では、平安時代後期の多量の軒瓦がみつかっ

た。宇治市平等院では、鳳凰堂後部にある池の調査で入り江のある石敷きと、せせらぎをもつ創建当時の浄土庭園がみつかった。また、鳳凰堂の南東120mの地点からは、康平四(1061)年に建てられた多宝塔の基壇跡がみつかった。

室町～江戸時代

(寺院跡)　宇治市白川金色院跡の範囲確認調査では、坊跡から室町時代の礎石建物跡３棟と庭園跡がみつかり、各建物の配置や回廊の取り付く構造から、寝殿造りから書院造りへと変遷する過渡期の主殿造りの貴重な遺構であることがわかった。

(城郭跡ほか)　舞鶴市大俣城跡・大江町引地城跡では、戦国期の山城の主郭と帯曲輪の一部が調査された。近世城郭については、福知山城跡で本丸の石垣が、舞鶴市田辺城跡・亀岡市亀山城跡では、武家屋敷の調査が行われ、城内での生活の様子があきらかになってきた。その他、福知山市観音寺遺跡では、溝によって方形に区画された中世の屋敷跡がみつかった。

（つじもと・かずみ＝当センター調査第２課調査第３係長）

平成６年度当調査研究センター調査遺跡関係資料

○現地説明会資料(開催日)

94-04.市坂瓦窯跡(94.5.21)　94-05.上人ヶ平遺跡(94.5.21)　94-06.瓦谷遺跡第７次・瓦谷埴輪窯(94.5.21)　94-07.山尾古墳(94.7.14)　94-08.金谷古墳群(94.8.26)　94-09.黒部製鉄遺跡(94.9.9)　94-10.梅谷瓦窯跡(94.9.15)　94-11.北谷古墳群(94.9.29)　94-12.奈具墳墓群・奈具古墳群(94.10.7)　94-13.裾谷横穴群(94.10.12)　94-14.ニゴレ遺跡(94.12.8)　94-15.内里八丁遺跡(94.12.21)　94-16.今林２号墳・今林遺跡(94.12.20)　95-01.長岡京跡左京第333・334・336・337次(95.2.6)　95-02.北稲遺跡(95.2.21)　95-03.左坂古墳群第４次(95.3.3)

○中間報告資料(開催日)

94-08.燈籠寺廃寺・燈籠寺遺跡(94.6.28)　94-09.塔遺跡(94.8.4)　94-10.長岡京跡左京第329・330・331次(94.8.25)　94-11.若林遺跡(94.9.1)　94-12.長岡京跡右京第474次(94.9.2)　94-13.竹野遺跡(94.9.21)　94-14.引地城跡(94.12.2)　94-15.弓田遺跡(94.12.19)　95-01.長岡京跡左京第353次(95.2.24)　95-02.滝谷遺跡・上野古墳群(95.2.23)　95-03.亀山城跡第４次(95.2.27)

○速報及び略報

京都府埋蔵文化財情報　第53号(1994.9)

(略報)「長岡京跡左京第332次」「上津屋遺跡」「燈籠寺遺跡・燈籠寺廃寺跡」「梅谷瓦窯跡・中ノ島遺跡」

京都府埋蔵文化財情報　第54号(1994.12)

山尾古墳　(略報)「竹野遺跡」「定山遺跡」「京都縦貫道関係遺跡」「塔遺跡」「若林遺跡第３次」「長岡京跡右京第474次」

京都府埋蔵文化財情報　第55号(1995.3)

金谷１号墓　市坂瓦窯跡　(略報)「北谷墳墓群」「奈具墳墓群・奈具古墳群」「裾谷横穴」「宇治市街遺跡」「金ヶ辻遺跡」「甕原離宮推定地」「梅谷瓦窯跡」「弓田遺跡」「長岡京跡左京第329・330・331次」

京都府埋蔵文化財情報　第56号(1995.6)

(略報)「滝谷遺跡・石ヶ原古墳群」「ニゴレ遺跡」「引地城跡」「今林２号墳・今林遺跡」「大俣城跡」「青路古墳・銭塚古墓」「丹波亀山城跡」「内里八丁遺跡」「北稲遺跡」「釜ヶ谷遺跡」「長岡京跡右京第466次」

左坂古墳群第７次の発掘調査

石崎善久

１．はじめに

今回の調査は、丹後国営農地開発事業周枳団地造成工事に先立って実施した。左坂古墳群は、中郡大宮町字周枳小字左坂に所在する。丘陵及び周辺部分には、総数110基以上から構成される左坂古墳群をはじめ、弥生後期の墳墓群である左坂墳墓群、古墳時代後期末から奈良時代にかけて営まれた左坂横穴群、里ヶ谷横穴群などが確認され、そのうちの一部については調査が実施されている[注1]。左坂古墳群では、平成２年度から調査が着手され、当センターが４次にわたる調査を実施し、京都府教育委員会、大宮町教育委員会の調査とあわせると今回の調査は第７次調査となる。

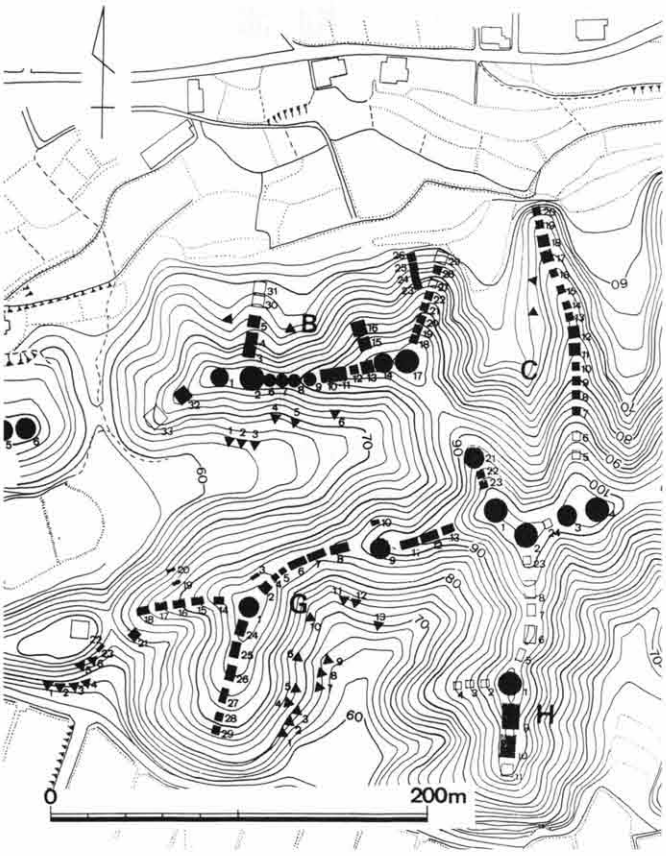
本年度は、左坂古墳群Ｂ支群のうち、10～14・17号墳を対象に、平成６年７月25日から平成７年３月３日まで、約1,200m²の調査を実施した。

２．調査概要

今回調査を実施した古墳は総数５基である。10・11号墳については、調査の結果１基の古墳であることが判明した。Ｂ支群については、今回の調査ですべての古墳の調査を実施したこととなり、今後、古墳番号については再整理を行う予定であるため、ここでは調査時の番号を用い、個々の古墳について説明を加える。

B10・11号墳　12号墳に隣接する地山成形によって平坦面を造り出したいわゆる「階段状地形を呈する方墳」である。墳丘西側は、Ｂ８・９号墳の造成により削平されており、８・９号墳に先行する古墳であることは明らかである。主体部は、平坦面中央部で東西に主軸をとる木棺直葬墓１基を検出した。墓壙は、地山面から掘り込まれる素掘りの形態であり、平面形態は隅丸長方形を呈する。規模は、検出面で長軸3.8m・短軸1.8mを測る。木棺痕跡は、墓壙を掘り下げる過程で検出した。棺材に赤色顔料が塗布されていたため、木棺痕跡は極めて明確に認識することができた。木棺は、長側板が木口板を挟み込む形態をとる箱形木棺である。木棺の

第１図　調査地位置図(1/25,000)



第２図　左坂古墳群分布図(部分)

規模は、内法で幅0.45m・長さ2.3mを測る。副葬品として棺内中央部南側で切っ先を西に向けた鉄剣が１点出土した。

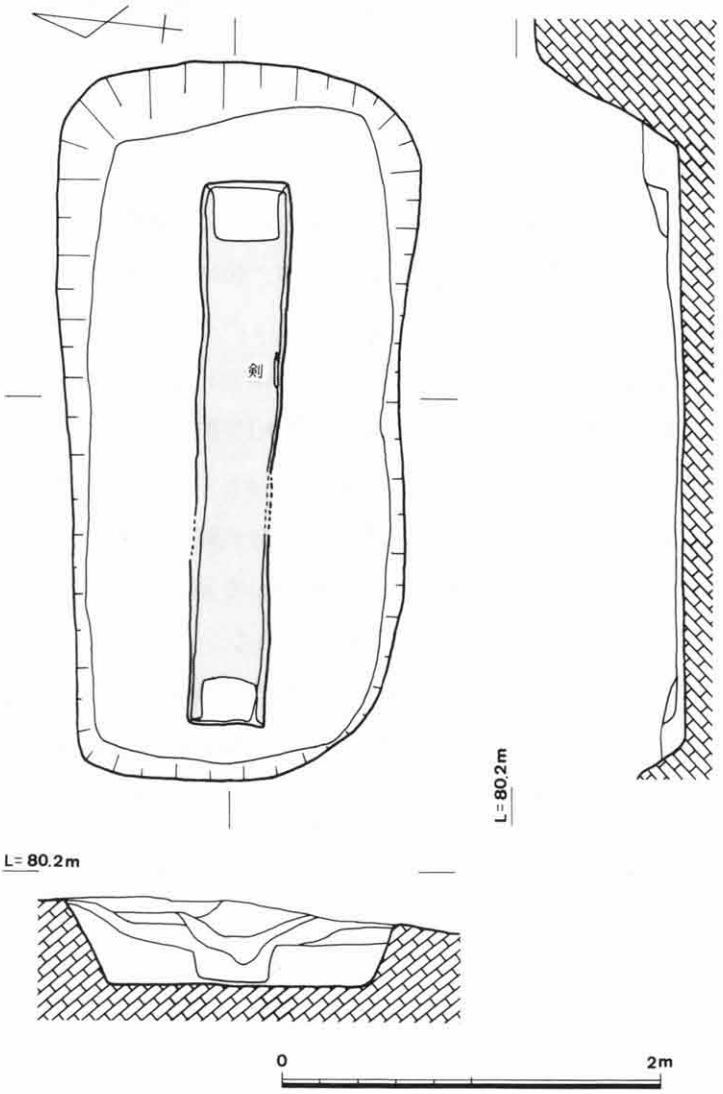
Ｂ12号墳　13号墳に隣接し、地山成形によって平坦面を造り出したいわゆる「階段状地形を呈する方墳」である。墳丘の造成は、北側斜面旧表土上にわずかに盛り土を施すことによって、平坦面の拡張を行っている。平坦面東側で南北に主軸をとる木棺直葬墓１基を検出した。墓壙は、平面隅丸長方形を呈し、地山面から二段に掘り込まれる。規模は長軸3.8m・短軸1.7mを測る。二段目は一段目墓壙中央部に掘り込まれ、木口部分には段を有さない。また、二段目は深さ約６cmと浅いことが特色である。木棺は、墓壙掘削中にその痕跡を検出した。棺固定土の平面的観察からみて、長側板が木口板を挟み込む形態をとる組合式箱形木棺と考えられる。規模は、内法で長軸2.5m・短軸0.4mを測る。墓壙掘削中に赤色顔料のブロックを検出した以外、副葬品は出土しなかった。

Ｂ13号墳　14号墳に隣接し、地山成形によって小規模な平坦面を造り出したいわゆる「階段状地形を呈する方墳」である。平坦面中央で南北に主軸をとる土器棺墓を１基検出した。墓壙は、平面隅丸長方形を呈し、地山から掘り込まれる素掘りの形態をとる。規模は長軸1.6m・短軸0.8mを測る。棺としては、大型の二重口縁壺と布留式の特色を有する甕を合い口に使用していた。これらの土師器は、両者とも口縁部の一部を打ち欠いており、打ち欠かれた口縁部は墓壙検出面上で出土した。また、壺内からは小型の竪櫛２点が検出された。おそらく被葬者の頭位に装着されていたものと推定される。

Ｂ14号墳　17号墳の西に隣接する地山成形による円墳である。17号墳とは溝により区画され、溝の状況から見て14号墳に後出することが明らかとなった。埋葬施設は、墳頂部平坦面で４基を確認した。中央に位置するものを第１主体部、第１主体部の南に位置するものを第２主体部、第２主体部の南に位置するものを第３主体部、第１主体部の北側に位置するものを第４主体部とする。

第１主体部は、主軸を東西方向にとる土壙墓と考えられる主体部である。墓壙平面形は、東側木口が若干広い隅丸長方形を呈する。規模は長軸1.7m・短軸0.5mを測る。土壙は、地山面から二段に掘り込まれ、木口部分には段を有さない形態をとる。掘り残された段の部分は幅７cmと極めて狭い。副葬品は検出されなかった。

第２主体部は、第１主体部の南に位置し、第３主体部に墓壙南長側辺を切られる木棺直葬墓である。墓壙は、平面隅丸長方形で、地山面から二段に掘り込まれる。二段目は、一段目墓壙中央部に掘り込まれ、四周に段を掘り残す形態をとる。木棺の痕跡は、明瞭にすることはできなかったが、土層断面観察の結果、二段目墓壙内に組合式箱形木棺を納めたものと判断された。墓壙の規模は、一段目検出面で長軸3.7m・短軸1.6m、二段目検出面で長軸1.9m・短軸0.5mを測る。副葬品として棺上東木口部で刀子１点を検出した。



第３図　左坂Ｂ10・11号墳主体部実測図

第３主体部は、第２主体部の南に位置する木棺直葬墓である。墓壙は、平面隅丸長方形を呈し、地山から二段に掘り込まれる。規模は長軸3.9m・短軸1.3mを測る。二段目は、一段目墓壙底面中央に掘り込まれ、木口部分には段を残さない構造をとる。木棺痕跡は、二段目墓壙を掘り下げる過程で検出した。木棺は、長側板が木口部分を挟み込む形態をとる組合式箱形木棺である。規模は、内法で長軸2.05m・短軸0.4mを測る。副葬品は検出されなかった。

第４主体部は、最も北に位置する小型の木棺直葬墓である。墓壙は平面隅丸長方形を呈し、地山から二段に掘り込まれる。規模は長軸2.5m・短軸1.0mを測る。二段目は、一段目墓壙底面中央に掘り込まれ、木口部分には段を残さない構造をとる。木棺の規模については明確には捉えきれなかったが、土層断面の観察結果や二段目墓壙の形状から見て、短い舟形木棺が納められたものと推測される。副葬品は検出されなかった。

Ｂ17号墳　Ｂ支群中の最高所に位置する円墳である。墳丘の造成は地山整形により行われ、盛り土は確認されなかった。埋葬施設は、墳頂部平坦面で２基の木棺直葬墓を検出した。中央に位置するものを第１主体部、第１主体部の東に位置するものを第２主体部とする。また、墳丘東南

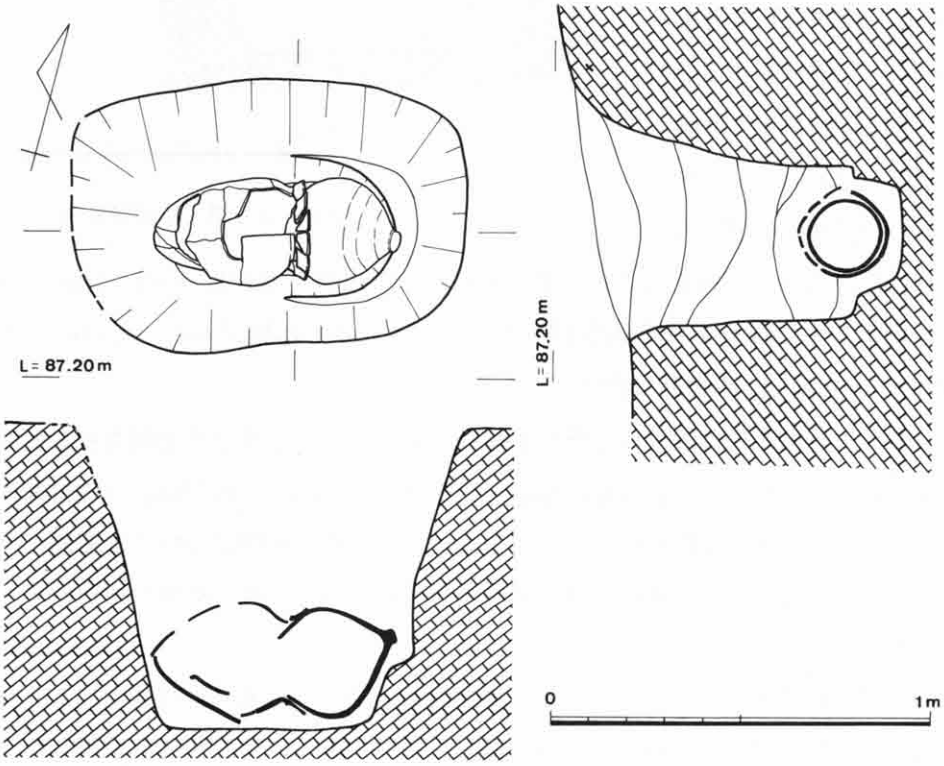
側裾部には僅かな平坦面があり、ここからも埋葬施設２基を検出した。西に位置するものを17号墳周辺第１主体部、東に位置するものを17号墳周辺第２主体部として説明を加える。

第１主体部は、主軸を東西にとる木棺直葬墓である。墓壙は平面隅丸長方形を呈する。規模は長軸3.7m・短軸2.6mを測り、過去に調査されたＢ支群の木棺直葬墓の墓壙に比較して長軸が短い。墓壙は地山面より二段に掘り込まれる。二段目は、一段目墓壙底部のやや南よりに掘り込まれ、木口部分には段を有しない。木棺痕跡は、二段目墓壙を掘り下げる過程で検出した。木棺痕跡は、棺材に赤色顔料が塗布されていたため、極めて明確に認識することができた。木棺は、長側板が木口板を挟み込む形態をとる箱形木棺である。木棺の規模は、内法で幅0.45m・長さ1.5mを測り、規模的にはやや短い木棺である。出土遺物には、棺上と考えられる位置からガラス小玉１点が検出されたほか、棺内中央部南側で長側板に平行した形でヤリガンナが１点検出された。

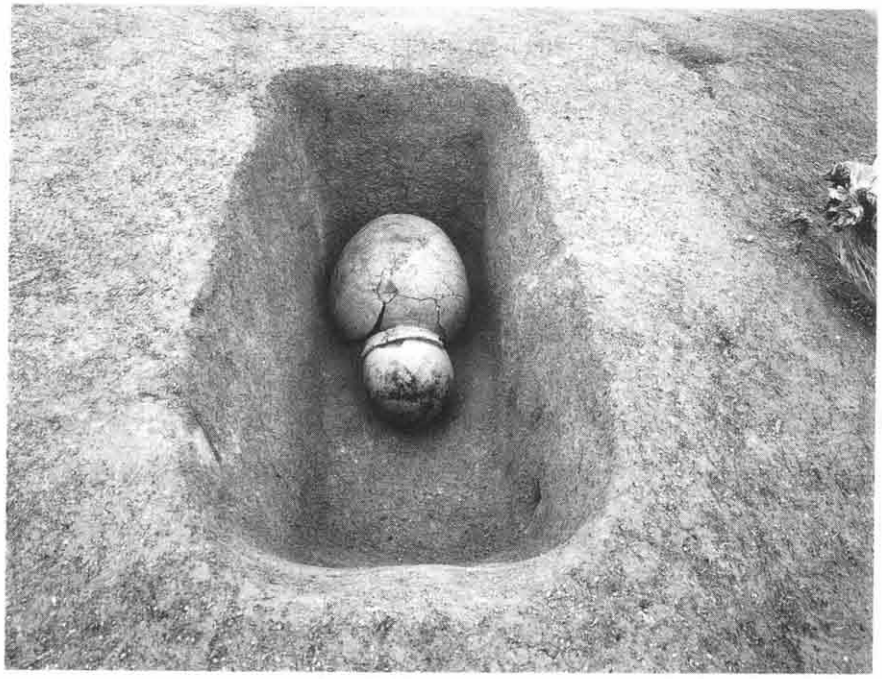
第２主体部は、第１主体部の東に隣接して築造された主軸を南北にとる木棺直葬墓である。第１主体部同様、赤色顔料を塗布した組合式箱形木棺を二段に掘り込まれた墓壙内に納めた形態をとる。墓壙の規模は長軸1.7m・短軸0.9mを測り、木棺規模は長軸0.7m・短軸0.2mを測る。第１主体部より小型であり、副葬品は検出されなかった。

周辺第１主体部は、主軸が東西方向の土壙墓である。墓壙平面形は隅丸長方形で、地山から直接掘り込まれる素掘りの形態をとる。規模は長軸0.8m・短軸0.4mの極めて小規模な土壙である。土壙内からは副葬品は検出されなかったが、土壙検出面で二重口縁壺が細片化した状態で出土した。

周辺第２主体部は、周辺第１主体部の東に位置する土器棺墓である。墓壙平面形は隅丸長方形



第４図　左坂Ｂ17号墳周辺第２主体部実測図(土器棺墓)



左坂Ｂ13号墳主体部全景(北から)

を呈し、規模は長軸1.0ｍ・短軸0.7ｍを測る。棺には、頸部から上半を打ち欠いた壺と完形のいわゆる山陰系甕を合い口に組み合わせて使用していた。なお、甕肩部には焼成後の穿孔が認められ、土器棺内からの排水を目的として開けられたと推測される。副葬品は認められなかった。

３．まとめ

今回は、Ｂ支群５基の古墳を調査し、平成２年度に京都府教育委員会の実施した調査と、平成５年度に当センターの実施した調査と併せ、Ｂ支群に存在する全ての古墳を調査したこととなった。これまでの調査結果と総合すると、Ｂ支群は古墳時代前期を中心に造営された古墳群であり、今回調査を実施したＢ17号墳が最も古い古墳であると考えられる。また、北側斜面に位置する「階段状地形を呈する古墳」は、曲刃鎌を副葬品に持つなどの点から、一部古墳時代中期に造営されたと考えられる。今後、出土遺物の整理・検討を通じ、群構造・形成過程の解明・丹後半島の前期古墳との編年的関係などを追求し、古墳時代前期における社会構造の復原作業などを行う上での基礎資料を提示していきたいと思う。

（いしざき・よしひさ＝現・兵庫県教育委員会）

注１　左坂古墳群ならびに周辺の遺跡の調査成果については以下の文献に報告が行われている。

左坂古墳群

肥後弘幸「(2)左坂古墳群」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1991)』　京都府教育委員会)　1991

石崎善久「(1)左坂古墳群」(『京都府遺跡調査概報』第60冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1994

左坂墳墓群

肥後弘幸「[７] 左坂墳墓群(左坂古墳群Ｇ支群)」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1994)』　京都府教育委員会)　1994

左坂横穴群

肥後弘幸「[２] 左坂横穴」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1993)』　京都府教育委員会)　1993

筒井崇史「(2)左坂横穴群(Ｂ支群)」(『京都府遺跡調査概報』第60冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1994

里ヶ谷横穴群

石崎善久「(2)里ヶ谷横穴群」(『京都府遺跡調査概報』第55冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1993

瓦谷遺跡の埴輪棺　再考

石井清司

1．はじめに

平成３年度に発掘調査を実施した瓦谷古墳群は、前方後円墳１基(１号墳、全長約48m)・方墳８基・円墳１基のほか、埴輪棺25基を検出し、その概要については「瓦谷遺跡・瓦谷古墳群の発掘調査」(注1)、「瓦谷遺跡の埴輪棺」(注2)で報告した。特に「瓦谷遺跡の埴輪棺」では整理作業の進んだ埴輪棺の検出状況を紹介し、埴輪棺の規模と時期・埴輪棺を含めた瓦谷古墳群が佐紀盾列古墳群の影響下に造営されたことを説明したが、埴輪棺の棺構造・各埴輪棺と古墳群との関連について十分説明しきれなかった感がある。このため、今回は埴輪棺の棺構造を中心に検討を加えたのち、その検討をもとに古墳と埴輪棺の関係について論述していきたい。

2．埴輪棺の概要とその問題点

大正九年に発掘された香川県山崎の調査以降、埴輪棺の調査例は増大しており、管見にのぼる限り、その調査例は350例以上を数える。特に古市古墳群を中心とした土師の里周辺では77基を数え(注3)、埴輪棺の密集する地域として知られている。また埴輪棺については、橋本博文氏の詳細な論文があり(注4)、円筒棺・埴輪棺の分布と遺跡におけるその出土位置、その年代と円筒棺・埴輪棺の起源、被葬者と埴輪工人の関連など総括的に論じられており、円筒棺・埴輪棺は言い尽くされた感がある。

350例以上を数える埴輪棺については、墓壙及び棺内からの副葬品の出土例が少なく、棺身や棺小口に使用された埴輪の年代をもって埴輪棺の時期を決定される場合が多い。この場合、近接した古墳で「樹立されるべき」埴輪を用いた場合には、棺身として使用した時期と本来の用途である古墳に樹立された時期との時間幅を検討する必要があり、明確に埴輪棺の時期が決定できない。また笠井敏光氏が指摘しているように(注5)、「ひとつの棺が時期の異なる埴輪棺をもって構成されて」いて１世紀以上の隔たりがあるもの、「構成されている埴輪と副葬品と思われる土器との間に１世紀以上の時間が横たわる」例があり、棺身の埴輪がそのまま埴輪棺の年代とはならないものもある。

埴輪棺の棺身内には、被葬者の性別・年代のわかるものが10例程度あるが、その大半の埴輪棺では骨や歯の遺存する例がなく、棺の長さや枕の位置から被葬者を想像する程度である。この場合、橋本氏も指摘しているように愛知県岩場古墳２号棺の85cm×20.5cmという棺の規模にもかかわらず成人の大腿骨が出土しており、棺の長さがそのままその被葬者の身長を表わすともいいき

れないものがある。

埴輪棺の被葬者の性格については、古墳の造営に関与した被葬者の墓が埴輪棺であり、土師氏につながるという指摘もあるが、最近の調査成果によると、埴輪を樹立したある程度の規模の古墳には、その古墳に近接して埴輪棺が作られている傾向にあり、埴輪棺の被葬者をそのまま土師氏に結びつけてよいものかどうか疑問が残る。

このように埴輪棺についてはなお多くの問題点を残しているが、なんらかの形で整理する必要がある。このため、まずは埴輪棺の棺身構造を分類してその整理を行ないたい。

3．埴輪棺の棺身構造の分類

瓦谷古墳群では前述のように25基の埴輪棺を検出した。これらの検出状況をもとに埴輪棺の棺身構造を分類すると以下のようになる。

Aタイプ；Aタイプは単棺構造のものである。瓦谷埴輪棺10に代表されるように1個体の普通円筒あるいは朝顔形埴輪を使用したものである。

Aタイプの棺身構造には、本来古墳に樹立されていたものかあるいは樹立するためにつくられた埴輪を埴輪棺に再利用しているもの(A－bタイプ)のほか、当初より棺として使うためにつくられた特製埴輪(橋本氏のいう円筒棺)があり、これをA－aタイプと呼んでおく。なお、山城地域でのA－aタイプの埴輪棺は宇治市金比羅山古墳[注6]、城陽市下大谷古墳[注7]などがある。

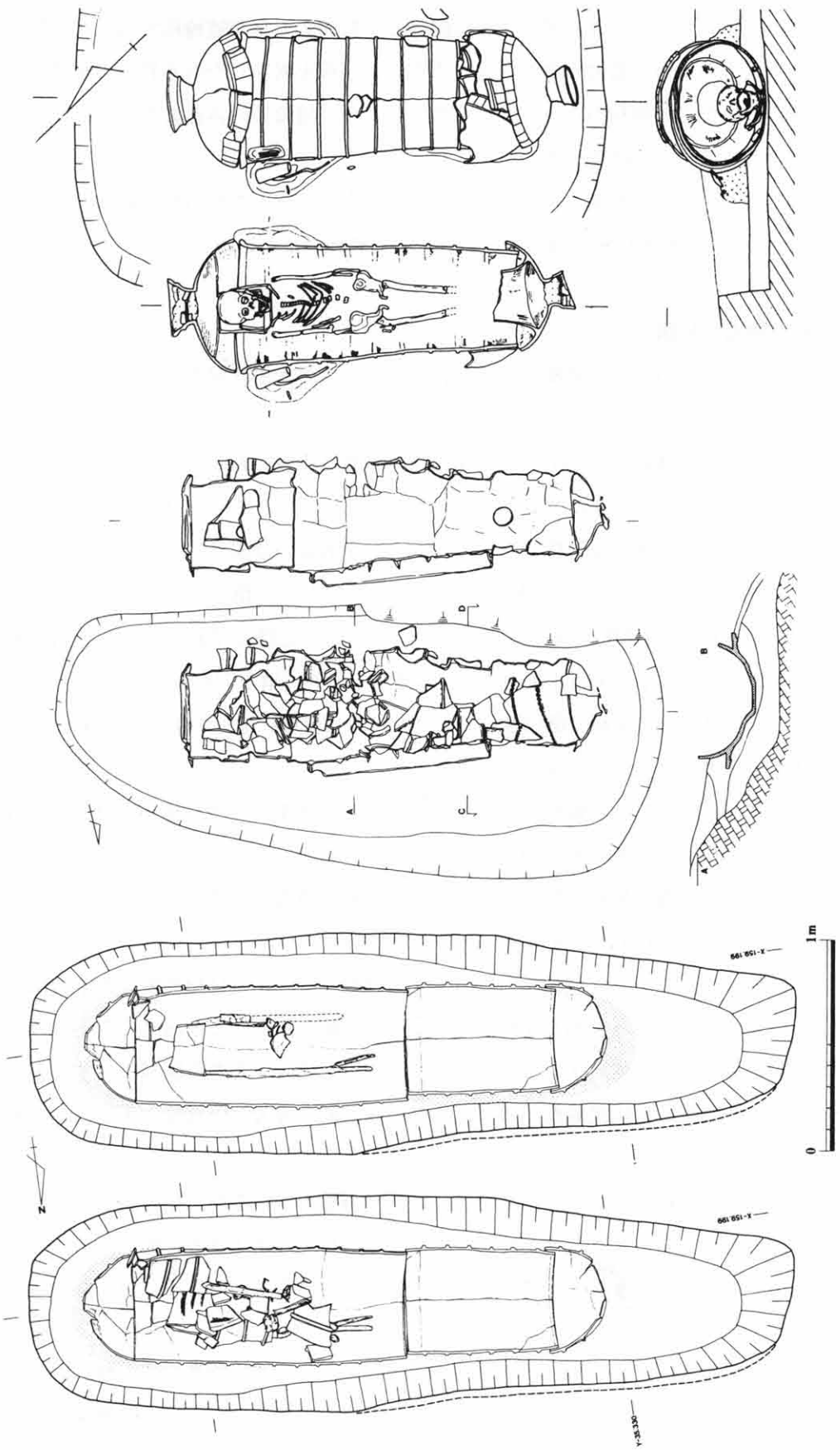
Bタイプ；棺身が2個体以上の埴輪で構成されており、一方の埴輪に他方の埴輪を口縁部(あるいは底部)から入れ口状に挿入したものである。

埴輪棺16・24など瓦谷古墳群では埴輪棺の大半がこのタイプに属する。埴輪棺16・24とも棺内に枕と思われる埴輪片が出土しており死者の頭位を推定することができる。これによると、死者の頭位とおもわれる部分の棺身の埴輪は底部を打ち欠いた埴輪を使用し、その下半には1個体の完形の埴輪を使用しており、これをB－aタイプと呼んでおく。

B－aタイプの埴輪棺のうち、瓦谷埴輪棺24での調査の観察では、足元に相当する西小口部に蓋形埴輪の笠部を固定する溝を掘り、胴及び脚部を覆う盾形埴輪を固定すると同時に西小口の蓋形埴輪を固定し、遺骸を足元から挿入する。盾形埴輪内に遺骸を挿入したのち胴部上半及び頭部を保護するために長さを調整した円筒埴輪を盾形埴輪の口縁部側に挿入し、最後に東小口の蓋形埴輪を固定したものと思われる。

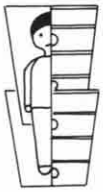
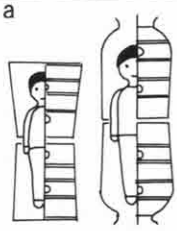
B－aタイプの埴輪棺では棺身の長さを死者の頭位部分で調整しているが、棺の長さを足元で調整したと考えられるものをB－bタイプと呼んでおく。このB－bタイプの可能性があるものとして瓦谷埴輪棺03・08がある。また特製埴輪でも棺の長さを調整するかのように短い特製埴輪を足元に据えている例が瓦谷遺跡ＳＸ01埴輪棺・藤井寺市土師の里8号墳の円筒棺墓4などである。

土師の里8号墳円筒棺墓4では、石製品1点と20才前後の女性の可能性が高い歯が数点棺内の東側で出土しており、死者の頭位が推定できる。この円筒棺墓4の棺身は完形の特製埴輪を東に据え、東側の埴輪の底部に別個体の短い特製埴輪を口縁部から挿入している。調査担当者である



第1図　頭位が推定できる埴輪棺

付表１　埴輪棺型式一覧

タイプ		特徴	類　例
Aタイプ単棺	a	特製埴輪を使用	マエ塚５号墳、倉塚２号円筒棺、香川県山崎の古墳、下大谷１号墳、茶山遺跡埴輪棺２、宇治金比羅山古墳第２主体、土師の里８号墳第２主体
	b	普通円筒・朝顔形埴輪を使用	瓦谷古墳群埴輪棺01・04・09・10・20・21、瓦谷遺跡ＳＸ01、池田茶臼山古墳第１号棺、マエ塚古墳１号棺、陣場山４Ｖ号墳、長岡京左京第10・28次ＳＸ1086、宮ノ平遺跡ＳＸ10、里仁32号墳第３号埋葬施設、天王壇古墳３号埴輪棺、石光山48号墳埋葬施設２、長原１号棺、長原７号棺、茶山遺跡埴輪棺４、横道遺跡埴輪円筒棺２、ヒル塚古墳円筒棺１、加悦作山古墳周辺埋葬１号墓、加悦温江百合３号墳埴輪棺ほか多数
Bタイプ複棺	a	胴及び脚部を完形の埴輪で、胴部上半及び頭部には、長さ調整をした埴輪を使用	瓦谷古墳群埴輪棺11・12・16、久津川車塚古墳円筒棺２、長原３号棺、五色塚古墳西斜面埴輪棺、法王寺古墳埴輪棺
	b	頭部及び胴部は完形の埴輪、脚部に長さ調整をした埴輪を使用	瓦谷古墳群埴輪棺03・08、長原８号棺、横道遺跡埴輪棺、久津川車塚古墳ＳＸ8912、宇治金比羅山古墳東棺、土師の里８号墳円筒棺４
	c 	同規模の埴輪を入れ子状に使用	瓦谷古墳群埴輪棺02・22・15、埼玉目沼10号墳円筒埴輪棺、長原４号棺、福島天王壇古墳２号埴輪棺
Cタイプ複棺	a 	埴輪の基底部を合口状に使用	薬師山遺跡、白水瓢塚古墳円筒埴輪棺２、舞子浜遺跡、池田茶臼山古墳第２号埴輪円筒棺、因幡六部山古墳、マエ塚２号棺、茶山遺跡埴輪棺２、森将軍塚古墳第４・11号埴輪円筒棺
	b	口縁部を合口状に使用	瓦谷古墳群埴輪棺17、市之代３号墳、長原５号墳、茶山遺跡埴輪棺３、久津川車塚古墳埴輪棺２、陰田42号墳第１円筒埴輪棺、長瀬高浜遺跡10号墳第３埋葬施設、同10号墳第２埋葬施設、同30号墳第２埋葬施設、同１号墳ＳＸ57、同ＳＸ53、加悦谷垣遺跡３号棺、石光山１号墳、同30号墳、同51号墳埋葬施設１・２
その他		２個体以上か器財形埴輪を使用	瓦谷古墳群埴輪棺24、長原４号埴輪円筒棺、乾垣内遺跡、赤土山第４調査区

中西康裕氏の観察によると、棺設置の手順として「東側蓋と東側棺身を据えたのちに遺骸を西側から差し入れ、さらに西側の蓋をした」[注8]ものと想定している。

Ｂ－ａ・Ｂ－ｂタイプのほかに Ｂ－ｃタイプがある。Ｂ－ｃタイプとは、ほぼ完形の円筒埴輪を２ないし３個体使用したもので、口縁部を外側に向け、その底部に別個体の埴輪を口縁部側から挿入したもので、合わせ目の重なり具合によって棺の長さを調整している。瓦谷埴輪棺22は、粗掘り調査中に検出したため十分な検討はできなかったが、棺身に使用された埴輪の復原作業の結果、完形の普通円筒埴輪３個体を入れ口状にしたＢ－Ｃタイプの棺身構造であったことが推定できた。なお、Ｂ－ｃタイプの埴輪棺には福島県天王壇古墳２号埴輪棺[注9]、埼玉県目沼10号墳円筒埴輪棺[注10]などがある。

Ｃタイプ；Ｃタイプは２個体の埴輪で棺身が構成されており、それぞれの埴輪の口縁部あるいは底部をあわせて構成した合い口状もので、底部を合わせたものをＣ－ａタイプ、口縁部を合わせたものをＣ－ｂタイプとした。

Ｃ－ａタイプの埴輪棺として奈良県マユ塚２号棺[注11]がある。マユ塚２号棺の棺身は鰭を打ち欠いた完形の円筒埴輪と鰭及び下半部を打ち欠いた円筒埴輪で両端に口縁部がくるように接合したものである。棺内からは「成長を完了してをらず、完了までには長期間を要しない年齢」で、「強いて云えば女性」の骨が遺存していた。また兵庫県白水瓢塚古墳[注12]の埴輪棺では口縁部を打ち欠いた朝顔形埴輪２個体で基底部を合わせている。

Ｃ－ｂタイプは基底部を外側に向けて口縁部を合わせたもので、瓦谷古墳群では埴輪棺17がある。また土師の里８号墳第１主体では特製埴輪を用した同タイプのもので、埴輪片を利用した枕のほか鉄剣などの出土がある。Ｃ－ｂタイプでは土師の里８号墳第１主体のような特製棺を利用したものが若干含まれるが、その大半は高さ50cmにも満たない小型埴輪を利用したものが多い。

その他；複棺構造のものには棺身を２個体の埴輪で構成されているもののほか、３個体以上の埴輪で構成されているもの、盾・家などの器財形埴輪で構成されているものもある。これらの埴輪棺も棺の長さを頭位か足元のいずれで調整しているのかが明らかであれば、Ｂタイプのいずれに帰属するかは明らかになるものと考えている。

なお、棺身に利用された埴輪の年代観をその埴輪棺の作られた時期に近いものと仮定すると、相対的には、Ｃ－ａタイプ・Ｂ－ａ・Ｂ－ｂタイプの埴輪棺が古い傾向にあり、一時期遅れてＡ－ａタイプの埴輪棺が出現し、続いてＢ－ｃタイプ・Ｃ－ｂタイプの埴輪棺が主体となる。

４．埴輪棺からみた頭位

埴輪棺は遺骸を保護するために使用されたものである。埴輪棺の中には瓦谷埴輪棺05のように棺の底には埴輪片がなく、蓋のみに利用されたと考えられるものや、遺骸の底部のみに埴輪を利用し、その棺蓋として木製の蓋を利用したものなどが考えられるが、その大半は遺骸全体を埴輪で覆ったものと考えられる。この遺骸全体を覆った埴輪棺にどのように遺骸を入れ、墓壙内に設置したものなのか明確に証明できる事例はない。ただ、土師の里８号墳の円筒棺墓４(石井のいう

埴輪棺Ｂ－ｂタイプ)のように、頭位にあたる部分の東側木口部と東側の棺身を据えたのちに埴輪の基底部分から口縁部方向に向かって頭から遺骸を挿入し、さらに足元を保護する西側の棺身をさし込み、西側の蓋をしたと推定している。一方、瓦谷埴輪棺24では棺身の短い部分に頭の位置を想像する枕があることから、棺身の長い盾形埴輪に口縁部方向から基底に向かって遺骸を足元から挿入し、そののち、頭を保護するために長さ調整をした円筒埴輪を差し入れた可能性が考えられる。この場合、遺骸を筒状のものに入れるのに足元からは入れにくいという指摘もあるが、棺身構造から見る限り足元からいれたと考えたい。なお、埴輪棺24と同じ方法で遺骸を入れたものとして瓦谷埴輪棺16を想像している。

単棺構造のうち、埴輪棺Ａ－ａタイプの下大谷１号墳では20才代の人骨が遺存していた。このような単棺構造の埴輪棺では、足元から遺骸を挿入したものかあるいは頭から挿入したものなのか明らかではないが、遺骸は棺身の口縁部側に頭を置いている。同じ例は土師の里８号墳第２主体がある。また前述の土師の里８号墳の円筒棺墓４も口縁部側に頭を置いている。

このように単棺構造のもの(Ａ－ａ・Ａ－ｂタイプ)、複棺構造のもの(Ｂ－ａ・Ｂ－ｂタイプ)では、棺身に使用された埴輪の口縁部側に頭を置く傾向にあることが指摘できる。またＢ－ｃ・Ｃ－ａタイプもその棺構造から棺身に使用された埴輪の口縁部側に頭を置いている。ただ、Ｃ－ｂタイプはその棺身構造から埴輪の基底部に頭を置いていることが考えられる。

５．埴輪棺の出土位置

「円筒棺と埴輪棺」で埴輪棺を総括的に論じた橋本氏は、円筒棺・埴輪棺の出土位置を13地点(墳頂第１埋葬施設・墳頂第２埋葬施設・前方後円墳くびれ部尾根上・前方後円墳前方部墳頂・墳丘中腹及び裾・造り出し部・周濠内マウンド上・周溝内・周堤・丘陵尾根ないし斜面・溝状遺構内・窯跡)に分類しているが、ここでは古墳との関連をメインに考えて、１；古墳の中心埋葬施設、２；墳頂部、３；墳丘斜面、４；墳丘基底部ないし周溝内、５；古墳の周辺部の５地点に分類した。

古墳の中心埋葬施設と考えられるものには土師の里８号墳第１主体部がある。土師の里８号墳は一辺約11.5mを測る方墳で、第１主体は古墳のほぼ中央にあり、円筒棺(特製埴輪)を粘土槨で覆っている。

中心埋葬施設と同様、墳頂部に設けられているが、中心埋葬施設に従属するかのような位置にある埴輪棺として下大谷古墳がある。下大谷古墳は、一辺18mを測る方墳で第Ⅰ主体の粘土槨(割竹形木棺)に並行するように第Ⅱ主体の円筒棺がある。同じような事例は京都府岩滝町法王寺古墳[注13](中心埋葬施設は組合式長持形石棺)、八幡市ヒル塚古墳[注14](中心埋葬は粘土槨で割竹形木棺)、大阪府池田市茶臼山古墳[注15](前方部平坦面)などがある。また前述した土師の里８号墳でも中心埋葬施設とともに２基の埴輪棺が墳頂部に並んでいる。

墳丘斜面にある埴輪棺には瓦谷埴輪棺08・09・11のほか、奈良県マエ塚古墳[注16]・福岡市鋤先古墳[注17]・福岡市丸隈山古墳[注18]などがある。

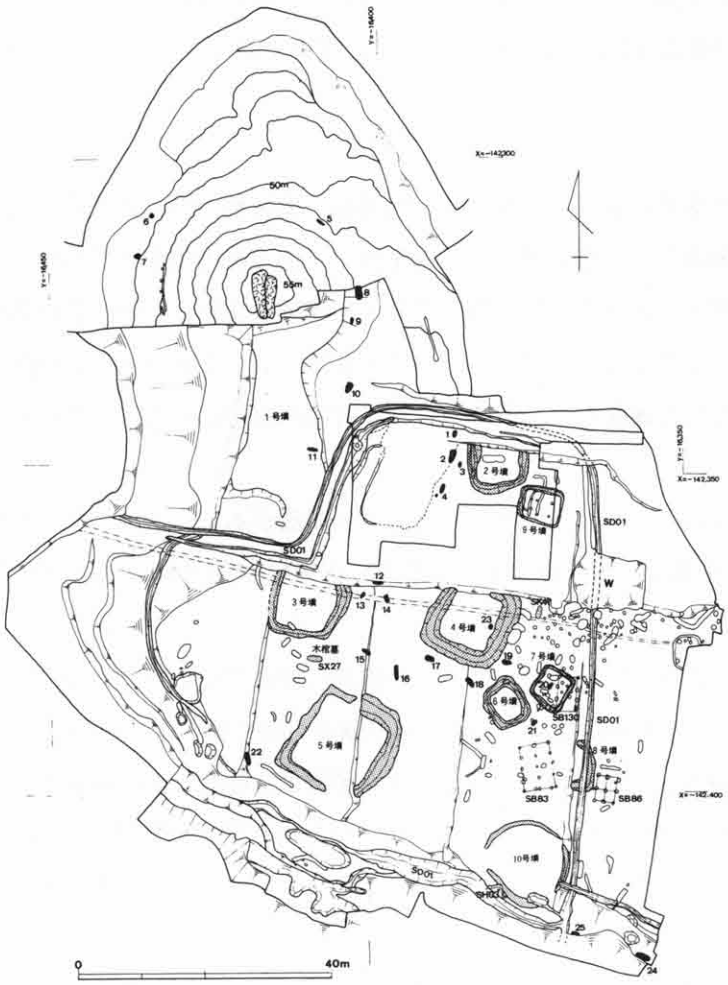
墳丘基底部ないし周溝内に埴輪棺があるものには奈良県マエ塚古墳、長瀬高浜遺跡[注19]などがある。古墳の周辺部には瓦谷埴輪棺16・22・24など数多くある。

このように埴輪棺の扱われ方は、前方後円墳の場合には中心埋葬施設とはならない傾向にあり、中心埋葬施設の場合には前方後円墳に従属した小型古墳にかぎられている。また埴輪棺に使用された埴輪の年代観からすると、墳頂部(この場合中心埋葬施設ではない)あるいは墳丘斜面で埴輪棺を使用するものが古く、一段階おいて中心埋葬施設として一時期使用されるがその期間も限られている(そしてこの時期に円筒棺に使用するための特製埴輪が多くなる)。そののち、奈良県石光山古墳群[注20]など一部を除いて墳丘では埴輪棺で埋葬されなくなり、古墳の周辺部に点在する傾向がある。これらの現象から埴輪棺を「従属葬[注21]」の１例として位置づけているものもある。

６．瓦谷古墳群の埴輪棺

前項では、埴輪棺の棺身構造・頭位・出土位置についてその傾向を羅列したが、ここではこれらのことに留意しながらもう一度瓦谷古墳群の埴輪棺について検討を加える。

瓦谷古墳群は、前方後円墳である１号墳を頂点としてその周辺に小型古墳９基・埴輪棺25基・土器棺２基・土壙墓数基で構成されている。この瓦谷古墳群の周辺１kmの範囲内では瓦谷古墳群→ヘラ坂古墳→上人ヶ平古墳群→西山塚古墳へと墓域が変化していく。これらの墓域の移動・変化については、首長墓と小型古墳が単位をなして移動しており、一墓域における古墳群の造営の時間幅は短かったものと考えられる。



第２図　瓦谷古墳群遺構配置図(1/1,200)

瓦谷古墳群の埴輪棺では棺及び墓壙内からの副葬品が貧弱であるため、副葬品からは埴輪棺の時期を決める資料に乏しい。ただ、棺に使用された埴輪の特徴を見る限り４世紀後半から５世紀前半で、その中でも400年を前後する限られた時期に古墳と埴輪棺が造られたものと考えられる。この場合、前述の埴輪

棺の問題で指摘のあったように「ひとつの棺が時期の異なる埴輪をもって構成されて」いる埴輪棺24でも古い型式の鰭付円筒埴輪が混在していたとしても棺身の埴輪は５世紀前半の中でおさまるものと考えられる。

埴輪棺では近接した古墳に樹立していた埴輪か、古墳に並べるべく作られた埴輪を棺に使用されているものが多く、瓦谷古墳群でも埴輪棺05・06・08・10・11・12・13・14・19・21の棺身の埴輪が１号墳の埴輪を、埴輪棺01・02・03・04の棺身の埴輪が２号墳の埴輪を、埴輪棺17・18の棺身の埴輪が４号墳の埴輪を使用した可能性が高い。一方埴輪棺16・22・24の棺身に使用された埴輪(器高70cm以上で、円形透かし穴をもち、外面Ｂ種ヨコハケ調整で黒斑をもつ)は瓦谷古墳群のなかでは古墳に樹立されていたかあるいは並べようとした古墳に該当するものがなく、１km以上離れた周辺の古墳で使用するために作られた埴輪を利用したものと考えられる(その可能性があるものとして、佐紀盾列古墳群の可能性が高いと考えている)。

埴輪棺研究の問題点で指摘した、古墳の造営と埴輪棺の設置にどの程度の時間経過があるのか明らかにしえないが、前述のように瓦谷古墳群から上人ヶ平古墳群への墓域の移動が群単位でおこなわれている現象からすると、上人ヶ平古墳群の造営の時期までには瓦谷埴輪棺の埋設は完了していたものと考えられる。これは瓦谷古墳群の埴輪棺が単棺構造(Ａ－ｂタイプ)と複棺構造

付表２　瓦谷埴輪棺一覧表

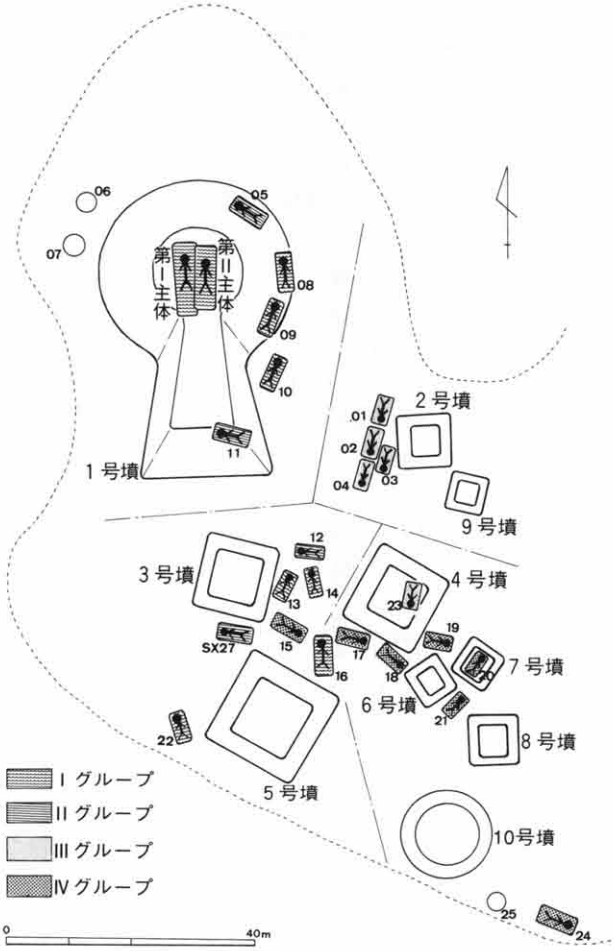
遺構名	棺構造	棺長	頭位(推定)	棺使用の埴輪
埴輪棺01	単棺Ａ-ｂ	0.70m	南西方向	普通円筒埴輪　方形透かし穴
埴輪棺02	複棺Ｂ-ｃ	1.25m	南西方向	普通円筒埴輪　方形透かし穴
埴輪棺03	複棺Ｂ-ｂ	1.30m	南西方向	普通円筒埴輪　方形透かし穴
埴輪棺04	単棺Ａ-ｂ	0.65m	南西方向	普通円筒埴輪　方形透かし穴
埴輪棺05	その他	1.30m以上	北西方向	鰭付円筒
埴輪棺06	その他	0.76m	不明	蓋形埴輪
埴輪棺07	その他		不明	壺形埴輪
埴輪棺08	複棺Ｂ-ｃ	1.63m	北方向	鰭付円筒
埴輪棺09	単棺Ａ-ｂ	0.70m	北東方向	普通円筒　方形透かし穴
埴輪棺10	単棺Ａ-ｂ	1.15m	北東方向	鰭付円筒
埴輪棺11	複棺Ｂ-ａ	1.50m	西方向	鰭付円筒
埴輪棺12	複棺Ｂ-ａ	1.44m	西方向	鰭付円筒
埴輪棺13	不明	不明	北東方向	鰭付円筒
埴輪棺14	単棺Ａ-ａ	1.05m以上	北方向	鰭付円筒
埴輪棺15	複棺Ｂ-ｃ	0.90m	東方向	普通円筒　透かし穴　70cm以下
埴輪棺16	単棺Ａ-ａ	1.43m	北方向	普通円筒　透かし穴　70cm以上
埴輪棺17	複棺Ｃ-ｂ	0.71m	東方向	普通円筒　透かし穴　70cm以下
埴輪棺18	複棺Ｂ-ｄ	1.05m	東方向	盾形埴輪
埴輪棺19	複棺Ｂ不明	0.75m以上	東方向	鰭付円筒
埴輪棺20	単棺Ａ-ｂ	0.67m	北東方向	普通円筒　透かし穴　70cm以下
埴輪棺21	単棺Ａ-ｂ	0.74m	北東方向	鰭付円筒
埴輪棺22	複棺Ｂ-ｃ	1.20m	北西方向	普通円筒　透かし穴　70cm以上
埴輪棺23	単棺Ａ-ｂ	0.63m	南方向	普通円筒　方形透かし穴
埴輪棺24	複棺Ｂ-ｄ	1.85m	東方向	盾形埴輪
埴輪棺25	不明	不明	不明	蓋形埴輪

(B－a・B－b・B－cタイプ)が大半で、棺身構造としては新しいタイプと考えているC－cタイプのものは埴輪棺17の1基のみであり、相対的に古いタイプの棺身構造のものが多い傾向にあることから窺い知ることができる。

7．瓦谷古墳群と埴輪棺

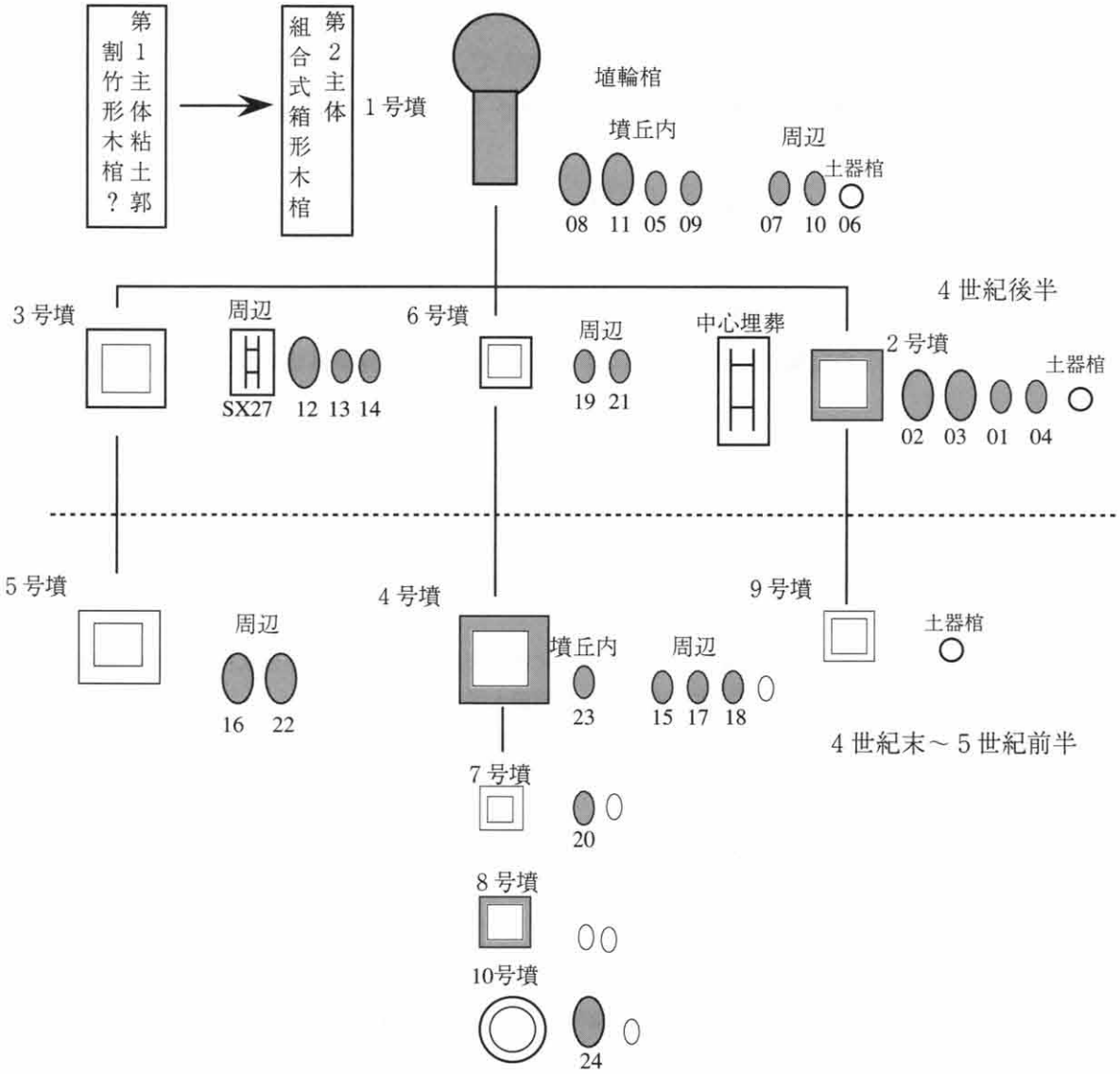
瓦谷古墳群は3次にわたり丘陵先端部約10,000㎡の発掘調査を実施し、瓦谷古墳群の全容がほぼ明らかになった。古墳は前方後円墳を含めて10基確認したが、1・2号墳を除いて中心埋葬施設および墳丘の大半は後世に大きく削り取られており、どのような性格の被葬者が埋葬されていたのか明らかではない。また2・4号墳の周溝からは埴輪片が比較的まとまって出土しているのみで、他の古墳ではわずかの埴輪片と土器が少量出土するのみであった。このため各古墳の内容をもとに瓦谷古墳群の性格を検討する資料にかけるため、古墳の周辺につくられた埴輪棺をもとに瓦谷古墳群を検討する必要がある。

瓦谷古墳群の埴輪棺内には被葬者の遺骸が遺存せず、その頭位については断定できるものはない。ただ、棺内にみられた埴輪片や石材を利用した転用枕の存在から埴輪棺11・16・18・24の被葬者の頭位が推定できる。また「埴輪棺からみた頭位」でも記したように、棺身構造C－bタイプを除いて棺身に使用された埴輪(特に主となる長い埴輪)の口縁部側に頭を据える傾向にあることが指摘できる。これらの前提条件をもとに瓦谷埴輪棺の頭位を推定したものが第3図である。



第3図　埴輪棺頭位推定模式図

第3図によると、頭位を北に置くⅠグループ(埴輪棺08・09・10・13・14・16・22)、西側の平野部に置くⅡグループ(埴輪棺11・12)、南の谷部に置くⅢグループ(01・02・03・04・23)、平野部とは反対側の丘陵部上位に置くⅣグループ(17・18・19・21・24)に大別できる。Ⅰグループの埴輪棺は1号墳の墳丘及びその周辺、3・5号墳の周辺にあり、Ⅱグループの埴輪棺も同じ傾向にある。Ⅲグループの埴輪棺は4号墳墳丘内の埴輪棺23を除いて2号墳の周溝の西側に遍在している。Ⅳグループの埴輪棺は4・6・7号墳の周辺とやや離れた埴輪棺24がある。このように古墳と古墳を取りまく埴輪棺が有機的関係にあるとすれば、埴輪棺



第４図　瓦谷古墳群の古墳及び埴輪棺模式図

の頭位を元に古墳のグルーピングも可能であると考えられる。また埴輪棺の棺身に使用された埴輪の特徴は「瓦谷遺跡の埴輪棺」で記したようにＡタイプの埴輪は１号墳と３号墳・６号墳の周辺の埴輪棺で使用されている。Ｂタイプの埴輪は埴輪棺08・19のほかは２号墳の周辺に集中する。Ｃタイプの埴輪は埴輪棺24を除き４・５号墳の周辺でみられる。そしてＡ・Ｂタイプの埴輪の特徴がＣタイプの埴輪に先行することから第４図のような系譜および時期が考えられる。この第４図をもとに古墳群の性格を検討すると、瓦谷古墳群の墓域設定の契機となった瓦谷１号墳(前方後円墳)は３グループの首長一族か同族的な集団のまとまりをもち、５世紀前半まで小型古墳を造り続けたことが考えられる。

９．おわりに

埴輪棺の分析をもとに瓦谷古墳群の性格について検討を加えた。私見による埴輪棺の分析には多くの問題をのこしており、埴輪棺と古墳の関連についてもさらに検討が必要であると考えてい

る。ただ、多くの問題点を残している埴輪棺全体の研究材料として瓦谷古墳群が有効な遺跡であると考えており、なんらかの手がかりになればと考えてこのような駄文を書いた。瓦谷古墳群については今後古墳出土遺物の整理作業が進んだ段階で「瓦谷遺跡の埴輪棺　再再考」を書き進めたい。

本文は京都古墳研究会(代表　和田晴吾)で発表したものを文章化したものである。発表に際して和田晴吾氏を初め高橋克壽・山本輝雄氏など会員各氏から有益な助言をいただいた。また文章化に際しては高橋美久二・小山雅人・平良泰久・奥村清一郎氏をはじめ同僚各氏から助言をいただいた。なお、付表１の埴輪棺の資料収集に際しては有井広幸・鹿島昌也氏に負うところが多い。

（いしい・せいじ＝当センター調査第２課調査第２係主任調査員）

注１　有井広幸「瓦谷遺跡・瓦谷古墳群の発掘調査」(『京都府埋蔵文化財情報』第49号　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1993

注２　石井清司・有井広幸「瓦谷遺跡の埴輪棺」(『京都府埋蔵文化財情報』第51号　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1994

注３　中西康裕ほか『土師の里８号墳』(『藤井寺市文化財報告』第11集　藤井寺市教育委員会)　1994

注４　橋本博文「円筒棺と埴輪棺」(『古代探叢』　早稲田大学出版部)　1980

注５　笠井敏光「埴輪の再利用」(『季刊考古学』第20号　雄山閣)　1987

注６　吉本堯俊「金比羅山古墳発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1965)』　京都府教育委員会)　1965

注７　近藤義行ほか「下大谷古墳群発掘調査概報」(『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第２集　城陽市教育委員会)　1974

注８　注３に同じ　P31

注９　山崎義夫「天王壇古墳の埴輪」(『季刊考古学』第20号　雄山閣)　1987

注10　大和　修「杉戸町目沼10号墳出土の円筒埴輪棺について」(『調査研究報告』第６号　埼玉県さきたま資料館)　1993

注11　中井一夫「佐紀丘陵の古墳調査」(『奈良県古墳発掘調査集報』Ⅰ　奈良県教育委員会)　1976

注12　神戸市教育委員会「白水瓢塚古墳」『神戸市埋文年報』62年度　1987

注13　堤圭三郎「法王寺・岩滝丸山両古墳発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1970)』　京都府教育委員会)　1970

注14　桝井豊成ほか『ヒル塚古墳発掘調査概報』　八幡市教育委員会　1990

注15　堅田　直ほか『池田茶臼山古墳の研究』(『大阪古文化研究会学報』１輯)　1964

注16　小島俊次『マエ塚古墳』(『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第24冊　奈良県教育委員会)　1969

注17　柿沢一男ほか『鋤先古墳』(『福岡市埋蔵文化財調査報告書』第112集　福岡市教育委員会)　1984

注18　山崎純男ほか『丸隈山古墳』Ⅱ(『福岡市埋蔵文化財調査報告書』第146集　福岡市教育委員会)　1986

注19　(財)鳥取県教育文化財団『長瀬高浜遺跡発掘調査報告書』Ⅳ『鳥取県教育文化財団報告書』11ほか　1982

注20　白石太一郎ほか『葛城　石光山古墳群』(『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第31冊　奈良県立橿原考古学研究所)　1976

注21　坂　靖「古墳時代の「従属葬」をめぐって」(『同志社大学考古学シリーズ　Ⅳ　考古学と信仰』)　1994

平成６年度発掘調査略報

21. 滝谷遺跡・石ヶ原古墳群

所 在 地　竹野郡丹後町字三宅

調査期間　平成６年10月７日～平成７年２月24日

調査面積　約750m²

はじめに　今回の調査は、京都府丹後土地改良事務所が計画している「府営広域営農団地農道整備事業」に先立ち、同事務所の依頼を受けて実施したものである。

今回は、昨年度に調査した上野１号墳に隣接する平坦地上に位置する滝谷遺跡の面的な調査と、谷を隔てた南側の丘陵上に位置する石ヶ原古墳群(旧・上野古墳群)について試掘調査を実施した。

調査概要

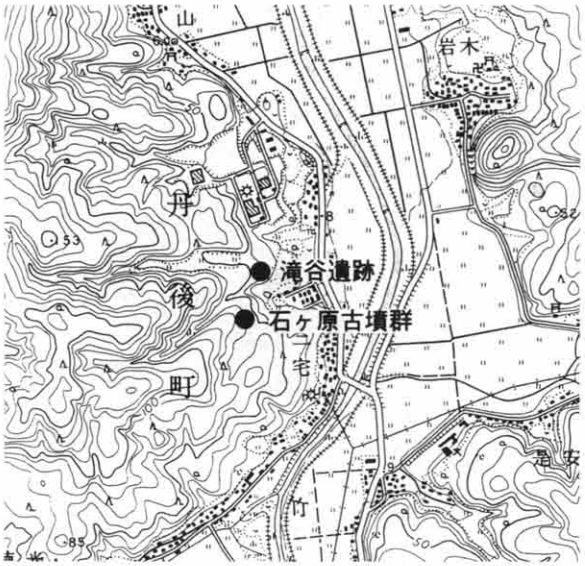
滝谷遺跡　竪穴式住居跡２基、掘立柱建物跡２棟、溝跡などを検出した。

竪穴式住居跡は、一辺が５～６ｍを測る方形の住居跡である。住居跡内から、小型丸底土器や甕などが出土した。このうち、ＳＨ01床面出土の小型丸底土器は、内外面とも粗いハケかナデで仕上げており、体部最大径が口径を上回ることから、古墳時代中期初頭～前半に位置づけられる。掘立柱建物跡は、２棟確認されたが、柱穴内出土遺物はいずれも細片のため時期は確定できない。包含層出土遺物には、いわゆる生駒山西麓産の壺の口縁部の破片が出土している。なお、昨年度出土した石匙などに関連する遺構・遺物は確認されなかった。

石ヶ原古墳群　滝谷遺跡の南方約220mの地点に９か所の古墳状隆起が確認され、試掘調査を実施した。９か所中７か所で埋葬施設と思われる遺構や、須恵器・土師器などの遺物を確認することができた。出土遺物には細片が多いが、ほぼ古墳時代後期の築造と思われる。なお、調査地周辺にも同様の古墳状隆起が確認できる。

まとめ　滝谷遺跡では、丹後地方に須恵器が導入される以前の竪穴式住居跡２棟が検出された。この時期の竪穴式住居跡は、丹後地方でもあまり検出されておらず、注目できる。石ヶ原古墳群では、７基の古墳の存在が確認できた。来年度に調査を継続する予定である。

（筒井崇史）



調査地位置図(1/25,000)

22. ニ　ゴ　レ　遺　跡

所 在 地　竹野郡弥栄町鳥取・木橋

調査期間　平成６年４月18日～平成７年２月24日

調査面積　約5,700㎡

はじめに　この調査は、「丹後あじわいの郷」の造成工事に先立ち、京都府農業開発公社の依頼を受けて実施した。

ニゴレ遺跡は、遠所遺跡群の東隣りにあたる字鳥取から字木橋にかけての製鉄遺跡である。平成４・５年度に行った試掘・発掘調査によって、８世紀後半から９世紀にかけて操業していたことがわかっている。今年度は、木橋地区の調査を行った。

調査概要　調査を行った結果、製鉄炉に伴う廃滓場２か所(ニゴレ３・４号炉)と祭祀遺構１か所を検出した。製鉄炉本体は、後世の削平によって確認できなかった。

ニゴレ３号炉　丘陵裾部のわずかな平坦地で、３号炉に伴う廃滓場を検出した。その規模は、幅約７ｍ・深さ約３ｍとかなり深く、平坦地に掘り込む形にあったことから、人為的なものと考えた。ここでは、鉄滓のほかに多量の炉壁や炉底滓、炭が層をなして堆積しており、炉本体は削平されていたものの、当時の炉の構造の一部を示す貴重な資料を得ることができた。また、炉内から鉄を取り出す際に崩した炉壁が二層堆積しており、少なくとも２回の操業が考えられた。炉壁の量・形状から、箱形炉であったものと思われる。鉄滓に混じって出土したわずかな土器から、８世紀後半に操業されていたことがわかった。

ニゴレ４号炉　ニゴレ３号炉から東方約９ｍの谷奥にあたる丘陵裾部から、４号炉に伴う廃滓場を検出した。規模は、幅約６ｍ・深さ約1.5ｍを測る。ここは、谷筋が屈曲するところで、廃滓場に堆積していた鉄滓の大半は、３号炉廃滓場近くまで流れていた。４号炉の廃滓場からは、多量の鉄滓とわずかな炉壁を確認した。鉄滓量に比べて炉壁の出土量の少ない状況は、昨年度に調査を行ったニゴレ２号炉に類似しており、小型の製鉄炉であった可能性がある。廃滓場出土の土器から９世紀末に操業されていた。

第１図　調査地位置図(1/50,000)

炉壁・炉底滓　今回の調査で、特に３号炉の廃滓場から多量の炉壁や炉底滓が出土した。炉壁については、一辺が平坦なものや、角のある

ものがあり、円形または楕円形の送風口が15cm間隔で一列に設けられていたことを確認した。送風口は、炉壁を斜めにくり貫いており、送風口下約16cmのところに、送風口と逆方向にあけられた穴(排滓穴)も確認した。フイゴから風を送りながら、炉上部から砂鉄と炭を交互に入れて操業するが、不純物は炉の底に溜まり、放置しておくと送風口が埋まるため、排滓穴が送風口下にまで設けられたと考えられる。また、残りのよい炉底滓も出土し、その幅から３号炉の短辺の内法は、約56cmであったことが判明した。炉の長辺については不明であるが、廃滓場から長さ約1.3mを測る炉壁を確認しており、少なくともそれ以上あったことになる。

祭祀遺構　ニゴレ３号炉の位置していたと思われる山手で検出した。もともとは、幅約2.4m・深さ約2.2mを測る性格不明の土坑があった。土坑が埋まってから築かれたのがこの祭祀遺構である。遺構の半分は流失しており、平面形が円形か楕円形かについては不明である。祭祀遺構は、幅2.4m・深さ１mを測る土坑からなり、土坑上面に炭を敷き詰め、その上に鉄滓・鉄塊状遺物を置き、土坑東端には砂鉄の堆積を確認した。炭の上面で鉄滓や鉄塊状遺物が出土したことは、製鉄の産物が炭の上面に置かれていたことになり、製鉄炉や材料置き場ではなく、製鉄炉本体を意識しての築造と思われる。土坑上面の炭は、炉の下部構造を示し、その上に製鉄でできる鉄滓や鉄塊状遺物を置き、その横には原料である砂鉄が置かれた。これは、３号炉の構築あるいは操業するにあたっての祈願的な祭祀が行われたものと考えられる。しかし、祭祀に関連する土器は出土しなかった。

出土遺物　今回の調査で、ニゴレ３・４号炉の位置する谷部から、多量の鉄滓・炉壁・炉底滓・砂鉄のほかに、須恵器・土師器・木製品などがわずかに出土した。須恵器の形態から、８世紀後半と９世紀後半の二時期に分かれる。これら出土遺物の中には、炉を構築する際の工具と思われる木製品３点も出土している。

まとめ　今回の調査で、新たに２基の製鉄炉の存在を確認したことから、ニゴレ遺跡では合計５基の製鉄炉を確認することができた。いずれも、８世紀後半以降に操業されたもので、隣接する遠所遺跡群の衰退期あるいはその後に、操業が開始されたことがわかった。製鉄にあたっては、祭祀的な行事も行われた。また、３号炉廃滓場出土の炉壁は、８世紀後半の箱形炉の構造を示す資料であり、他の製鉄遺跡からの炉壁の出土に期待される。

（岡崎研一）

23. 引　地　城　跡

所 在 地　加佐郡大江町矢津

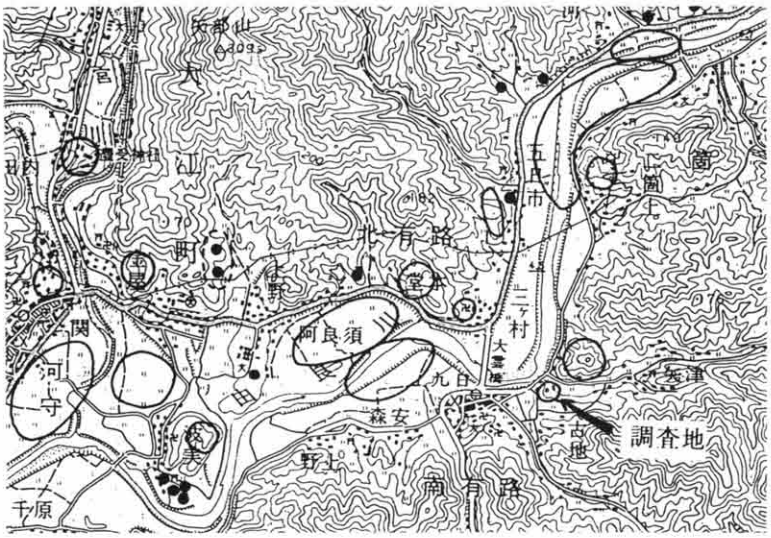
調査期間　平成６年10月７日～11月22日

調査面積　約1,000m²

はじめに　今回の調査は、京都府土木建築部の依頼を受け、府道福知山舞鶴線の拡幅・改良工事に伴って実施した。大江町は、その北側に千丈ヶ嶽・鳩ヶ峰・赤石ヶ岳などの大江山連山があり、この山岳地帯を割って南西から北東に向かって由良川が流れている。そして、由良川右岸に突出した丘陵先端部に引地城は築かれている(下図)。標高は最頂部の郭部で約40mを測り、郭・帯郭・空堀などの施設をもつ山城として、『大江町誌』(大江町1983)にも紹介されている。今回の調査は、引地城全体の３分の１程度を対象とした試掘調査である。

調査概要　引地城の立地条件から、掘削はすべて人力で実施した。比較的薄く堆積している暗黄褐色土(遺物包含層)を最頂部で除去した。さらに、斜面地では細長いトレンチを入れて掘削した。その結果、山城の施設として二段に築かれた郭、その下の帯郭･横堀･土塁、さらに北東コーナー部の虎口などを確認した。遺構としては、最頂部の郭部で楕円形の土坑２基と小さな柱穴痕などを検出した。土坑の１基からは輸入ものの染付小片が出土した。柱穴痕は、簡便な建物跡となる可能性はあるが、山城に付帯するかは不明である。出土遺物は、土坑内の１点(染付)を除き、すべて包含層中のものである。古墳時代の須恵器杯と甕の破片、15～16世紀の染付・青磁綾花皿・刀、江戸時代の桟瓦などがある。古墳時代の遺物が出土したことから、古墳の存在も否定できない。

まとめ　今回の試掘調査は、引地城全体の３分の１程度の範囲であるため、全体の把握は困難である。しかし、確認した施設及び遺構・遺物から、15～16世紀を中心に栄えた山城であることがわかった。段状の郭・帯郭・土塁・横堀などの施設、土坑と柱穴痕の遺構、青磁や染付などの遺物は、今後の引地城の全体を知る上から、貴重な情報を提供しているといえる。今後の全体調査に期待したい。



調査地位置図(1/50,000)

（黒坪一樹）

24. 今林遺跡・今林２号墳

所 在 地　船井郡園部町内林小字今林

調査期間　平成６年９月27日～平成７年３月４日

調査面積　約1,500m²

はじめに　この調査は、国道478号線バイパスの建設に伴い、建設省近畿地方建設局の依頼を受けて実施した。今林古墳群は、平成５年度に１号墳の調査を実施し、古墳時代初頭頃の墓制であることが判明している。今年度の調査では、２号墳を対象とし、古墳時代後期の木棺直葬墓であることを確認した。また、２号墳の周辺の丘陵一帯で、弥生時代後期及び古墳時代中期の竪穴式住居跡を検出している。

調査概要　調査地は、古墳時代前期の前方後円墳として知られる園部垣内古墳の北東約１kmの丘陵上に位置する。平地面との比高差は約20mを測り、園部盆地を一望する高台に立地する。今林遺跡は、大きく３時期の遺構群からなる。弥生時代後期前半の溝状遺構とピット群、後期後半の竪穴式住居跡群、古墳時代中期の竪穴式住居跡である。弥生後期前半の溝状遺構とピット群からは、甕形土器、壺形土器の破片、砥石などが出土している。また、ピット群の周辺からは、同時期の土器を伴う集石遺構が検出されており、この周辺に何らかの工房的性格をもつ仮設テント状の施設が営まれていたものとみられる。弥生時代後期後半の遺構としては、９棟の竪穴式住居跡を検出した。円形住居跡は、主として丘陵の尾根線上の好立地を占めており、丘陵腹部に方形住居が営まれている。出土土器には明確な時期差を認めることはできないが、円形住居を切り込んで方形住居が造営されている地点があることから、円形住居から順次方形住居に移り変わっていったことが推定される。古墳時代後期の今林２号墳の盛り土からも、この時期の土器片が多数出土していることより、古墳造営時に竪穴式住居跡が削平されたことが推定される。当初は丘陵の全面にわたって弥生時代後期後半の集落が展開していたのであろう。古墳時代の遺構としては、方形竪穴式住居跡１棟を検出した。この住居跡は、丘陵の南端に位置し、一辺約3.3mの住居跡の四隅のうちの一隅を掘り残し、そこに竈を付設するタイプである。こうした形態の住居跡は、現在の綾部市域を中心に分布しており、「青野型住居」と呼称されている。今林

調査地位置図(1/50,000)

遺跡で検出した住居跡は、周壁溝内出土の土師器甕から５世紀中葉前後のものと推定できるが、これは従来の「青野型住居」のうちでも最も古いものである。今林２号墳は、径約17mの円墳で、４基の主体部からなる。最初に築かれた第４主体部は、墳丘平坦部の南寄りに築かれており、長さ3.7m・幅0.8mの箱式木棺痕跡を検出した。主体部上面で須恵器杯身、杯蓋、土師器把手付椀が出土しており、棺内から鉄刀１点、鉄鏃11点、刀子１点、勾玉１点、管玉10点、ガラス玉10点が出土している。須恵器の型式は、陶邑ＴＫ47型式に併行しており、築造年代は５世紀末～６世紀初頭頃と推定される。第１主体部は、４基の主体部の中では最大の規模をもち、墓壙の長さ約4.7m・幅2.6m、棺の長さ約3.1m・幅0.9mを測る。盛り土中から須恵器台付短頸壺、器台、長頸壺が出土し、墓壙小口側上面で鉄製楕円形鏡板付轡１点、刀子１点、杯身、杯蓋が出土した。棺内からは鉄刀１点、鉄鏃30点以上が出土している。出土須恵器は、陶邑ＴＫ10型式にほぼ併行しており、６世紀中葉頃のものとみられる。第３主体部は、墓壙の長さ推定約4.2m・幅約2.4mを測る。木棺の両小口を白色粘土で固めており、棺内から鉄刀１点、刀子１点、鉄鏃９点が出土した。第２主体部は、墓壙の長さ約4.5m・幅約2.0mを測る。第１・第３主体部と一部重なるように墓壙を設けており、棺上面で刀子１点が出土した。

まとめ　今林遺跡は、弥生時代後期後半を中心とする時期に、園部盆地を見渡す丘陵上に立地する集落跡である。調査範囲内で９棟以上の円形及び方形竪穴式住居跡を検出しているが、範囲外にも住居跡の検出される可能性が高い微地形が認められることによって、集落規模はさらに広がるとみられる。園部盆地では、庄内併行期に黒田古墳が出現するが、こうした丘陵上の集落が古墳出現前夜に認められることが注目されよう。古墳時代中期の「青野型住居」は、造り付け竈をもつ住居跡の類例の中でも最も古い時期のものとなった。また、今林２号墳では短脚の大形器台が出土したが、これは園部盆地内の古窯で出土する須恵器の脚と同様の形態をとっており、地域内で生産された特色ある須恵器である。馬具などの多量の鉄器を副葬する有力な古墳であることから、被葬者は園部盆地で須恵器生産に関わった人々である可能性が高い。

（野々口陽子）

竪穴式住居跡検出状況

25. 大　俣　城　跡

所 在 地　舞鶴市大字大俣

調査期間　平成６年５月９日～平成７年１月27日

調査面積　約2,600㎡

はじめに　この調査は、京都縦貫自動車道建設に伴うもので、京都府道路公社の依頼を受けて実施した。調査地は、由良川の支流である檜川下流域の右岸台地上に位置し、Ａ地区が標高約85ｍの山頂を主郭とし、その周辺に数段の副郭及び虎口や竪堀・土塁などの防御施設を配する中世の山城跡である。Ｂ・Ｃ地区はＡ地区の南側、谷筋をひとつ隔てた尾根の稜線上に位置し、Ｄ地区はＢ・Ｃ地区のさらに南側の谷部にあたる。いずれも城に関連する遺構の検出が期待された。これらの内、Ａ地区については平成７年度に調査を継続して行うため、ここではＢ・Ｃ・Ｄの３地区について調査の概要を以下に記す。

調査概要　Ｂ地区　調査前の段階で、すでに尾根の稜線に沿って階段状の成形がなされていたことや、天保銘の墓石が放置されており、周辺に染付の磁器が散乱するなど、かつての墓参の形跡が見られることなどから墓地である可能性が高かった。掘削後、深さ約５～15cmの地山面から16基の土壙墓を検出した。主な出土遺物は、土師器皿・六文銭(寛永通宝・文久永宝)・煙管・磁器製の皿・椀などで、土壙墓群は江戸時代後期から明治初頭のものと思われる。また、墓壙内に箱形に組んだ座棺の底部と見られる木片が残存しているものも数基あった。Ｃ地区　尾根筋に沿ってトレンチを設定し掘削したところ、表土下約５～10cmで赤褐色礫土の地山面を検出したが、顕著な遺構及び遺物は確認されなかった。尾根筋に直交して見られた深い落ち込みや高まりも、土層を観察した限りにおいては、堀切や土塁とは断定しがたく、山城との関連は不明である。Ｄ地区　幅約４ｍ・長さ約50ｍのトレンチを設定し重機掘削を行ったが、厚い褐色砂礫土の広がりと湧水が認められるのみで、トレンチを拡大した後も遺構・遺物は確認されなかった。

まとめ　①３地区のいずれにおいても大俣城に関連する遺構・遺物は確認されず、これらを「大俣城跡」と称することには再考を要する。②Ｂ地区の南約150ｍの洞中地区においても18世紀を中心とする近世の土壙墓群が発掘調査の結果確認されており、今回の調査結果を合わせると、この地域における江戸時代後期の埋葬法を知る上でひとつの手がかりになり得るものと思われる。　（大岩洋一）

調査地位置図(1/50,000)

26. 青路古墳・銭塚古墓

所 在 地　青路古墳；舞鶴市字与保呂小字８番地
　　銭塚古墓；舞鶴市字堂ノ奥小字青路555番地

調査期間　平成６年12月５日～平成７年２月16日(延べ13日間)

調査面積　合計約350㎡

はじめに　今回の発掘調査は、東舞鶴における近畿自動車道敦賀線に伴い、日本道路公団大阪建設局の依頼を受けて実施した。自動車道建設地において、埋蔵文化財の包蔵される可能性の高い、古墳状隆起３地点、古墓推定地１地点の発掘調査を行った。便宜上、前者を青路古墳、後者を銭塚古墓とした。

調査対象地は、舞鶴湾東港に注ぎ込む与保呂川の上流、与保呂の村落右岸の山塊丘陵上に位置する。近隣には、与保呂の村落を取り囲むように、日向城跡、時岡源之丞城跡、波賀隠岐城跡、波賀谷城跡など、室町時代の山城が点在するが、中世山城以外、確認された遺跡はない。古墳状隆起・古墓についても、周辺における調査例はなく、この地区におけるはじめての調査例となる。

調査概要　青路古墳の調査では、墳丘測量のため、アドバルーンによる写真撮影を行った。東にのびる丘陵尾根の先端部の古墳状隆起と、丘陵尾根最高所の２地点の古墳状隆起の表土を約250㎡除去し、遺構の確認に努めた。

丘陵表土下の地山は、礫をほとんど含まない花崗岩バイランによって形成されており、視覚的にも遺構を確認しやすかったが、遺構・遺物を確認できなかった。ただ、旧陸軍が設営したと考えられる電信柱のワイヤーが埋設されていたのみであった。

銭塚古墓は、青路古墳調査地から600ｍあまり北側に離れた独立丘陵上にあり、当初、人為的な石列と考えられる石が認められたため、その周辺の土砂を除去した。その結果、舌状に突出した岩盤がみられ、それが節理によってスレート状に剥離し、人為的な石組みなどに似た形状を呈していることが判明した。

調査地位置図(1/50,000)
1.銭塚古墓　2.青路古墳

まとめ　今回の調査では、古墳・古墓として調査を開始したが、遺構・遺物は検出できなかった。東舞鶴における古墳時代の遺跡は、現状では舞鶴湾に注ぎ込む志楽川、祖母谷川、与保呂川の三河川のうち、最も北側から西流する志楽川流域のみに限られ、祖母谷川、与保呂川流域では、古墳時代には造墓活動が認められないものと思われる。

（野島　永）

27. 丹波亀山城跡第４次

所 在 地　亀岡市古世町北古世１丁目

調査期間　平成６年９月21日～平成７年２月27日

調査面積　約1,700㎡

はじめに　今回の調査は、京都府立亀岡高等学校体育館の建設に伴い、京都府教育庁管理部管理課の依頼を受けて実施した。調査地は、大堰川右岸の小高い段丘上に位置する。

丹波亀山城は、戦国時代末期に明智光秀が丹波平定の拠点として築城したことに始まる。17世紀初頭には天下普請による大規模な整備が行われ、丹波の要の城として重要視され、明治初年頃までは存続していた。調査地は、寛政５(1793)年の『山陰丹府桑田亀山図』(以下、亀山図と略す)によれば、三ノ丸の東側の武家屋敷に想定される。

調査概要　調査地は、亀岡高校東校舎のグラウンド内である。今回の調査では、江戸時代後期頃の溝・土坑・ピットなどの遺構を多数検出した。トレンチ北端側で約1.2m間隔でほぼ東西方向に並ぶ柵列を、中央部でほぼ東西方向の溝を、南東側でほぼ南北方向に並ぶ柵列を検出した。また、トレンチ北東隅部で人頭大前後の石を南北方向に並べた石列を検出した。もとは、低い石垣状と考えられる。土坑も約30基確認した。先述の東西方向の柵列と溝の間には底部に黄色粘土を貼ったものがみられる。この中で残りが良好なものは、平面形が長楕円形で内側全体に厚さ１～２cmの黄色粘土を貼りつける。用途は不明。今一つは楕円形で、底部に淡赤色の粘土を厚く貼る。

まとめ　調査地の約1/4は削平・攪乱のためか、遺構検出は断片的となり、井戸や建物の配置などの手がかりは得られなかった。調査地付近は、禄高150～200石の奉行クラスの藩士の屋敷地である。地籍図を参考にして亀山城の屋敷割りを復原すると、調査地内には室・真野・戸田の三氏の屋敷地が含まれていると考えられる。検出遺構のうち、東西方向に走る溝・柵列は約16m間隔で並行している。これは、地籍図で復原した真野氏の屋敷地の間口幅とほぼ一致する結果となった。したがって、この両遺構の間が真野氏の屋敷地跡の可能性が大きくなった。

亀山城跡に関して、これまで３次の調査が実施されてきたが、今回はじめて、武家屋敷地の地割りを確認した。亀山城下解明の糸口につながると思われる。　（尾崎昌之）

調査地位置図(1/25,000)

28. 内 里 八 丁 遺 跡

所 在 地　八幡市内里小字八丁・中島・日向堂

調査期間　平成５年４月13日～平成７年３月３日

調査面積　約4,000m²

はじめに　今回の調査は、第二京阪自動車道建設に伴うもので、日本道路公団の依頼を受けて実施した。内里八丁遺跡は、埋没した自然堤防上に営まれた弥生時代後期末～中世にかけての複合遺跡である。これまでに、弥生時代後期末～古墳時代初頭の水田跡を検出したほか、飛鳥・奈良～平安時代の掘立柱建物跡・溝・井戸を多数検出している。内里八丁遺跡の調査は、昭和63年の試掘調査に始まり、今年度はＤ地区(Ｄ１地区)で面的調査を行ったほか、範囲確認の試掘調査も併せて実施した。

調査概要　Ｄ地区は、第４次～第６次で調査を行ったＢ地区の東に位置し、多数の遺構・遺物の検出が予想された地区である。今回は、Ｄ地区を南北に分割したうち、南のＤ１地区(約2,000m²)を調査し、４面５時期の遺構を検出するとともに、集落の立地する自然堤防の東端部を確認した。

第１遺構面(平安時代後期～鎌倉時代)　海抜約11.9m付近に位置し、13世紀後半に始まる島畑と水田跡を検出するとともに、平安時代後期の井戸跡２基を検出した。

第２遺構面(奈良時代末～平安時代前期)　海抜約11.7m付近に位置し、溝・橋状遺構・池状遺構・暗渠施設・水田跡を検出した。特に、溝86・池状遺構(１期)では、多量の奈良時代末の土器に混じって墨書土器・土馬・ミニチュア竈・獣骨が出土したほか、底面から銅製帯飾り(丸柄・蛇尾裏板)・銅銭(和同開珎11点、万年通宝１点、神功開宝１点)などの特殊な遺物の出土をみた。

第１図　調査地位置図(1/50,000)

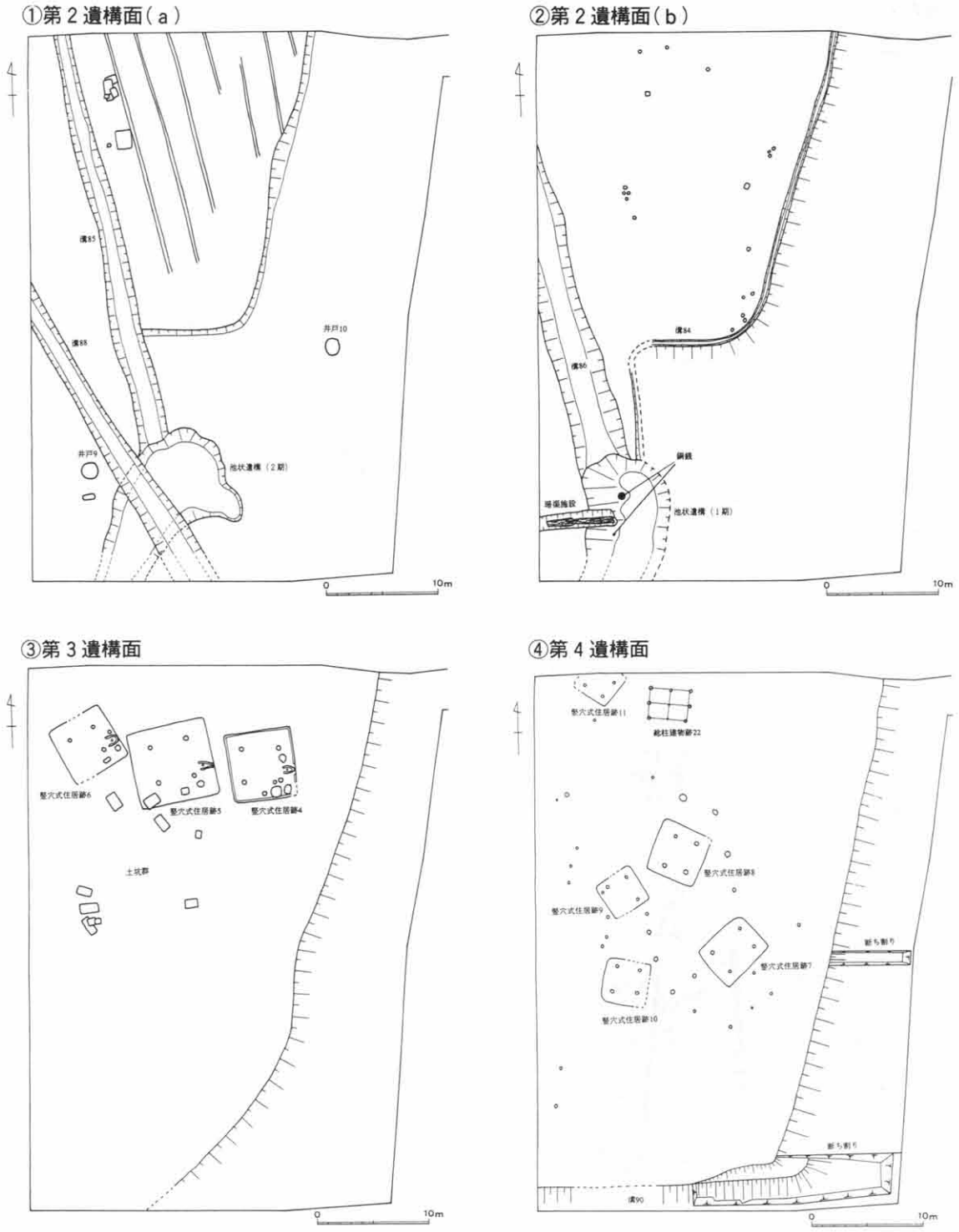
第３遺構面(古墳時代中期末～後期)　海抜約11.5m付近に位置し、造り付け竈を有する方形竪穴式住居跡３基と土坑を検出した。竈内には土師器壺・立石による支脚が認められた。

第４遺構面(古墳時代前期)　海抜約11.2m付近に位置し、庄内期の竪穴式住居跡５基・総柱建物跡１基、庄内～布留式期の溝を検出した。

まとめ　Ｄ１地区の調査では、これまでの調査で空白に近かった古墳時代前期・中期の住居跡群を検出することができた。また、第２遺構

面検出の溝・池状遺構・暗渠施設などは、Ｂ地区検出の奈良～平安時代の建物跡群に関連する遺構と判断される。詳細な遺構・遺物の検討は、今後の整理報告に委ねたい。

（竹原一彦）



第２図　Ｂ１地区遺構変遷図

29. 北稲・柿添遺跡

所 在 地　相楽郡精華町北稲八間他

調査期間　平成６年７月20日～平成７年２月27日

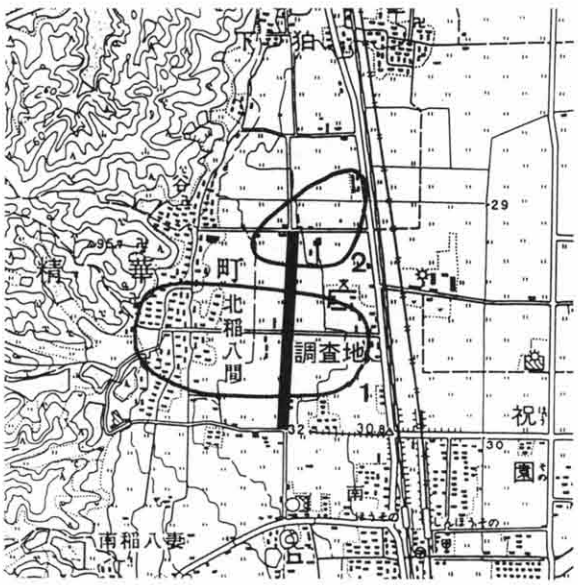
調査面積　約2,800㎡

はじめに　この調査は、主要地方道枚方山城線(通称山手幹線)の道路建設に伴い、京都府土木建築部の依頼を受けて実施した。対象となった北稲・柿添両遺跡は、木津川左岸の沖積低地の西縁付近に南北に隣接して位置する。両遺跡は、『京都府遺跡地図』によると、土師器・須恵器・瓦器が出土する散布地として登録されているが、過去に発掘調査例がなく、その実態については不明な点が多かった。今回の調査では、まず、道路計画路線の延長約650ｍの範囲内に、11か所の試掘トレンチを設定し、遺構・遺物の有無を確認した。その結果、調査地のほぼ中央に設けた４～７トレンチ、及び北端の10トレンチにおいて、比較的遺構・遺物が密集していることが明らかとなった。このため、この部分の本格的調査が必要であると判断されたので、関係機関と協議の上、４～７トレンチ部分の調査範囲を可能な限り拡張して本調査を実施した。

調査概要　ここでは、本調査地区の概要を調査区ごとに略述する。

【４トレンチ】　遺構は、調査区の北半部に偏って存在する。東西棟の掘立柱建物跡１棟、竪穴式住居跡１基をはじめ、小規模な溝、遺物を集中的に包含する土坑などを検出した。竪穴式住居跡は布留式併行期に属するが、掘立柱建物跡の時期は出土遺物が皆無なため不詳である。

【５トレンチ】　布留式併行期の竪穴式住居跡４基と、その時期の土器資料が包含されていた自然河道と直線的な溝各１条、７世紀初頭の南北棟を主体とする掘立柱建物跡６棟を主たる検出遺構とする。竪穴式住居跡は４トレンチの１基を含め、ほぼ一辺５ｍ程度の隅丸正方形プランを呈し、柱穴と周壁溝はいずれも浅くてはっきりしない。調査区の南寄りで河道と重複する掘立柱建物跡は、最も規模が大きく(3.5ｍ×6.8ｍ)、掘形も0.6～1.0ｍを測るものである。



第１図　調査地位置図(1/25,000)
1.北稲遺跡　2.柿添遺跡

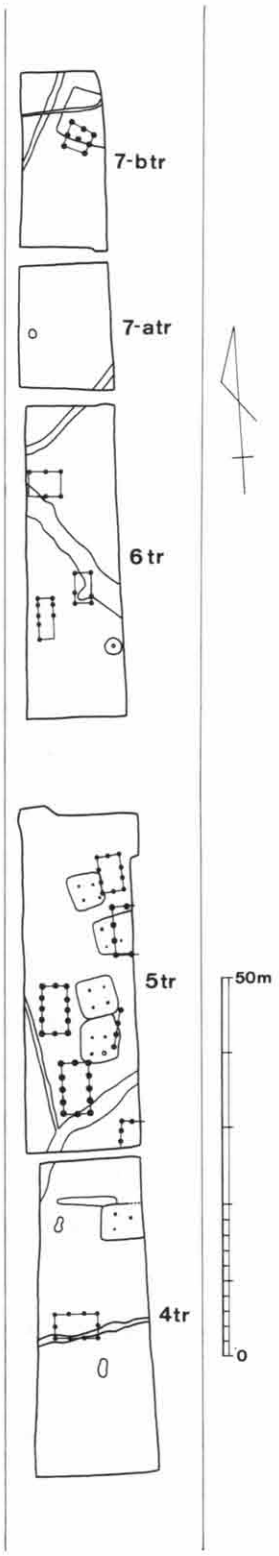
【６トレンチ】　５トレンチと東西道路を挟んで北に隣接する６トレンチでは、古墳～奈良時代の遺構は薄くなり、代わって中世遺構が主体を占める。内容は、小規模(直径0.3ｍ前後)な柱穴多数と、曲物を井戸側として積み重ねた井

戸１基である。柱穴には石や木材を利用した礎板をもつものが多く、小規模な側柱建物として３棟が復原できた。なお、調査区に斜交する溝は、布留式併行期に機能し、間もなく埋没した自然河道である。

【７トレンチ】　竪穴式住居跡？１基、掘立柱建物跡１棟、土坑１基、溝２条を検出した。このうち、調査区の南半にあたる７－ａトレンチの西寄りで検出した土坑は、直径1.5mの円形プランで、断面はやや袋状を呈し、上層埋土中から５世紀後半の土器資料がややまとまって集積していた。７－ｂトレンチの北半で検出した南北主軸の素掘り溝では、布留式併行期の土器がまとまって出土し、５トレンチの南北溝との類似性が指摘できる。竪穴式住居状遺構は、一辺７ｍ前後の方形プランを呈するが、屋内施設や柱穴が明確でなく、住居跡とは断定できない。これと重複してより新しい掘立柱建物跡は、一部柱穴に欠落がみられるものの、２間×２間の総柱構造に復原できるが、伴出遺物がなく、時期の特定はできない。

まとめ　検出遺構は、帰属時期によって３群に分けられる。古いものから述べると第１は、布留式併行期に属する竪穴式住居跡と直線溝・自然河道である。竪穴式住居跡は、調査区の配置の都合、南北に並ぶ形態をとるが、面的に拡がる可能性も十分考えられ、住居単位の抽出及び集落全体の規模などの解明は今後の周辺域の調査を待たねばならない。一方、直線溝は幅に対して深く掘り込まれており、集落内の区画を示すものかもしれない。第２のピークは７世紀の初頭(飛鳥時代)にあり、５トレンチを中心に検出された掘立柱建物跡群が主な遺構である。これらの建物跡群の性格については、多くが南北棟を採りながら建物跡の軸線が微妙にずれることや、柱間寸法が不ぞろいで対向する辺で柱筋が通らないものが多いことなどにみられるように、そこに厳密な計画性を求めるのは困難である。したがって、企画性を重視する官衙などの公的施設、または豪族の居館の類ではなく、一般の共同体成員の掘立柱住居からなる集落を想定するのがふさわしい。

第３は、鎌倉～室町時代に機能したもので、６トレンチの諸遺構がこれに当たる。その内容は、農耕地における農小屋・野井戸とみるよりは、むしろ主屋こそ調査区内で検出されなかったが、それに関連する屋敷地内の雑舎群及びその付属施設とみるのが妥当であろう。



第２図　４～７トレンチ遺構配置図

今回の調査は、道路建設に伴う事前調査ということで、道路の路線幅のうち、現行道と工事用仮設道を除いた部分のみが調査の対象となった。このため、各時期の遺構が対象地を越えて面的に広がることが十分予想される。今後、周辺地域の調査が期待される。　（伊賀高弘）

30. 釜ヶ谷遺跡

所 在 地　相楽郡木津町大字木津小字釜ヶ谷

調査期間　平成７年１月23日～２月27日

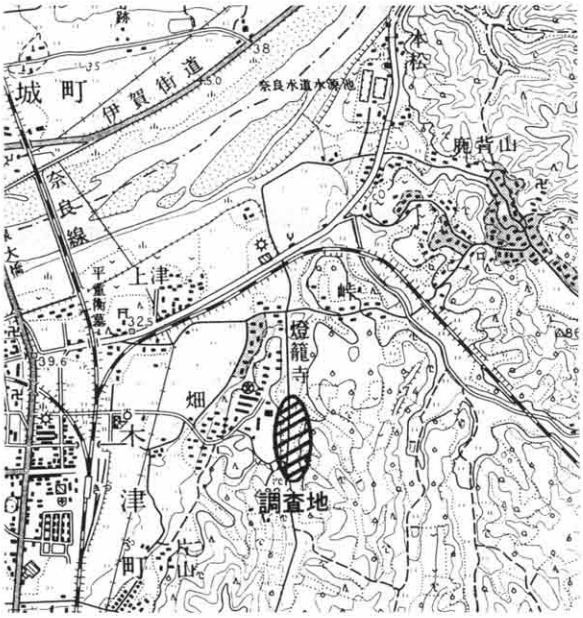
調査面積　約380㎡

はじめに　釜ヶ谷遺跡では、関西文化学術研究都市の開発に伴い、住宅・都市整備公団の依頼を受けて、昭和59年度に試掘調査を実施し、奈良時代以降の遺構及び包含層を検出している。今年度は、遺物が特に集中した５番地、10番地、18番地の試掘トレンチの結果を踏まえ、６番地と26番地の２か所にトレンチを設定した。

調査概要　６番地では、表土約１ｍで土師皿や瓦器椀を含む中世の包含層を検出した。さらにその下層では、上面検出幅約2.5～5.5ｍ・深さ約20cmの溝状遺構(ＳＤ01)を検出した。この溝状遺構は人工的なものとみるよりも、自然流路の可能性が高い。溝状遺構内には、須恵器皿・甕のほか、墨書人面土器・ミニチュアカマド・甑などが出土した。26番地では６番地と同様、中世包含層を検出したが、６番地にみられたような奈良時代の明瞭な遺構は検出しなかった。26番地の南北方向のトレンチは、地山土が比高差約１ｍで南から北へと低く傾斜しており、26番地周辺の旧地形は、現在の地形以上に谷部の東西幅が狭かった可能性が高い。

まとめ　６番地では、昭和59年度に試掘調査を実施した５番地と同様、奈良時代以降の遺物が比較的まとまって出土した。特に、自然流路と思われるＳＤ01内には、墨書人面土器・ミニチュアカマド・甑など、日常生活には直結しない遺物が出土しており、奈良時代の一時期、この自然流路を利用して祭祀が行われた可能性が高い。また、26番地では、奈良時代の遺構・遺物は検出しなかったが、少量の遺物を含む中世包含層を検出した。６番地、26番地の土層断面観察によると、釜ヶ谷遺跡が立地する谷部は、奈良時代あるいは中世段階には比較的幅の狭い谷地形であったものが、中世以降の新田開発により、丘陵部を削って現地形のような幅広の谷地形へと改変されたことが今回の調査結果からうかがえる。

（石井清司）



調査地位置図(1/50,000)

31. 長岡京跡右京第466次(7ANTTD-5地区)

所 在 地　乙訓郡大山崎町下植野寺門

推 定 地　(旧)長岡京跡右京九条二坊三・四町

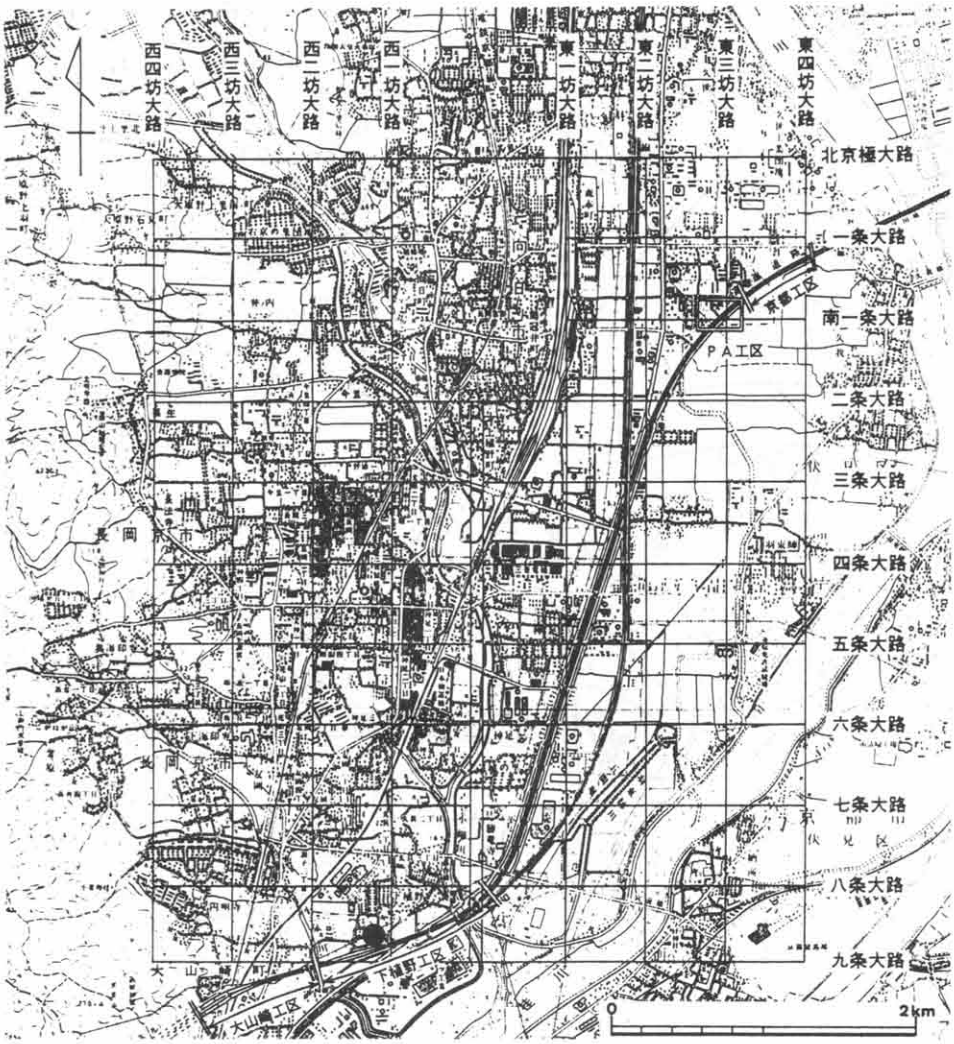
(新)長岡京外約一町南

下植野南遺跡

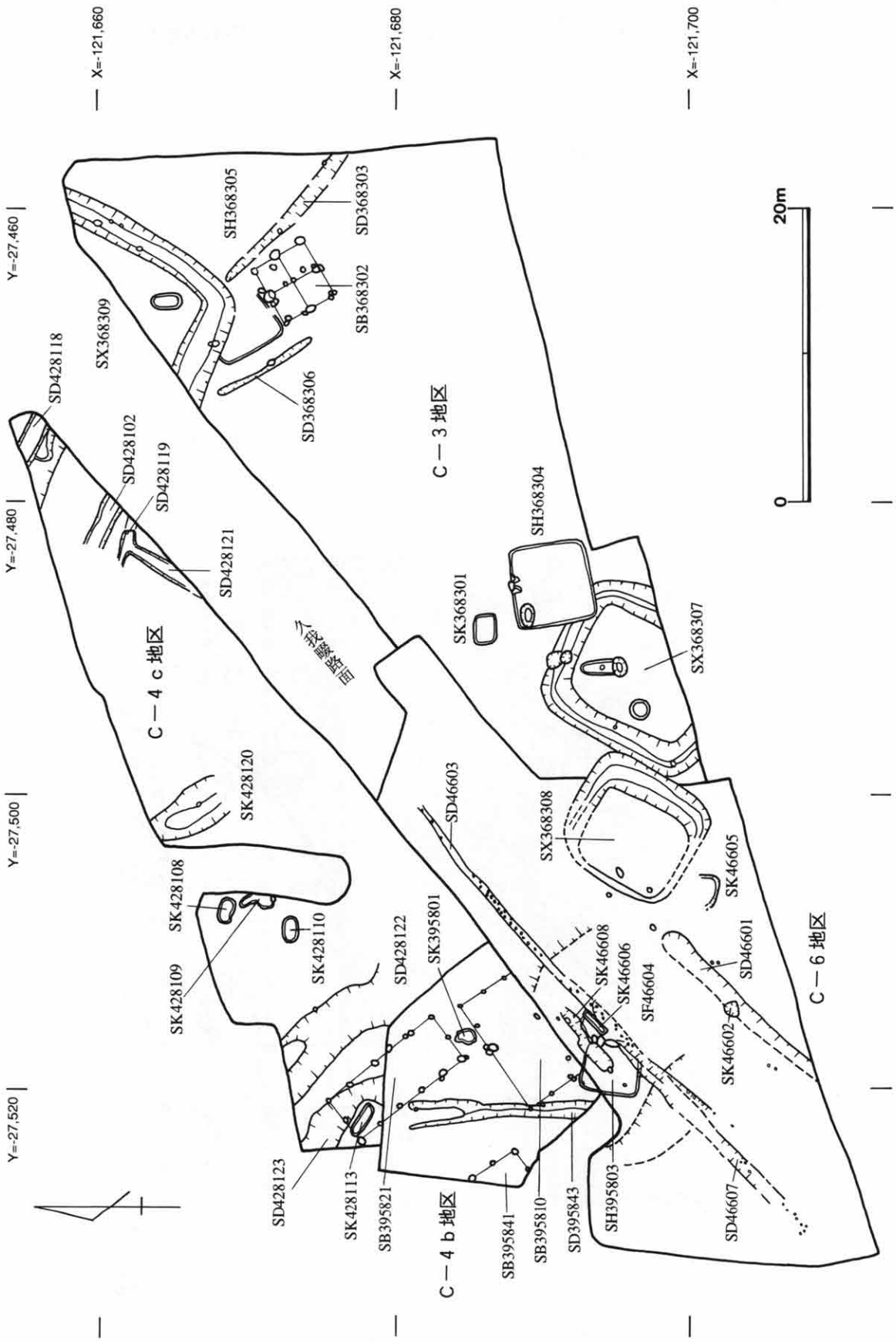
調査期間　平成６年７月４日～10月５日

調査面積　約690m²

はじめに　この調査は、中央自動車道西宮線(名神高速道路)の拡幅工事に伴い、日本道路公団大阪建設局から依頼を受け実施している。下植野工区は、乙訓郡大山崎町の小泉川から長岡京市の小畑川にかけての名神拡幅予定地にあたる。調査は、平成２年度から着手し、今年度で５年め



第１図　調査地位置図(●調査地)



第２図　検出遺構平面図(Ｃ－６地区が報告遺構)

を迎えている。昨年度までの調査で、下植野工区の発掘調査対象地の大部分の調査が終了し、Ｃ－６地区を残すのみである。

この地区は、従来の長岡京の復原案によると、右京九条二坊三・四町に当たる。また、周辺には「下植野南遺跡」が分布しており、今までの発掘調査では、縄文時代から中・近世にいたる遺構・遺物を検出している。特に、縄文時代晩期の深鉢の検出、古墳時代中期から後期にかけての大規模な集落と古墳の検出、長岡京期から平安時代前期の建物跡群の検出など、顕著な遺構群を確認している。

検出遺構

近　世

久我畷西側溝ＳＤ46603　現道の下面で検出した。幅約0.5mで調査地の全域を走る。路肩保護のための松杭と板材がこれに並行する。

中世・平安

土坑ＳＫ46602　ＳＤ46601を切る遺構で1.2m×1.0mの不定形土坑である。瓦器片、土師器片が出土。

土坑ＳＫ46605　調査地の南東よりで検出した。攪乱により大半が失われているが、断面皿状を呈し、長辺2.3m・短辺1.3mを測る。土坑の底面全体に藁灰が入り、灰上層から土師器皿(16世紀後半)・羽釜が出土した。

土坑ＳＫ46606　ＳＤ46607を切る遺構で同溝と主軸をそろえる。0.8m×2.2mの長方形プランを示し、深さ0.4mが遺存している。

久我畷東側溝ＳＤ46601　西肩が削平を受けているが、検出幅約1.0mで14m分を検出した。深さ約５cmが遺存している。

溝ＳＤ46607　ＳＫ46603の西半部下層で検出した。幅約1.0mで調査地の南半に遺存する。約19mを検出した。溝１と溝７は、内側の肩部で約６mを測る。

土坑ＳＫ46608　ＳＤ46607の約0.7m西で並行する。幅約1.0mで５m分を検出した。久我畷西側溝の一部か。ＳＫ46608を久我畷西側溝と考えた場合、この土坑とＳＤ46601は、内側の肩部で約８mを測る。

古墳時代

古墳ＳＸ36808　右京第368次調査検出の続きを検出した。幅約0.3mで４m分を検出した。南端で東に曲がる。溝内の埋土は、久我畷下層に堆積する氾濫性の礫粘土と酷似しており、この堆積層上面からは、６世紀後半の須恵器杯が出土しているので、古墳の築造時期はそれ以前と考えられる。

竪穴式住居跡ＳＨ395803　92年度の調査で一部を検出している。東西約3.6m・南北約4.0mを測る。住居跡は、南西の隅で、上下２段のプランを持ち、上層では６世紀後半から７世紀の遺物が出土し、下層では、布留式甕などが出土した。北東の隅では、竈跡を検出した。竈内のピットからは、須恵器杯身・蓋を重ねた状態で出土した。

まとめ　今回の調査で、下植野工区内に所在する遺跡の調査をすべて終了した。延べ５年間にわたり行った調査では、縄文時代から中世・近世にいたる各時代の遺構・遺物が出土した。この地区は、長岡京跡の右京九条に位置しているが、長岡京の条坊関係の遺構は確認できなかった。しかし、下植野南遺跡に関連して以下の調査成果を得た。

①縄文時代晩期の遺構・遺物及び後期の遺物が出土した。

②弥生時代中期から後期にかけての集落遺構を確認した。

③古墳時代の集落遺構及び古墳を検出した。

④長岡京期から平安時代にかけての掘立柱建物跡群を検出した。このうち、今回調査したＣ－６地区の「久我畷」下層で検出した二条の溝と、一条の土坑状遺構は、古代山陽道の検討を行う上で貴重な史料と考えられるものである。

（戸原和人）

下植野南遺跡(久我畷)調査風景

資 料 紹 介

東土川遺跡出土の縄文時代遺物について

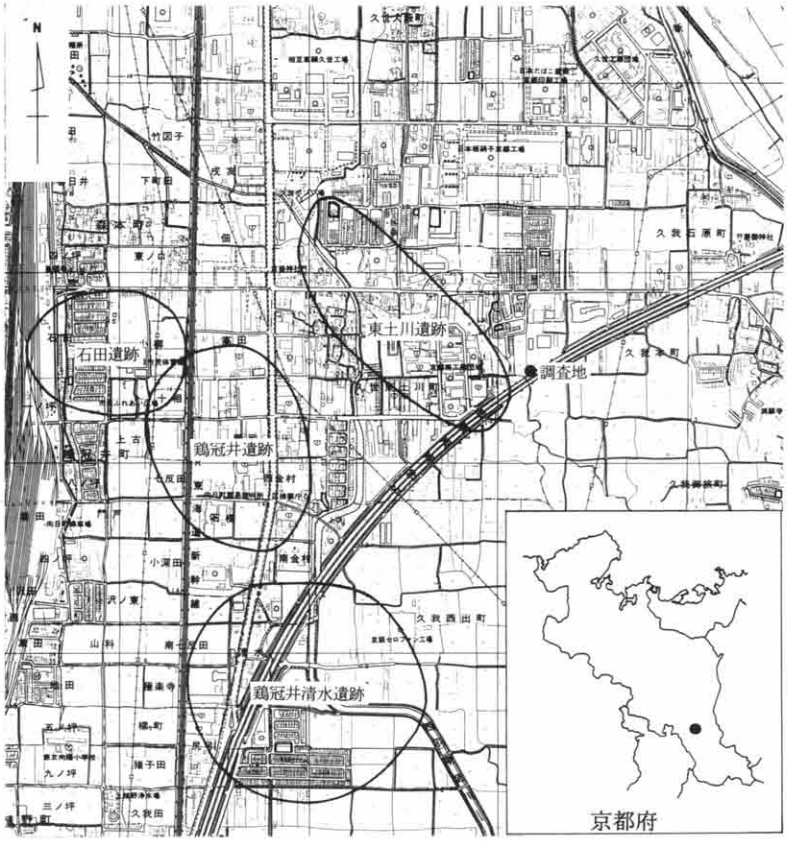
小 島 孝 修

1．はじめに

(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターでは、日本道路公団の依頼により、中央自動車道西宮線(通称名神高速道路)の拡幅工事に伴う発掘調査を昭和63年度から行っているが、その京都工区B－1地区から、平成5年度の調査で多くの縄文時代遺物が出土した。(注1) 同地点は東土川遺跡に含まれると考えられる(第1図)。出土した縄文土器は後期前葉に属しており、これらの資料群は、同時期の資料が希薄な近畿地方においては貴重な出土例であると考えられる。概報でその一部を公表したが、今回一応の整理作業が終了したので、公表することとした。

2．東土川遺跡及び周辺の縄文時代遺跡の概要

京都工区は桂川パーキングエリア建設予定地から東側の車線拡幅部分を指し、名神高速道路に沿った調査区が設定された。B－1地区は、平成5年4月7日から6月28日まで長岡京跡左京第286次調査(7ANWSA-2)として実施された。調査面積は550m²であるが、長辺約100m、短辺約6mの、北東から南西にのびる細長いトレンチである。所在地は京都市伏見区久我本町三ノ坪で、桂川右岸の沖積平野に位置する。今回の調査



第1図　調査地位置図及び周辺縄文遺跡分布図(1/20,000)

では、縄文時代から中世までの遺構・遺物が検出された。

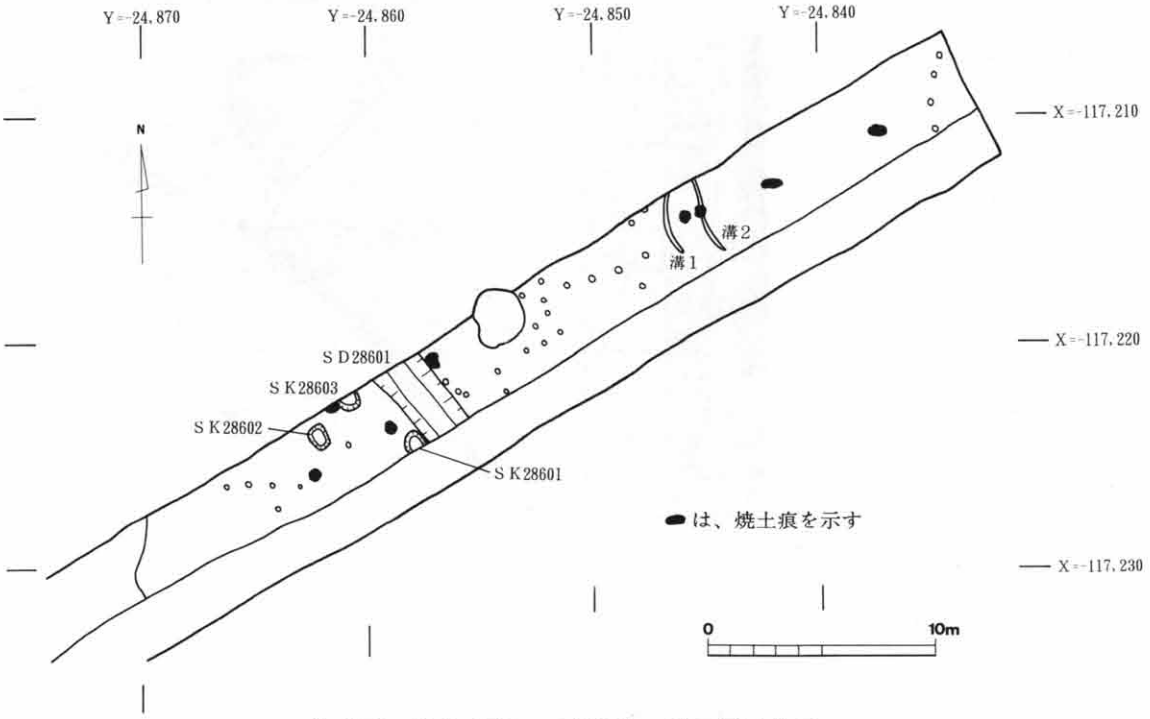
東土川遺跡は、『京都府遺跡地図』によると所在地が本調査区に隣接する京都市南区久世東土川町ほかとなっている[注2]が、今回の調査により本調査区にまでその範囲が広がっていると判断された。これ以前にも数回調査が行われており、弥生土器を中心とした遺物が出土している[注3]。

同遺跡のこれまでの縄文時代遺物の報告例としては、以下のものがある。『史料京都の歴史』では、西京区所在として記載し後期土器が出土しているとするが、詳細は公表されていない[注4]。また中期船元Ⅲ式土器も出土しているようである[注5]。このほかに同センターの平成５年度の調査で、京都工区Ａ－２ａ・Ｃ－１・Ｅ－３の各地区から晩期の突帯文土器が、いずれも包含層から出土している[注6]。さらに平成６年度のＰ．Ａ工区Ｂ－３地区の調査では晩期滋賀里Ⅲｂ式土器が出土している[注7]。

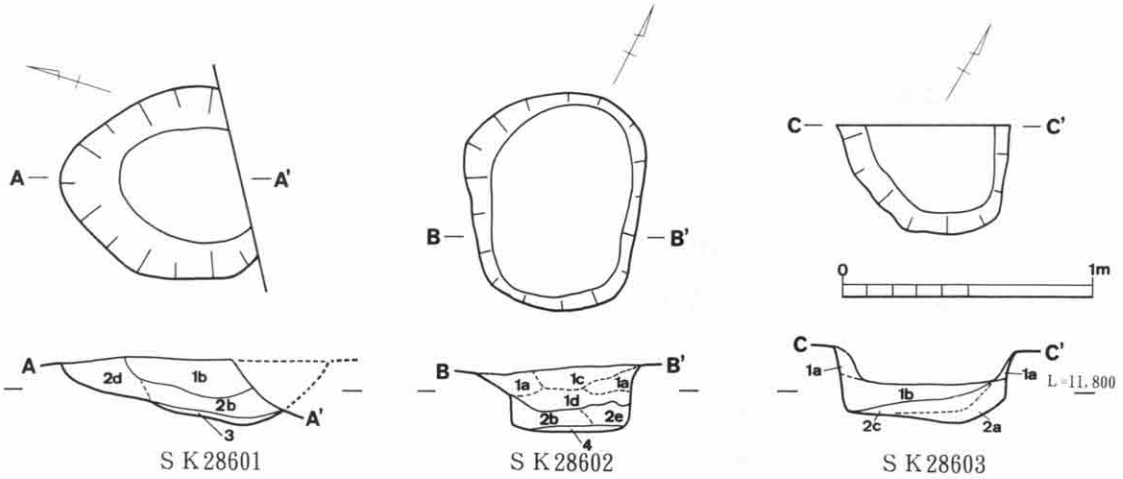
西に隣接する東土川西遺跡は、向日市森本町戌亥ほかに所在するが、遺跡名は異なるものの東土川遺跡と同一の遺跡として考えてよいと思われる。この遺跡からは、長岡京跡左京第36次調査で、晩期滋賀里Ⅱ～Ⅳ式土器と丸木舟が出土している[注8]。

付近の縄文時代遺跡としては、向日市の石田・鶏冠井・鶏冠井清水の各遺跡がある(第１図)。それぞれの遺跡からは、中期終末から晩期終末にかけての遺構・遺物が検出されており、当時は一帯に集落が存在していたと推定される。

東土川遺跡に時期的に最も近い遺跡としては、長岡京市の下海印寺遺跡があげられる。同市下海印寺方丸・北条に所在する同遺跡は、小泉川左岸の低位段丘上に展開する集落遺跡である。昭和53年から国庫補助事業として４次にわたる範囲確認調査が実施され、土坑３基と集石遺構１基を検出、後期前葉から中葉にかけてのまとまった土器・石器が出土している[注9]。



第２図　京都工区Ｂ－１地区北東部下層遺構図



1. 黄褐色土(a. 混入物なし、b. 炭化物混じり、c. 黒灰色土・焼土混じり、d. 焼土・炭化物混じり)
2. 茶褐色土(a. 混入物なし、b. 炭化物混じり、c. 黄色土混じり、d. 焼土・炭化物混じり、e. 黄色土・炭化物混じり)
3. 暗黄褐色土　4. 青灰色土

第３図　土坑実測図　1/30

やや距離はあるが、大阪府高槻市の芥川遺跡からもほぼ同時期の資料が出土している(注10)。ただ同遺跡の資料には中津式、福田ＫⅡ式の土器は含まれておらず、「四ツ池式(注11)」と北白川上層１式の中間である「芥川式」からなる(注12)。

３．縄文時代遺構の概要

今回の調査で検出された縄文時代の遺構には、土坑ＳＫ28601・28602・28603、及び焼土痕、小ピット列などがある。これらはトレンチ東半部の微高地上に位置し、縄文土器を含む黄褐色土及び茶褐色土を除去した暗茶褐色土(無遺物層)上面から検出された(第２図)。

土坑ＳＫ28601は全形は不明であるが、断面は逆台形を呈し、深さ0.3mを測る。土坑ＳＫ28602はほぼ方形をなし、長辺1.2m・短辺0.8m・深さ0.4mを測る。断面は方形を呈し、底部は平坦である。土坑ＳＫ28603はトレンチ北壁付近にあり、全形はおそらく隅丸方形を呈する。断面は袋状を呈し、底部はほぼ平坦である。３基とも埋土は上層に黄褐色土、下層に茶褐色土があり、ともに部分的に焼土・炭化物等が混在する。そして土坑ＳＫ28601の基底部には薄い暗黄褐色土が、土坑ＳＫ28602の基底部には青灰色粘質土がみられる(第３図)。

焼土痕は赤褐色を呈し、厚さ１～３cmを測る。流路ＳＤ28601以東の微高地上に５カ所、土坑付近に３カ所点在し、土坑群とセット関係でとらえることができる。

小ピット列は、４～５個の小柱穴が弧状に列をなしている。径10～15cm、深さ10cmを測り、埋土は焼土・炭化物を含む黄褐色土である。

遺構外での縄文土器の分布は、溝ＳＤ28601の両側に集中しており、ほぼ同一レベルで土器片の内面を上方に向けて、人為的な集積遺構があった。また、土器のほかに礫石錘などの石器も出土している。

Ｂ－１地区から名神高速道路を挟んで約30m離れているＢ－２地区では、縄文時代の遺物とし

ては同様の礫石錘が１点出土しているのみである。

４．出土縄文土器(第４～８図)

縄文土器は、前述の各土坑埋土及び遺構外からコンテナ20箱程度出土している。土坑ＳＫ28603からは比較的多くの良好な資料が出土しているが、土坑ＳＫ28601・28602には図化できる資料が少なく、溝ＳＤ28601の埋土及び遺構外から多く出土している。後期前葉、型式名では中津Ⅲ式(福田ＫⅡ式古段階)から縁帯文土器成立期の「四ツ池式」(広瀬40土坑段階)にわたる、比較的まとまった資料群である。遺構内外出土を問わず、一括して分類を行った。

分類をするにあたっては、千葉　豊編年案を参考にした。(注13)

ただこれらの資料は一様に器面の摩滅・剝離が激しく、調整をはっきりと観察できないものが多いことを、あらかじめ断っておく。

Ⅰ．**有文土器**(１～111)

まず口縁部資料を形態・文様により分類したが、それぞれに付随する要素を持つ胴部資料については同時に述べ、その他の胴部資料については別に述べることとする。

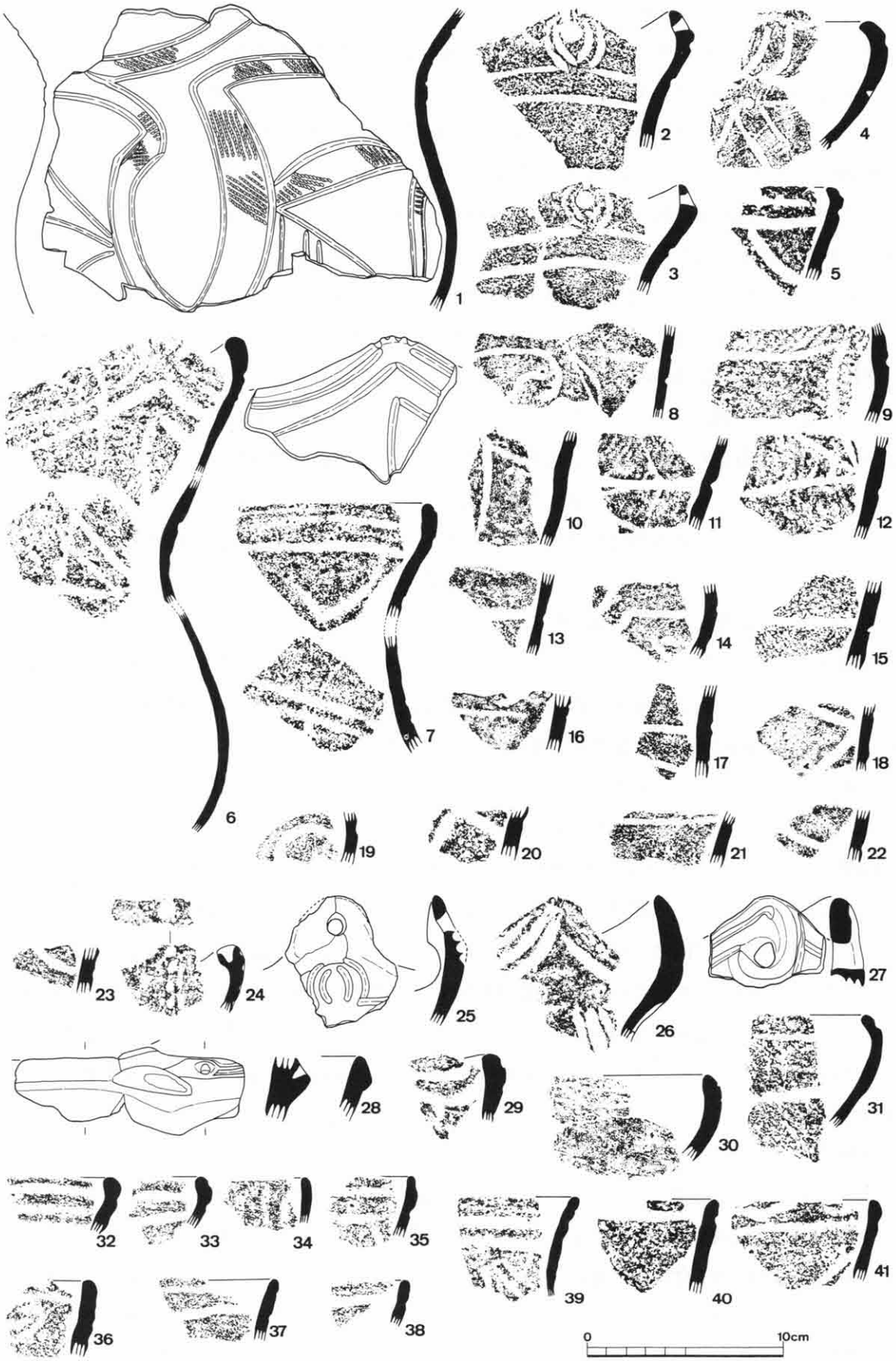
１類(１～23)　２条の幅広の沈線間に、縄文を充填する文様を有する一群である。口縁は外反して立ち上がり、丸い端部が内湾する。深鉢は球形の胴部から頸部が緩やかに屈曲して立ち上がる器形を呈する。波状口縁と平縁がみられる。

１は比較的残りが良い資料である。幅広の平行沈線を施文したのち、ＲＬ縄文をその区画内に施文する。胴部中央に見られる「ひ」の字状モチーフは、８にみられるカギ状モチーフに先行するものと思われる。２～７は口縁部資料である。２・３は同一個体と考えられる波状口縁であり、口縁に沿って磨消縄文帯が巡る。波頂部は穿孔され、その回りを二重の沈線が囲む。４は浅鉢であろう。５・７は２条の沈線が口縁に沿って巡り、その下に「Ｖ」の字状に沈線が施される。６は口縁部から底部近くまでの破片が残り、ほぼ全形がわかる。８～23は胴部破片である。縄文が明確に見えないが、沈線文・胎土等からそう判断できるものは１類に含めた。９は頸部直下、14・19は胴部の球形部分と考えられる。中津Ⅲ式の所産であろう。

２類(24～41)　１類と同様に丸い端部を持ち、内湾・あるいは斜め外方向に立ち上がる口縁部を含めた。24～29は波状口縁であり、24が縦方向の隆帯を張り付けたのち刺突をしている以外は、主に沈線による施文がなされる。30～41は平縁であり、30・31は浅鉢、32～41は深鉢の口縁部と考えられる。主として１・２条の沈線が口縁部下を巡る。32・33は本資料群中最も古い段階に位置付けられる。41にはＶ字状の沈線文が口唇に施される。中津Ⅲ式の所産であろう。

３類(42～44)　口縁部が外反し、端部は肥厚する資料である。42は把手に渦巻き状に沈線が施文され、その中心は穿孔される。43・44には２条の沈線が口縁部を巡る。44は波状口縁だが、波頂部は欠損しており不明である。

４類(45～59)　口縁部が外反し、端部に沈線が１本施文される資料である。口唇下を巡る沈線に



第４図　東土川遺跡出土縄文土器(1)　1/3

より、ａ・ないもの(45～50)、ｂ・１本のもの(51～55)、ｃ・２本のもの(56～59)に分類した。46は文様が45と同様であるためここに含めた。47・52・54・56等の一部の資料には、端部及び口唇下の沈線間に縄文が施文される。54は52よりも新しく位置付けられる。59は内面に突帯が張り付けられているが、浅鉢の可能性がある。いずれも福田ＫⅡ式の所産であろう。

５類(60)　斜め外方向にたちあがり、端部は面取りされる。口縁に沿って２条の沈線が巡り、その下には多条の鋸歯文が施文される。同様の資料は、福井県右近次郎遺跡の18群土器にみられる[注14]。福田ＫⅡ式の所産と考えられる。

６類(69)　口縁部が外反して端部は尖り、口唇下に沈線が施文される。同一個体の破片がほかに２点あり、胴部の沈線は３本みられる。福田ＫⅡ式の古い段階に位置付けられる。

７類(61～68)　端部に刻みが入る資料を一括した。口縁部は外反し、その内側に突帯がつくものが多い。端部の沈線により、ａ・ないもの(61～63)、ｂ・あるもの(64～68)に分類した。61は端部直下に沈線が１条巡り、胴部には三角形の区画内に縦方向の短い沈線が平行に施文される。このような三角モチーフは、滋賀県今安楽寺遺跡ＫⅡ群４類に類例がみられ[注15]、福田ＫⅡ式から縁帯文土器成立期にかけての過渡期的な要素と考えられる。67も比較的残りが良い資料で、頸部の下には断続的な刺突が一面に施されていたと考えられる。同様の資料は、大分県小池原遺跡[注16]等にみられる。主として縁帯文土器成立期の所産と考えられる。

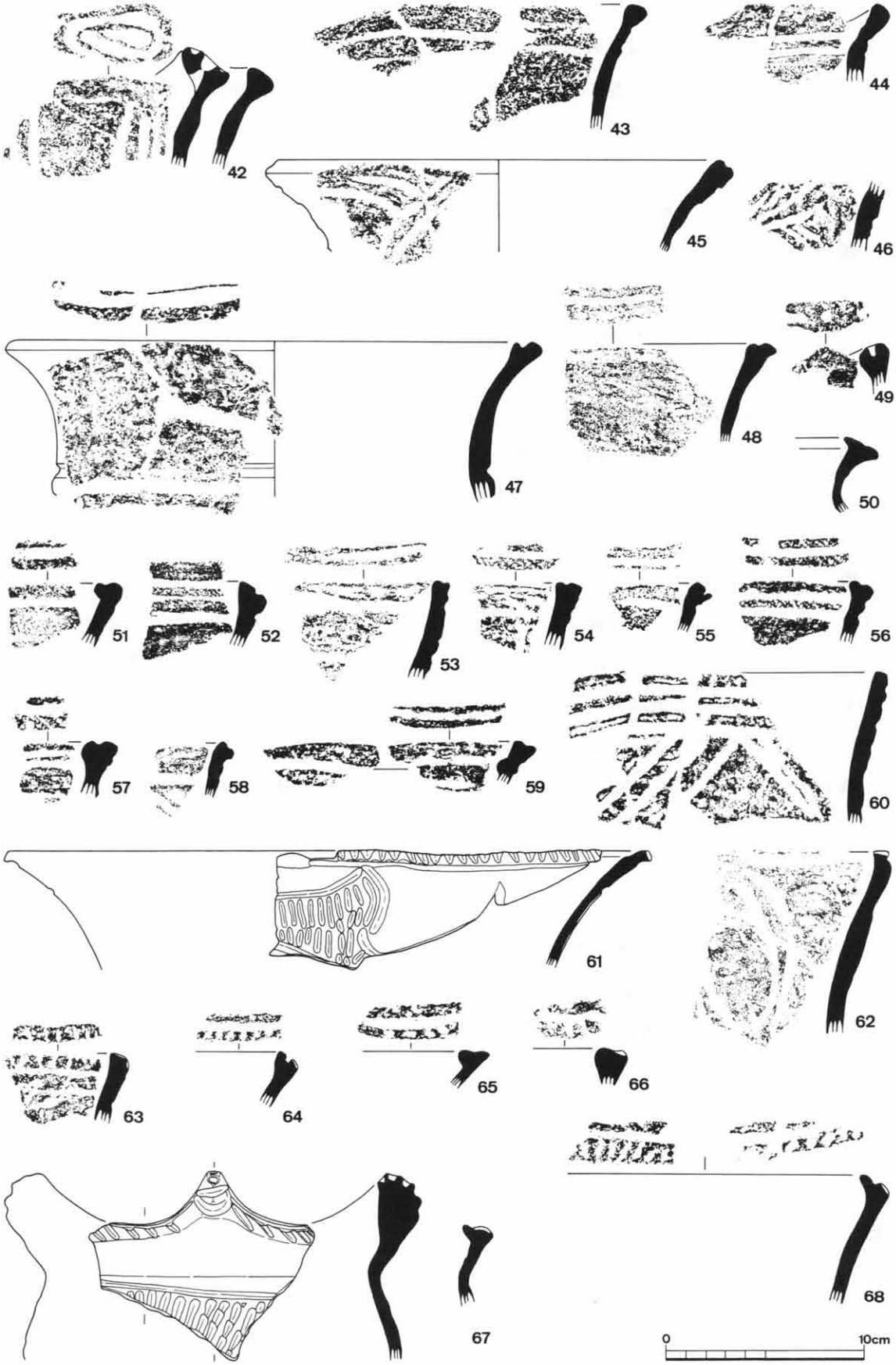
８類(70～72)　口縁部が外反し、端部に沈線が２条(70・72)ないし３条(71)施される。71には端部直下に入り組みの円形文が施文される。72は頸部に逆Ｕ字文と胴部に３条の沈線が施文され、器形的には10類と類似する。縁帯文土器成立期の所産と考えられる。

９類(73)　外反する口縁の外側に粘土紐を張り付け、その上部に沈線を描く。体部には２条及び３条の沈線が描かれる。縁帯文土器成立期の所産と考えられる。

10類(74・125)　外反する口縁の内側に、隆帯を張り付ける資料である。74はＳＫ28601から出土した良好な資料である。口縁部が外反し、内面に突帯を張り付ける。橋状把手の上には受け口状の造作があり、口縁に向けて穿孔される。橋状把手は裏日本的な要素である。頸部より下には沈線よる多条の渦巻き文が描かれる。125は浅鉢であり、推定される器高は約10cm、口径は36cmである。口縁部内面に沈線文が巡り、途中４～５つの円が描かれる。また円形文の下、肥厚部下に１カ所直径1.5cmの穴が認められる。口縁部の沈線の外側には縄文が施文される。縁帯文土器成立期の所産である。

11類(75・76)　把手のみの資料を一括した。75は受け口状の造作を持つ。76は外反した口縁に幅約1.2cmの粘土帯を２本輪状にして接合しており、頂部及び正面に窪みがある。

12類(77)　口縁が楕円形を呈するため、正確な口径は不明である。端部及び口唇下に沈線が巡る。残存する破片のほぼ中央に穿孔を施し、その周囲にも沈線が巡る。Ｌ字状の隆帯が２本張り付けられ、その上面に径５cm強の押圧が数カ所みられる。また隆帯の両脇にも沈線が引かれる。このような浮線刺突は小池原遺跡[注17]や高知県宿毛遺跡[注18]に類例がみられ、西日本に特有の土器といえる。福田ＫⅡ式もしくは縁帯文土器成立期の所産と思われる。



第５図　東土川遺跡出土縄文土器(2)　1/3

13類(126)　櫛描平行沈線が施される半粗製深鉢である。推定復元では器高約42cm、最大径は口縁部で約34cmとなる。器面は比較的状態良く残っている。縦方向の５～７条の「Ｓ」字状櫛描沈線は、芥川遺跡のＫ24ｂ類土器に同様の文様がみられる[注19]。または、口縁部付近では横方向の、胴部中央から下部右下がりの調整が、内面では横方向のナデ調整がみられる。

土器の体部破片は、文様により以下の４類に分類した。

ａ類(78～82)　多条の沈線文と縄文が施文される資料である。78・79・81・82は３条の沈線間に縄文が施文される。ａ１類とする。４類土器に対応すると考えられ、福田ＫⅡ式の所産であろう。80はＳＫ28603から出土した資料で、器壁が厚く焼成はよい。３条もしくは４条の沈線が描かれ、その先端が渦巻き状になる部分もみられる。余白部分に縄文が充填されている。ａ２類とする。縁帯文土器成立期の所産と考えられる。

ｂ類(83～94)　多条の直線の沈線が描かれる資料である。２・３条のものから83・84のように４・５条のものもみられる。94は頸部直下から底部付近までがわかる資料であるが、くびれの大きい器形を呈すると考えられる。１類やａ類土器に含まれるものもあろうか。

ｃ類(95～109)　沈線文により何らかの「モチーフ」が描かれる資料を一括した。全てが同時期の資料とはいえない。多くは曲線により文様が描かれる。96はカギ状モチーフがみられ、比較的古い時期の資料であろう。95は頸部に２条の沈線が描かれ、その下に屈曲した１条の沈線文がある。99は器形的には94に類似すると考えられるが、また異なった文様が描かれる。95・99は縁帯文土器成立期の所産と考えられる。108は頸部直下の資料である。

ｄ類(110・111)　縄文のみの資料である。110はほぼ胴部全面に縄文が施される資料と考えられる。111は胎土や焼成等からみて１類土器の可能性が強いが、一応ここに含めた。

Ⅱ．無文土器(112～122)

有文土器に比べ比較的出土量は多いものの、完形に復元できたものは114と概報に掲載した深鉢(20)の２点のみである。そのほかの資料については、まず口縁部39点を形態により以下のように分類し、その代表的なものを掲載した。

１類　先細りの先端が内湾するもの(112、３点)

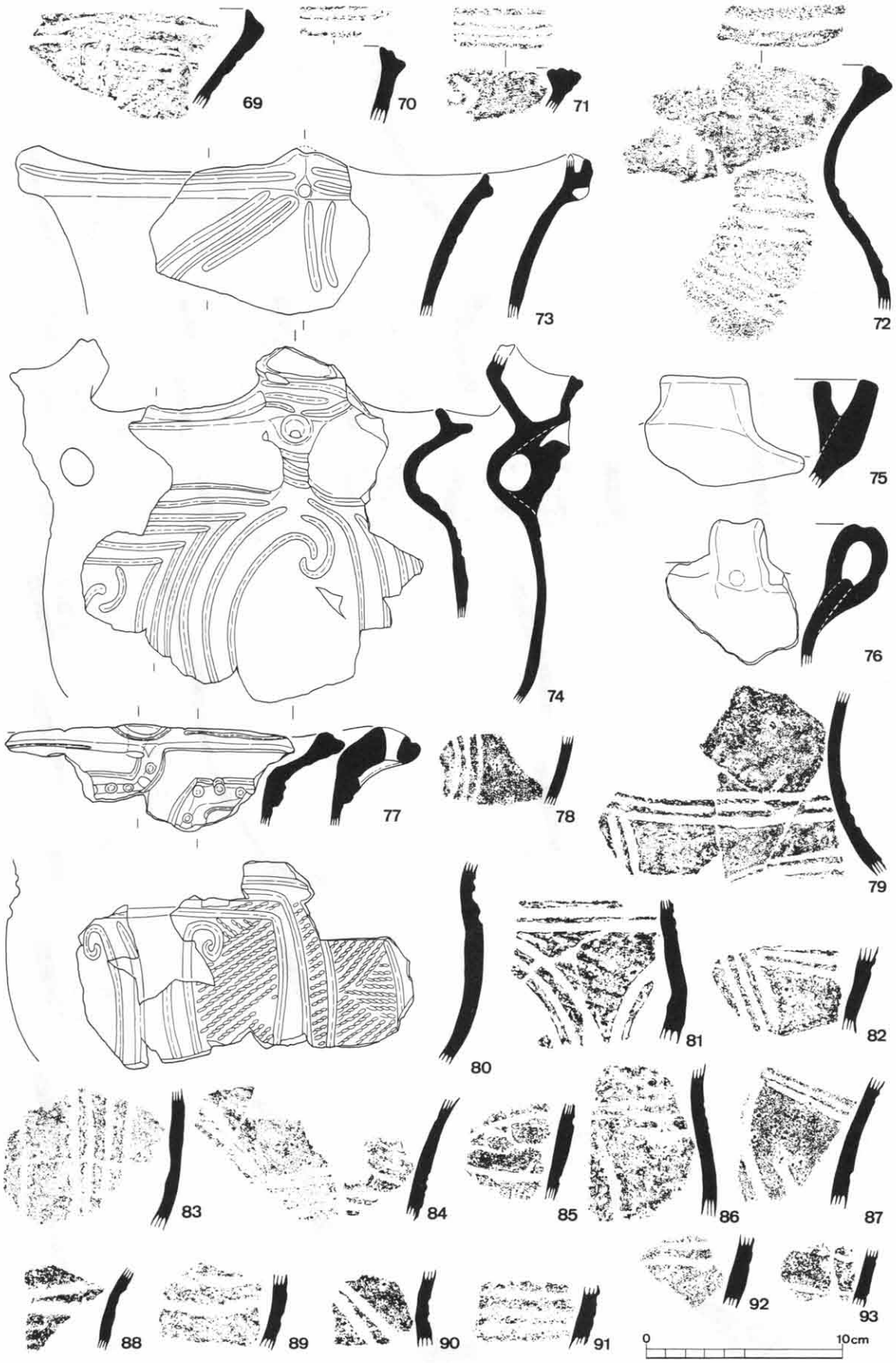
２類　斜め方向にほぼ真っ直ぐ、あるいはやや外反気味に立ち上がるもの

ａ．先端が丸いもの(114、22点)　ｂ．先端が肥厚するもの(115、５点)　ｃ．先端を面取りしているもの(116、５点)

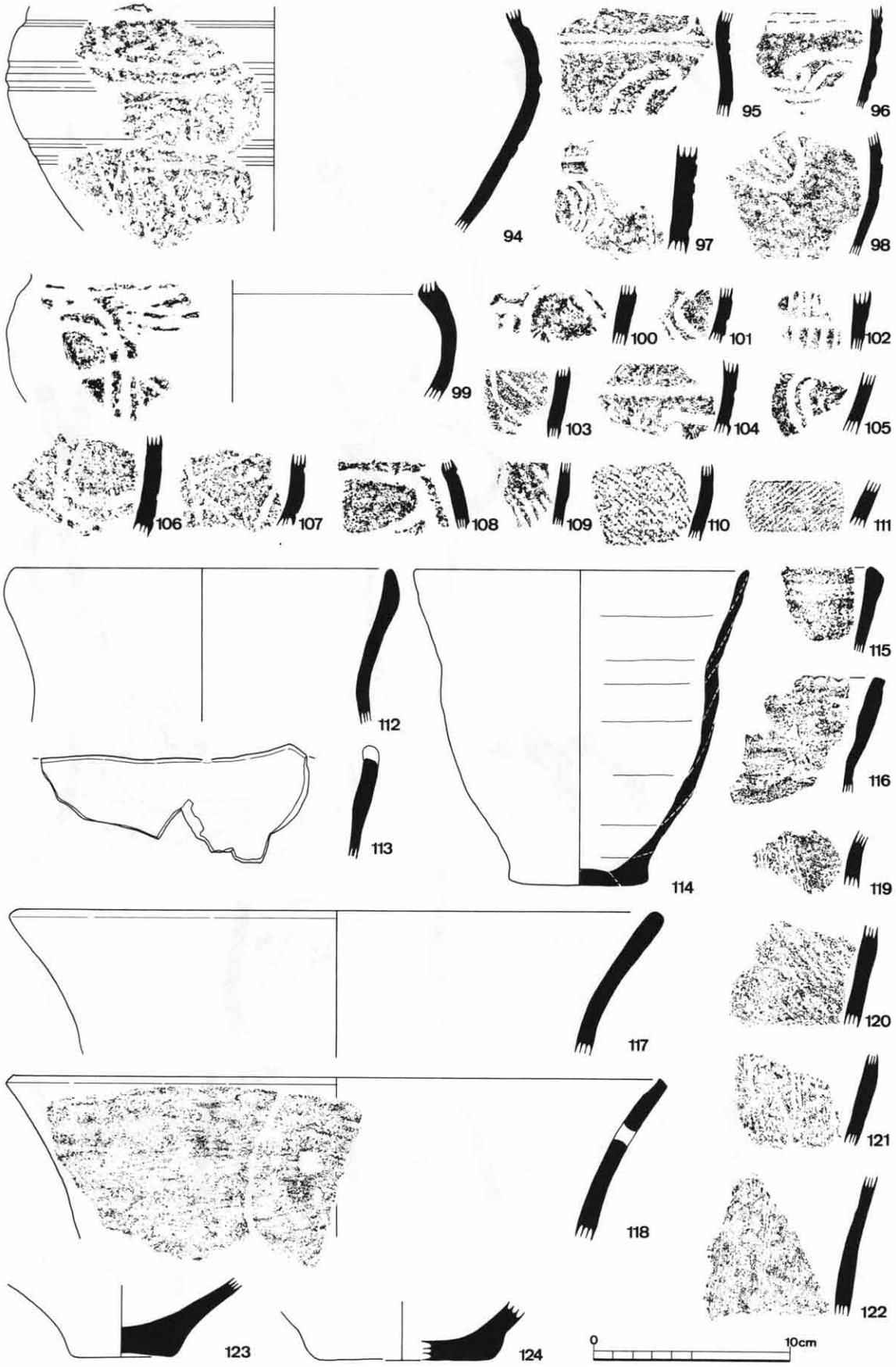
３類　大きく外反するもの

ａ．先端が丸いもの(117、１点)　ｂ．先端を面取りしているもの(118、３点)

２ａ類土器が比率的には最も多い。さらに２ａ類には、突起がつく資料もみられた(113)。胴部破片では、「細密条痕」が確認できる資料もあり、うち４点を掲載した(119～122)。



第６図　東土川遺跡出土縄文土器(3)　1/3

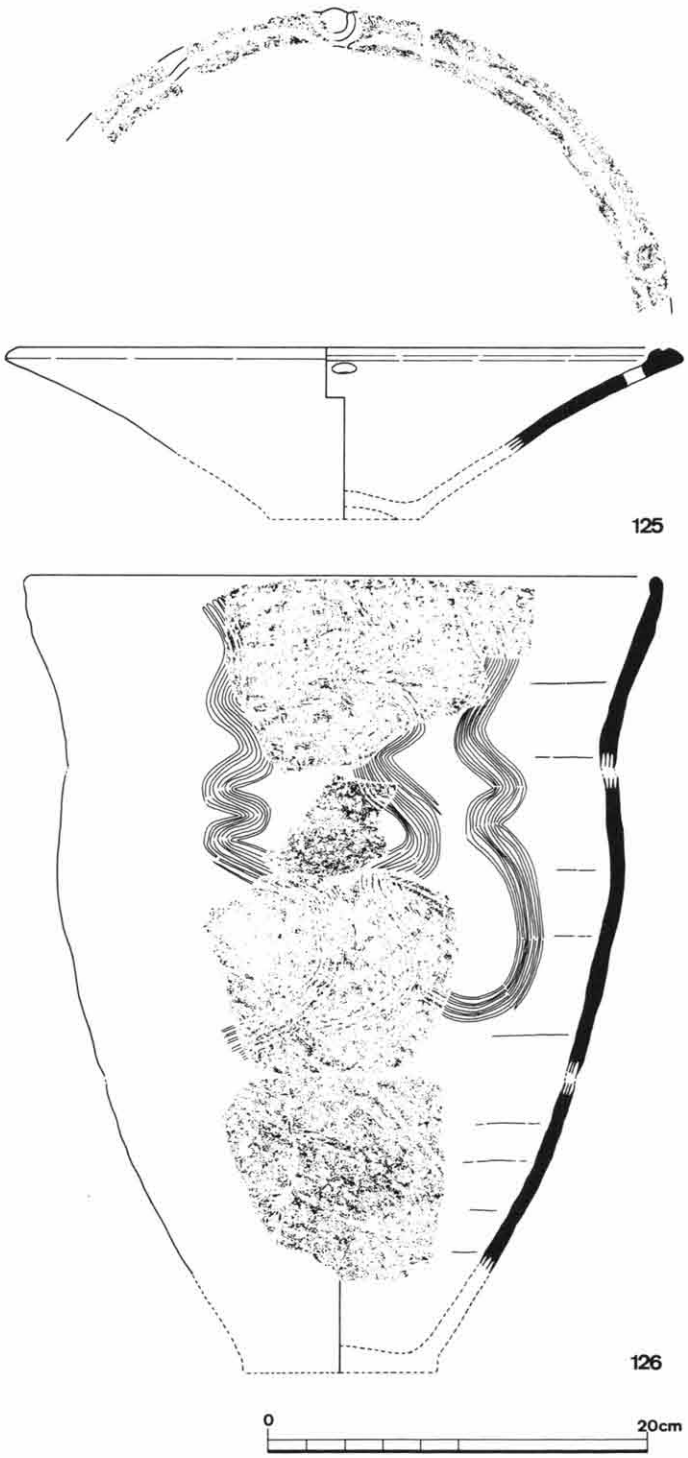


第７図　東土川遺跡出土縄文土器(4)　1/3

Ⅲ．**底部**(123、124)

８点を図化できた。底面中央が窪むものが５点(123)、平坦なものが３点(124)みられた。

時期的に古いものからほぼ順番に述べてきた。中津Ⅲ式のものからみられるが、北白川上層式土器は出土していないので、縁帯文土器直前までという限られた時間枠でとらえることができる。器種構成についてはほとんどが深鉢であり、浅鉢と認められる資料は掲載したもの程度である。胎土については文中では全くふれていないが、いわゆる生駒西麓産のものが全体の２割程度みられ、例えば図化した資料の中では１類土器の多くや無文深鉢の113・114などがあげられる。また正確な点数を集計していないため、有文土器と無文土器の比率を出すことができなかったが、無文土器が数量的には上回っているとだけ、述べておきたい。



第８図　東土川遺跡出土縄文土器(5)　1/4

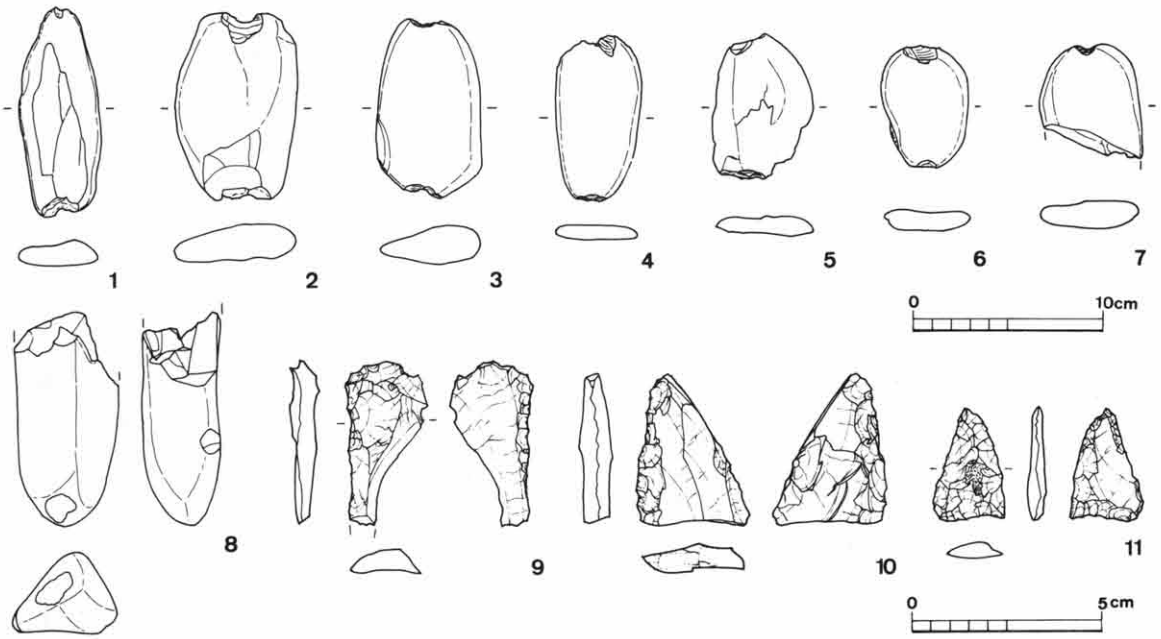
５．出土石器(第９図)

石器も11点出土しているので、簡単に紹介しておく。

礫石錘(１～７)はＢ－２地区出土のもの(６)を含めて７点出土しており、全て頁岩を用いている。長径10cm前後の、楕円形をした扁平な河原石を利用したものが多く、長軸の両端部を打ち欠いている。１～６の重量は、番号順に90.43ｇ、167.17ｇ、132.39ｇ、56.01ｇ、55.74ｇ、48.29ｇである。

鎬打器(８)は途中から折れてしまっているが、ほぼ三角柱状をしていたと思われる。残存部分は約11cmであり、その一端に使用痕がみられる。石材は砂岩質のものを使用している。

９～11は、サヌカイト製の石器であり、９・10はスクレイパー、11は石鏃である。10には火を受



第９図　東土川遺跡出土石器　　1～8.1/4　9～11.1/2

けたあとがみられる。このほかにサヌカイトの剝片が20点近く出土している。

6．おわりに

土器についてはできるだけ多く図化し、掲載することにつとめたが、紙面の制約もあってなかなか思うようにはいかなかった。これらの土器群は資料的には大変重要と考えられるが、執筆者の力量不足からその性格を充分に明らかにすることができなかった。しかしながら、本資料群が今後近畿地方及び西日本の縄文後期土器研究に果たす役割は大きいと思われ、その事実関係の報告ができたことは意義のあることであろう。また今回調査された遺構群の性格については、焼土痕やピット列などから、キャンプサイトの可能性が考えられよう。

文末ながら、今回の整理作業・公表の機会を与えていただき、様々な面で御協力くださった(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターの戸原和人・竹井治雄・中川和哉各氏と、本稿を草するにあたり、指導・助言を与えてくださった家根祥多・千葉　豊・西田泰民・橋本久和各氏に、心から感謝申し上げる次第である(敬称略)。

(こじま・たかのぶ＝同志社大学大学院)

注１　戸原和人他「名神高速道路関係遺跡　平成５年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第61冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1995

注２　『京都府遺跡地図〔第２版〕』第４分冊　京都府教育委員会　1993

注３　吉村正親「東土川遺跡(ＮＧ９)」(『京都市内遺跡試掘立会調査概報　昭和57年度』　京都市文化観光局)　1983

長宗繁一「長岡京跡・東土川遺跡(ＮＧ３)」(『京都市内遺跡試掘立会調査概報　昭和60年度』　京都市文化観光局)　1986

吉崎　伸「長岡京左京南一条三坊・東土川遺跡」(『平成元年度　京都市埋蔵文化財調査概要』

(財)京都市埋蔵文化財研究所) 1994
長宗繁一「長岡京左京一条・南一条四坊・東土川遺跡」(『平成元年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所) 1994
注4 京都市編『史料 京都の歴史』第2巻 考古 1983
注5 千葉 豊「京都盆地の縄文時代遺跡」(『京都大学埋蔵文化財研究センター紀要』X 京都大学埋蔵文化財研究センター) 1993
注6 注1に同じ
注7 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター調査員岸岡貴英氏よりご教示を得た。
注8 竹原一彦「長岡京跡左京第36次(7ANDII)発掘調査略報」『長岡京』18 1980
注9 渡辺 誠編『京都府長岡京市下海印寺遺跡範囲確認調査報告書』 長岡京市教育委員会 1982
注10 橋本久和『芥川遺跡発掘調査報告書 ー縄文・弥生集落跡の調査ー』 高槻市教育委員会 1995
注11 泉 拓良・玉田芳英「文様系統論 ー縁帯文土器ー」(『季刊考古学』17) 1986
注12 橋本久和「第8章 考察 2. 縄文時代の土器・石器」(『芥川遺跡発掘調査報告書 ー縄文・弥生集落跡の調査ー』 高槻市教育委員会) 1995
注13 千葉 豊「縁帯文系土器群の成立と展開 ー西日本縄文後期前半期の地域相ー」(『史林』72-6) 1989、千葉 豊編『小森岡遺跡』 竹野町教育委員会 1990
注14 大野市教育委員会 『右近次郎遺跡II』 1985
注15 植田文雄『今安楽寺遺跡』 能登川町教育委員会 1990
注16 前川威洋『九州縄文文化の研究』 前川威洋遺稿集刊行会 1979
注17 注16に同じ
注18 高知県教育委員会 『宿毛貝塚発掘調査報告書』 1986
注19 注10に同じ

参考文献

長岡京市史編さん委員会 『長岡京市史 資料編一』 1991
京都大学文学部博物館 『先史時代の北白川』 1991
玉田芳英「中津・福田KII式土器様式」(『縄文土器大観』4 小学館) 1989

京都工区B－1地区(東土川遺跡)調査風景

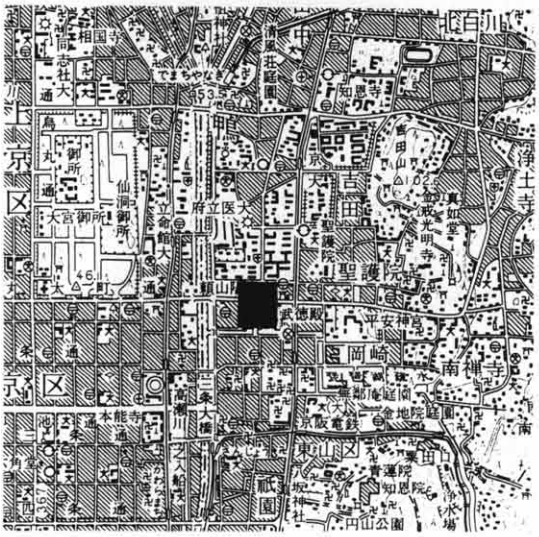
府内遺跡紹介

66. 白河北殿跡

白河北殿は、院政を開始した白河法皇によって造営された院御所の一つで、現在の京都市左京区聖護院河原町・東丸太町・東竹屋町・聖護院東寺領町の一帯で、現在の熊野神社の西側の地域に広がっている。文献史料の記載によれば、院御所の白河南殿(白河泉殿)の北側に営まれたので、白河北殿と呼ばれたが、広さは方四町を占める大きさであったらしい。この現左京区の辺りは、この白河北殿・南殿以外にも、鳥羽上皇の押小路殿などの院御所が設けられたほか、白河法皇以来の六勝寺をはじめとする寺院の造営や公家の邸宅が造られるなど、「京白河」と異名をとるほど、院政期に開発されたところである。むろん、場所的には平安京の外側にはなるが、院政期には平安京と一体化した観すらあった地域である。そのため、現在、この地域を遺跡として認識する場合、「白河街区跡」という別称で呼ぶこともある。

このような地域の中で、まず白河泉殿が嘉保2(1095)年5月に前大僧正の覚円の坊舎が設けられていたところに造営が開始された。そして、西には丈六の九体阿弥陀仏を本尊とした阿弥陀堂である蓮華造院を建設したことから、「白川阿弥陀堂御所」とも呼ばれていた。このように、白河の地でも、鳥羽離宮での造営と同じように、阿弥陀堂と院御所が並列して造営されることとなった。歴代の法皇の住む院御所のあり方がうかがえるだけでなく、このような建築が院政期に流行していたことがわかる。

白河北殿は、白河泉殿の建設後約20年を経た元永元(1118)年3月に建設されはじめた。その場所が泉殿の北側にあったため、これ以後、泉殿は南本御所とか南殿・白河南殿と呼ばれるようになった。白河北殿の造営は、『中右記』によれば、元永元(1118)年3月16日条には、「早旦院御新造御所御覧云々」とあって、白河法皇は早くも3月16日には建造中の北殿を見ている。そして、同年7月10日条には「天晴、今夕法王可渡御白川北新小御所也」とあって、造営から4か月後には法皇は新造の北殿に移っているのである。この記事からすると、北殿は、工事の期間が相当短くて完成しており、法皇もかなり早く移ったことがわかる。



遺跡所在地(1/50,000)

その後、大治4(1129)年に白河北殿で拡充工事が実施されたが、その年の7月に白河法皇が

没した。法皇の死によって院御所の造営がどうなったか、詳しくは知りえないが、『本朝世紀』や『百錬抄』によれば、法皇の死から15年ほどたった天養元(1144)年5月9日に「法皇仙居白川北殿焼亡」とあって、火災にあってしまい北殿の建物が失われたことが記載されている。同日の『台記』の記述では、鳥羽法皇は、「先之、渡御南殿」とあるように、ともかく火災を避けるように白河南殿へ移っている。このときは、一種の避難所のように白河南殿の建物が使用されていたようである。一方で、白河北殿の再建は、この火災の後すぐに着手されたらしく、このときは平忠盛の功によって比較的早く再建が行われたといわれている。忠盛は、この時の造営に関する功績で正四位下に叙されており、鳥羽院政下における平氏の勢力伸張のきっかけになったことは周知の事実である。

このような白河北殿であるが、完全な焼亡は保元の乱である。もちろん、保元の乱は、主として摂関家や武家が後白河天皇側と崇徳上皇側とに分かれて、武力によって雌雄を決した権力闘争の一つであるが、そのときの戦乱の舞台になった場所の一つがこの白河北殿である。『兵範記』保元元(1156)年7月9日条で「夜半、上皇自鳥羽田中御所、密々御幸白川前斎院御所」とあって、崇徳上皇側の本拠が白河の地にあった。そして、11日の夜明け頃に、『保元物語』などで名高いいわゆる源　義朝の発議による夜討ちが行われるのである。そのときの『兵範記』には「鶏鳴清盛朝臣、義朝、義康等、軍兵都六百餘騎發向白河」とある。その後、「辰剋、東方起煙炎、御方軍已責寄懸火了云々、清盛等乗勝遂逃、上皇左府晦跡逐電、白川御所等焼失畢」とあって、戦乱のさなかに崇徳上皇や左大臣藤原頼長が逃亡した後、「白川御所等」が焼亡したことがはっきり書かれている。しかも、「白川御所等」には注記があって、「斎院御所并院北殿也」とはっきりあるように、崇徳上皇がこの戦乱に際して本拠とした斎院御所だけでなく、白河北殿まで焼亡したのである。この記述から推測すれば、白河北殿とこの斎院御所とはかなり近いところに存在したといえよう。

このように、白河北殿は、保元の乱による戦乱の中で焼失した結果、ついに灰燼に帰してしまい、先に見たように、天養元年の焼亡の時のように再建されることもなく、ついに土中に埋もれることになった。白河の地は、この後だんだんと変貌していくようであるが、この白河北殿の院御所としての存続は、期間的には、白河法皇による建設が元永元(1118)年で、焼亡が保元元(1156)年であるから、40年にも満たない間であった。

このような経過を経た白河北殿であるが、1970年代になり、ようやく発掘調査が行われ、それまで文献史料からだけしか知られなかった白河北殿のようすが少しずつわかるようになってきた。それに伴い、白河北殿をはじめ、南殿や六勝寺、さらに貴族の邸宅もあったということで、一つの遺跡群として認識されるようになった。しかし、北殿の中心部分の建物跡や全体的な構造などは、まだほとんどわかっていないのが現状である。今後の発掘調査の進展で詳しい実態などが判明するであろう。

（土橋　誠）

＜参考文献＞

杉山信三「後鳥羽上皇の白河殿と鳥羽殿について」(『日本建築学会研究報告』36　日本建築学会)　1956
杉山信三『院家建築の研究』　吉川弘文館
岡田保良「白河北殿跡比定地ＡＡ１８区の試掘調査」(『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和53年度』　京都大学埋蔵文化財研究センター)　1979
岡田保良「京都大学構内遺跡と京・白河」(『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和53年度』　京都大学埋蔵文化財研究センター)　1979
岡田保良「平安時代鴨東白河の景観復元」(『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和54年度』　京都大学埋蔵文化財研究センター)　1980
泉　拓良・岡田保良・宇野隆夫ほか「白河北殿北辺の調査」(『京都大学埋蔵文化財調査報告』２　京都大学埋蔵文化財センター)　1981
上村和直・鈴木広司・平方幸雄「白河街区跡」(『昭和56年度京都市埋蔵文化財調査概要(発掘調査編)』　(財)京都市埋蔵文化財研究所)　1983
辻　裕司・丸川義弘・平方幸雄ほか「発掘調査　白河街区」(『昭和57年度京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所)　1984
梶川敏夫「発掘調査　白河街区」(『昭和59年度京都市埋蔵文化財調査概要』　(財)京都市埋蔵文化財研究所)　1987
五十川伸也「鴨東白河の鋳物工房－京都大学構内の鋳造に関する遺跡－」(『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和60年度』　京都大学埋蔵文化財研究センター)　1988
『京都の歴史』第二巻　中世の明暗　京都市
『京都市の地名』　平凡社
『國史大辞典』　吉川弘文館

長岡京跡調査だより・53

毎月行われている長岡京連絡協議会は、平成７年２月22日、３月22日、４月26日に開催された。報告された京内の発掘調査は、宮内９件、左京域20件、右京域11件で、京域外の５件をあわせて45件であった。調査地一覧表と位置図を参照されたい。

調査地一覧表

（1995年４月末現在）

番号	次　数	地区名	調　査　地	調　査　機　関	調査期間
1	宮内第291次	7ANBDC-1	向日市寺戸町殿長2-1・3-1他	(財)向日市埋文セ	9/19～3/18
2	宮内第292次	7ANFOC-2	向日市上植野町御塔道29-4	(財)向日市埋文セ	9/29～10/26
3	宮内第293次	7ANFOC-3	向日市上植野町御塔道5-11	(財)向日市埋文セ	2/6～2/8
4	宮内第294次	7ANFMK-3	向日市上植野町南開11-3	(財)向日市埋文セ	2/16～3/16
5	宮内第295次	7ANBMC-3	向日市寺戸町南垣内8-2	(財)向日市埋文セ	3/2～
6	宮内第296次	7ANEAC-3	向日市鶏冠井町荒内91-22	(財)向日市埋文セ	3/2～3/13
7	宮内第297次	7ANEKI	向日市鶏冠井町北井戸31	(財)向日市埋文セ	3/6～3/17
8	宮内第298次	7ANEKI-2	向日市鶏冠井町北井戸28	(財)向日市埋文セ	3/22～3/24
9	宮内第299次	7ANEOK	向日市鶏冠井町御屋敷29-2	(財)向日市埋文セ	4/17～6/23
10	左京第333次	7ANVST-5	京都市南区久世東土川町正登	(財)京都府埋文セ	7/4～1/20
11	左京第334次	7ANVKN-2	京都市南区久世東土川町金井田	(財)京都府埋文セ	8/8～2/27
12	左京第336次	7ANVKN-4	京都市南区久世東土川町金井田	(財)京都府埋文セ	11/8～2/27
13	左京第337次	7ANVKN-5	京都市南区久世東土川町金井田	(財)京都府埋文セ	10/27～2/27
14	左京第339次	7ANYNO-2	京都市伏見区淀樋爪町地内	(財)京都市埋文研	4/1～3/31
15	左京第341次	7ANENR-3	向日市鶏冠井町西金村5他	(財)向日市埋文セ	5/13～12/26
16	左京第351次	7ANEHB-3	向日市鶏冠井町八ノ坪	(財)向日市埋文セ	10/12～1/27
17	左京第352次	7ANMKK-4	長岡京市神足上八ヶ坪12	(財)長岡京市埋文セ	11/7～1/24
18	左京第353次	7ANFIR-2、7ANFDN	向日市上植野町池ノ尻・大門	(財)京都府埋文セ	11/7～2/27
19	左京第354次	7ANFMM-4	向日市上植野町円山3	(財)向日市埋文セ	11/16～12/22
20	左京第355次	7ANDSB-3	向日市森本町四ノ坪31-1	(財)向日市埋文セ	11/24～12/22
21	左京第356次	7ANFGB-3	向日市上植野町五ノ坪1-2他	(財)向日市埋文セ	1/10～7/20
22	左京第357次	7ANMTK	長岡京市神足典薬15-5	(財)長岡京市埋文セ	1/17～3/9
23	左京第358次	7ANEGZ-3	向日市鶏冠井町極楽寺地内	(財)向日市埋文セ	1/26～2/4
24	左京第359次	7ANFOR-6	向日市上植野町落堀14-4	(財)向日市埋文セ	2/3～3/10
25	左京第360次	7ANFMM-5	向日市上植野町円山10-4	(財)向日市埋文セ	4/4～4/28
26	左京第361次	7ANVKN-6	京都市南区久世東土川町金井田	(財)京都府埋文セ	4/10～
27	左京第362次	7ANVKN-7	京都市南区久世東土川町金井田	(財)京都府埋文セ	4/10～
28	左京第363次	7ANVKN-8	京都市南区久世東土川町金井田	(財)京都府埋文セ	4/10～
29	左京第364次	7ANYNO-2	京都市伏見区淀樋爪町地内	(財)京都市埋文研	4/1～
30	右京第483次	7ANLHK-5	長岡京市馬場二丁目217他	(財)長岡京市埋文	10/3～11/25
31	右京第486次	7ANOTJ-2	長岡京市下海印寺東条39他	(財)長岡京市埋文	11/30～12/9
32	右京第487次	7ANSTE-1	大山崎町円明寺鳥居前4-2	大山崎町教育委員会	12/13～12/21
33	右京第488次	7ANITT-1	長岡京市今里四丁目11-1	(財)長岡京市埋文セ	1/30～3/21

34	右京第489次	7ANFKK-3	向日市上植野町切ノ口2-1・3-1・5-2	(財)向日市埋文セ	2/6～2/28
35	右京第490次	7ANLMR	長岡京市馬場一丁目102-13他	(財)長岡京市埋文セ	2/22～3/23
36	右京第491次	7ANSTD	大山崎町円明寺佃12・15	大山崎町教育委員会	3/14～
37	右京第492次	7ANGSR	長岡京市滝ノ町一丁目115-1	(財)長岡京市埋文セ	3/28～4/3
38	右京第493次	7ANKST-6	長岡京市開田二丁目213	(財)長岡京市埋文セ	4/10～5/11
39	右京第494次	7ANMWY-5	長岡京市神足一丁目602-7	(財)長岡京市埋文セ	4/18～
40	右京第495次	7ANHBB-3	長岡京市粟生弁天芝2-1	(財)長岡京市埋文セ	4/24～5/9
41	中海道遺跡第29次	3NNANK-29	向日市物集女町中海道90-1	(財)向日市埋文セ	11/15～12/22
42	中海道遺跡第30次	3NNANK-30	向日市物集女町中海道51-8	(財)向日市埋文セ	1/10～2/10
43	中海道遺跡第31次	3NNANK-31	向日市物集女町中海道27・28	(財)向日市埋文セ	1/30～2/11
44	奥海印寺遺跡第７次	2LOPNG	長岡京市奥海印寺新郷26-3	(財)長岡京市埋文セ	11/14～11/25
45	山城国府跡第34次	7XYMS'FH-6	大山崎町大山崎藤井畑10	大山崎町教育委員会	3/23～4/4

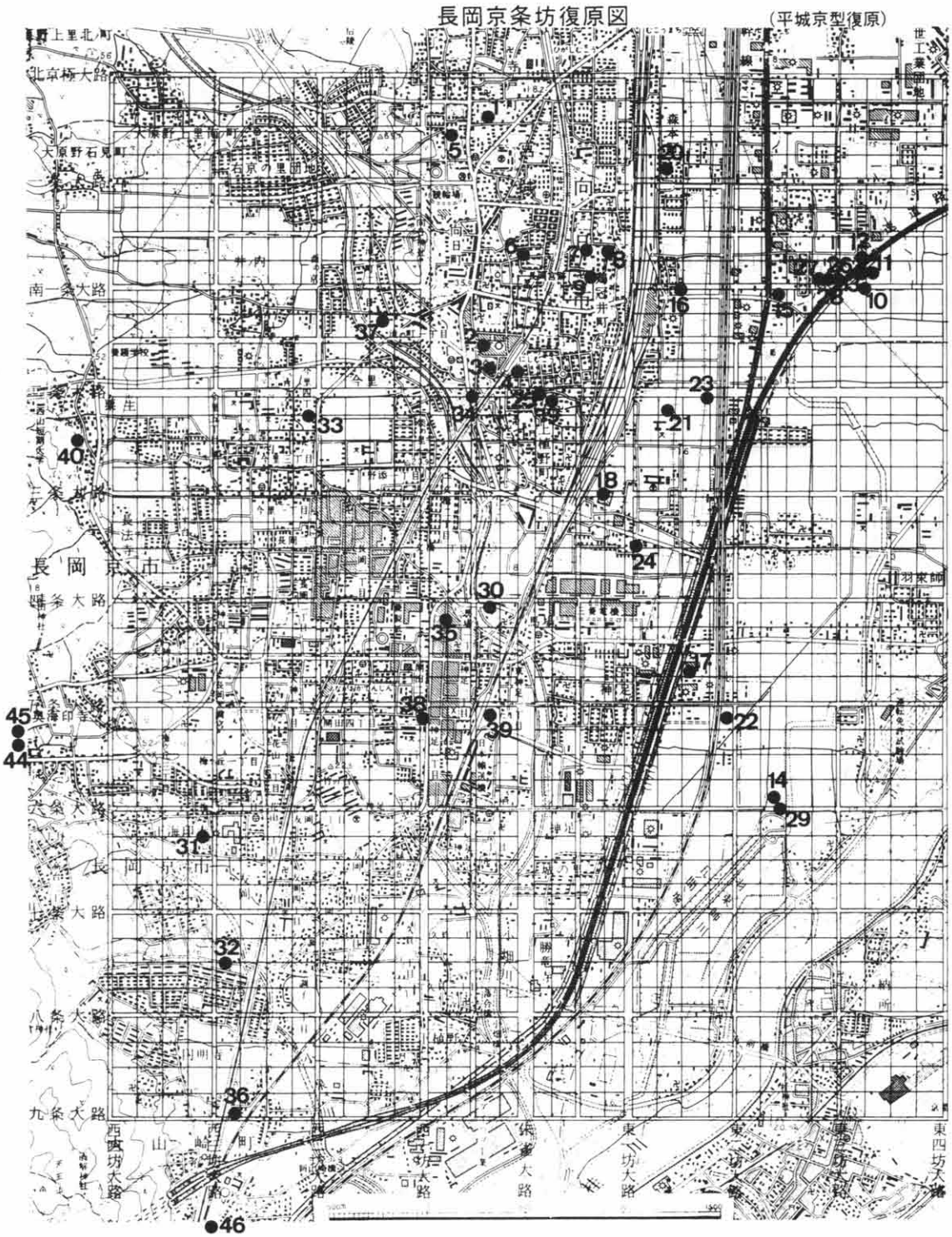
長岡京連絡協議会では、現地調査の報告とあわせて、資料報告を行っている。長岡京跡あるいは乙訓地域の埋蔵文化財等に関して、各担当者が資料を集成したり、検討を加えた中間報告であるが、多くはいずれ論考として発表されるであろう。

以下、昨年度の資料報告の発表者と論題を掲げておく。

月日	所属	発表者	論題
4／28	長岡京市埋文セ	小田桐　淳	長岡京の鋳造遺構に関する覚書
5／25	京都府埋文セ	戸原　和人	下植野南遺跡の平安時代遺構群
6／22	大山崎町教委	寺嶋　千春	境界の町の祭祀―大山崎町字大山崎及び島本町字山崎地域の事例により―
7／27	向日市埋文セ	中塚　　良	考古学的調査からみた小氷期の地形条件―長岡京域・木津川沖積低地の対比から―
8／24	長岡京市埋文セ	山本　輝雄	長岡京出土の漆工関係遺物について
9／28	京都府埋文セ	岩松　　保	長岡京の条坊計画とその施工
10／26	京都市埋文研	加納　敬二	大原野神社と周辺の遺跡―大原野地区圃場整備事業に伴う埋蔵文化財調査より―
11／24	向日市埋文セ	梅本　康広	長岡京成立以前の在地勢力の諸相―埴輪を通じてみた古墳時代の乙訓地域―
12／21	長岡京市埋文セ	岩崎　　誠	長岡京期の土師甕について　―特徴と消費状況―
1／25	京都府埋文セ	石尾　政信	住居（集落）の分布から交通状況を考える
3／22	向日市埋文セ	松田　留美	長岡京出土の墨書土器
4／26	長岡京市埋文セ	木村　泰彦	甕据付穴を持つ建物についての再検討

前号(55号)の74頁、一覧表25番の「城味才遺跡」は「白味才遺跡」の誤植です。訂正するとともにお詫びします。

（小山雅人）



▽番号は一覧表・本文（）内と対応

調査地位置図

財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター組織及び職員一覧

（平成７年６月１日現在）

理事長

樋口　隆康

（京都府文化財保護審議会会長･京都大学名誉教授）

副理事長

中澤　圭二

（京都府文化財保護審議会委員･京都大学名誉教授）

常務理事

木村　英男

理　事

川上　　貢

（京都府文化財保護審議会会長職務代理･京都大学名誉教授）

上田　正昭

（京都府文化財保護審議会委員･京都大学名誉教授）

藤井　　学

（奈良大学文学部教授）

足利　健亮

（京都大学大学院人間･環境学研究科長）

佐原　　眞

（国立歴史民俗博物館副館長）

都出比呂志

（大阪大学文学部教授）

井上　満郎

（京都産業大学法学部教授）

藤田　价浩

（西芳寺貫主）

栂野　　宏

（京都府府民労働部文化芸術室長）

武田　　暹

（京都府教育庁指導部長）

堤　圭三郎

（京都府教育庁指導部理事･文化財保護課長事務取扱）

監　事

奥田　俊治

（京都府出納管理局長）

吉田三枝子

（京都府監査委員事務局長）

事務局長		木村　英男
事務局次長		園山　哲・安藤　信策
総務課	課長	園山　哲(兼)
	課長補佐	安田　正人
	総務係長	安田　正人(兼)
	主事	杉江　昌乃　今村　正寿 松尾　幸枝　西村　晃 鍋田　幸世
	調査員	橋本　清一 (府立山城郷土資料館へ派遣)
調査第1課	課長	小山　雅人
	課長補佐	水谷　壽克
	企画係長	水谷　壽克(兼)
	調査員	古瀬　誠三
	嘱託	田中　敦義
	資料係長	小山　雅人(事務取扱)
	主任調査員	松井　忠春・土橋　誠
	調査員	田中　彰
調査第2課	課長	安藤　信策(兼)
	課長補佐	平良　泰久・奥村清一郎
	調査第1係長	伊野　近富
	主任調査員	増田　孝彦・竹原　一彦
	調査員	岡崎　研一　柴　暁彦 河野　一隆　村田　和弘 筒井　崇史
	調査第2係長	奥村清一郎(兼)
	主任調査員	石井　清司
	調査員	黒坪　一樹　竹下　士郎 尾崎　昌之　田代　弘 小池　寛　大岩　洋一 野々口陽子
	調査第3係長	辻本　和美
	主任調査員	引原　茂治
	調査員	石尾　政信　伊賀　高弘 八木　厚之　森下　衛 有井　広幸　奈良　康正
	調査補佐員	橋本　稔
	調査第4係長	平良　泰久(兼)
	主任調査員	戸原　和人
	調査員	竹井　治雄　岩松　保 中川　和哉　森島　康雄 野島　永

センターの動向

1．できごと

2.6　銭塚古墓(舞鶴市)発掘調査開始

長岡京跡左京第333・334・336・337次発掘調査(京都市・名神ＰＡ工区Ｂ－４、Ｂ－３、Ａ－１、Ｂ－５地区)現地説明会

16　奈具岡遺跡(弥栄町)発掘調査終了(5.23～)

銭塚古墓発掘調査終了(2.6～)

17　職員研修―コンピュータと考古学―講師・京都市埋蔵文化財研究所、辻純一氏

21　北稲遺跡(精華町)現地説明会

22　長岡京連絡協議会

23　上野古墳群・滝谷遺跡(丹後町)現地説明会

24　上野古墳群・滝谷遺跡発掘調査終了(10.7～)

ニゴレ遺跡発掘調査終了(4.18～)

長岡京跡左京第353次(向日市・府住宅課)関係者説明会

25　第72回埋蔵文化財セミナー開催(別掲)

27　亀山城跡(亀岡市)関係者説明会、発掘調査終了(9.21～)

長岡京跡左京第334・336・337次発掘調査終了(8.8～、11.8～、10.27～)

北稲遺跡発掘調査終了(7.20～)

釜ヶ谷遺跡(木津町)発掘調査終了(1.23～)

3.3　黒部製鉄遺跡(弥栄町)発掘調査終了(4.18～)

左坂古墳群Ｂ支群(大宮町)現地説明会、発掘調査終了(7.25～)

今林古墳群(園部町)発掘調査終了(9.7～)

長岡京跡(向日市・府住宅課)発掘調査終了(11.7～)

内里八丁遺跡(八幡市)発掘調査終了(5.9～)

5　「スライドでみるおとくにの発掘」(於：向日市文化資料館)講師参加(中川調査員)

7～16　奈良国立文化財研究所技術者特別研修「人骨調査課程」参加(石崎調査員)

22　第42回理事会(於：当センター)福山敏男理事長、城戸常務理事、中澤圭二、堤圭三郎理事出席

長岡京連絡協議会

27　全国埋蔵文化財法人連絡協議会コンピュータ等研究委員会第２回近畿地区ＯＡ委員会(於：大阪市)　土橋主任調査員出席

30　退職職員辞令交付(別掲)

31　第43回役員会・理事会開催(於:ルビノ京都堀川) 樋口隆康副理事長、城戸秀夫常務理事、中澤圭二、川上　貢、上田正昭、藤井　学、足利健亮、都出比呂志、藤田价浩、武田　暹、堤圭三郎の各理事出席

4.1　理事長ほか就任及び再任(別掲)

新規採用職員辞令交付(別掲)

人事異動(別掲)

10　長岡京跡左京第361、362、363次(京都市・名神ＰＡ工区(Ａ－4、Ａ－6ａ、Ａ－6ｂ地区)発掘調査開始

11　黒部製鉄遺跡(弥栄町)発掘調査開始

奈具岡南古墳(弥栄町)発掘調査開始

17　左坂横穴群(大宮町)発掘調査開始

大俣城跡(舞鶴市)発掘調査開始

18　弓田遺跡(木津町)発掘調査開始

19　植物園北遺跡(京都市)発掘調査開始

20　内里八丁遺跡(八幡市)発掘調査開始

24　長岡京跡左京第353次(向日市・府住宅課)発掘調査開始

釜ヶ谷遺跡(木津町)発掘調査開始

26　長岡京連絡協議会

2．普及啓発活動

2.25　第72回埋蔵文化財セミナー開催(於：府立山城郷土資料館)―都城と瓦生産―有井広幸「木津町梅谷・市坂瓦窯跡の調査について」、中島和彦「奈良市大安寺瓦窯跡の調査について」、上原真人「古代の瓦作りについて」

3．人事異動

3.30　高橋美久二調査第一課長退職(滋賀県立大学へ)

31　佐伯拓郎次長、藤原寛志主事退職(京都府教育庁へ)、村田照久主任調査員退職(城陽市教育委員会へ)、森正哲次調査員退職(向日市立寺戸中学校へ)

4.1　樋口隆康理事長、中澤圭二副理事長就任、井上満郎理事、栂野　宏理事、奥田俊治監事新任、常務理事、他の理事、監事再任

園山　哲次長、古瀬誠三、竹下士郎、八木厚之、森下　衛、森　　正、奈良康正、藤井　整各調査員、西村　晃主事採用(京都府教育庁から)、村田和弘調査員新規採用

(安藤信策)

受贈図書一覧（7.2.1～4.30）

苫小牧市埋蔵文化財調査センター	柏原27・ニナルカ・静川５・６遺跡発掘調査概要報告書、美沢東遺跡群発掘調査概要報告書Ⅱ、苫小牧市美沢10遺跡発掘調査概要報告書
(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第204集 中曽根遺跡発掘調査報告書、同第205集 矢盛遺跡第１次発掘調査報告書、同第206集 向館遺跡発掘調査報告書、同第207集 倍田Ⅳ遺跡発掘調査報告書、同第208集 黒内Ⅷ・黒内ⅩⅢ遺跡発掘調査報告書
北上市立埋蔵文化財センター	北上市埋蔵文化財調査報告第２集 馬場野遺跡、同第３集 成田遺跡(Ⅱ)(1991年度)、同第４集 森下遺跡(1991年度)、同第５集 本宿遺跡、同第12集 北上遺跡群(1993年度)、同第15集 飯島遺跡、北上市埋蔵文化財年報(1992年度)
多賀城市埋蔵文化財調査センター	常設展示解説書、多賀城市文化財調査報告書第19集 高崎遺跡調査報告書、同第35集 市川橋遺跡ほか、同第36集 柏木遺跡Ｂ地点発掘調査報告書、多賀城市埋蔵文化財調査センター年報 第７号、同－平成５年度－
(財)福島県文化センター	福島県文化財調査報告書第306集 東北横断自動車道遺跡調査報告26、同第307集 東北横断自動車道遺跡調査報告27、同第308集 東北横断自動車道遺跡調査報告28
(財)福島市振興公社文化財調査室	福島市埋蔵文化財報告書第58集 宇輪台遺跡、同第59集 茶畑Ａ遺跡発掘調査報告、同第60集 宮畑遺跡発掘調査報告、同第61集 摺岀振Ｂ遺跡・下ノ平Ｅ遺跡、同第62集 摺上川ダム埋蔵文化財調査概要Ⅲ、同第63集 倉ノ前遺跡、同第64集 勝口前畑遺跡、同第65集 月崎Ａ遺跡(第７～９・11～13次調査)月崎Ｃ遺跡・高館跡
(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団	埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第145集 稲荷前遺跡(Ｂ・Ｃ区)、同第146集 金井遺跡Ｂ区、同第149集 矢島南遺跡、同第157集 上大寺遺跡、同第159集 中妻三丁目遺跡
(財)千葉県文化財センター	千葉県文化財センター調査報告第242集 四街道市御山遺跡(1)、同第243集 八千代市権現後遺跡・北海道遺跡・井戸向遺跡、同第244集 新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅷ、同第245集 八千代市沖塚遺跡・上の台遺跡 他、同第246集 東金市妙経遺跡・井戸谷９号墳、同第247集 海上町岩井安町遺跡、同第248集 東金市道庭遺跡、同第249集 野田市岩名第14遺跡、同第250集 印西町小林城跡、同第251集 下総町長稲葉遺跡、同第252集 千葉市矢作貝塚Ⅱ、同第253集 土気緑の森工業団地内発掘調査報告書、同第254集 市原市南青野遺跡、同第255集 石揚遺跡、同第256集 千葉県中近世城跡研究調査報告書第14集、同第257集 市原市川焼瓦窯跡発掘調査報告書、同第258集 野田市東金野井貝塚発掘調査報告書、同第259集 長柄町横穴群徳増支群発掘調査報告書、研究連絡誌 第39号、同第40号、同第42号、千葉県文化財センター年報 No.19、千葉県文化財センター研究紀要16、房総考古学ライブラリー８ 歴史時代(2)
(財)市原市文化財センター	第９回市原市文化財センター遺跡発表会要旨、市原市文化財センター年報(昭和63年度)、同(平成元年度)、(財)市原市文化財センター調査報告書第48集 市原市山田橋亥の海道貝塚、同第50集 市原市安須古墳群、同第51集 市原市妹崎東原遺跡Ｂ地点、同第52集 市原市待戸遺跡・待戸供養塚
(財)君津郡市文化財センター	(財)君津郡市文化財センター発掘調査報告書第69集 文脇遺跡、同第84集 請西遺跡群Ⅲ・鹿島塚Ａ遺跡、同第87集 蓮華寺遺跡Ⅱ、同第90集 嘉登遺跡・大竹長作古墳群、同第100集 上大城遺跡発掘調査報告書、同第101集 神田遺跡・神田古墳群
(財)山武郡市文化財センター	油井古塚原遺跡 丑子台1037地点、古内遺跡、南麦台遺跡
(財)東総文化財センター	東総文化財センター調査報告第１集 高城跡発掘調査報告書
富山県埋蔵文化財センター	富山県総合運動公園内遺跡発掘調査報告(4) 吉倉Ｂ遺跡、小杉流通業務団地内遺跡群第12次発掘調査概要 No.15Ａ遺跡、富山県埋蔵文化財センター年報 平

	成５年度
(財)愛知県埋蔵文化財センター	埋蔵文化財発掘調査報告書第54集 四国縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書Ｘ
豊橋市埋蔵文化財調査事務所	豊橋市埋蔵文化財調査報告書第21集 吉田城址(Ⅰ)、同第22集 波入江遺跡、同第23集 熊野遺跡、同第24集 吉田城址(Ⅱ)、同第25集 東田遺跡
(財)瀬戸市埋蔵文化財センター	(財)瀬戸市埋蔵文化財センター調査報告第10集 水南中窯跡
(財)滋賀県文化財保護協会	ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書ＸＸ－５ 墓ノ町遺跡・古掌遺跡・樋之口遺跡・十禅寺遺跡、同ＸＸ－７ 蔵ノ町遺跡、県営かんがい排水事業関連遺跡発掘調査報告書Ⅸ－５ 柿木原遺跡、同Ｘ－１ 今川東遺跡・十禅寺遺跡、加茂遺跡・一ノ坪遺跡発掘調査報告書、鴨田遺跡発掘調査報告書Ⅲ、小比江遺跡・太田遺跡
守山市立埋蔵文化財センター	守山市文化財調査報告書第39冊 益須寺遺跡第15次発掘調査報告書、同第52冊 古高遺跡第７次発掘調査報告書、同第53冊 平成５年度国庫補助対象遺跡
(財)大阪文化財センター	大阪府下埋蔵文化財研究会(第31回)資料
(財)大阪府埋蔵文化財協会	大阪府埋蔵文化財協会研究紀要３ 設立10周年記念論集、10年のあゆみ
(財)大阪市文化財協会	大阪市文化財論集、財団法人 大阪市文化財協会 15年のあゆみ
(財)八尾市文化財調査研究会	(財)八尾市文化財調査研究会報告42 Ⅰ跡部遺跡(第14次調査)・Ⅱ植松遺跡(第２次調査)他、同43 Ⅰ中田遺跡(第16次調査)・Ⅱ中田遺跡(第17次調査)他、同44 高安古墳群・大石古墳
高槻市立埋蔵文化財調査センター	高槻市文化財調査報告書第18冊 芥川遺跡発掘調査報告書
奈良国立文化財研究所	奈良国立文化財研究所年報1994、平城宮発掘調査出土木簡概報(29)、重点領域研究『遺跡探査』第３回公開シンポジウム講演予稿集、同研究成果検討会議論文集、重点領域研究『遺跡探査』ニュースレター合冊 No.１～No.10
岡山県古代吉備文化財センター	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告93 中国横断自動車道建設に伴う発掘調査２、同97 百間川原尾島遺跡４、同100 南溝手遺跡１、同101 米田遺跡、川戸古墳群発掘調査報告書
倉敷埋蔵文化財センター	倉敷埋蔵文化財センター年報１ 1993年度
(財)広島県埋蔵文化財調査センター	広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第127集 灰塚ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(1)、同第129集 山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(Ｘ)
(財)広島市歴史科学教育事業団	(財)広島市歴史科学教育事業団調査報告書第11集 下沖２号遺跡発掘調査報告、同第12集 新交通システム建設工事事業地内埋蔵文化財発掘調査報告Ⅲ 、同第13集 牛田早稲田遺跡発掘調査報告、同第14集 平尾遺跡発掘調査報告、広島市の文化財第50集 古路・古道調査報告、第17回文化財展 はにわ ハニワ 埴輪、平成５年度第２回考古学教室感想文集
(財)東広島市教育文化振興事業団文化財センター	文化財センター調査報告書第１冊 高屋東１号遺跡発掘調査報告書、同第２冊 田中遺跡発掘調査報告書、同第３冊 五反田遺跡発掘調査報告書、同第４冊 諏訪神社周辺遺跡発掘調査報告書
(財)香川県埋蔵文化財調査センター	四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第十五冊 龍川四条遺跡、同第十六冊 川津二代取遺跡、同第十七冊 郡家大林上遺跡、高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第三冊 前田東・中村遺跡、同第四冊 太田下・須川遺跡
(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター	松山市文化財調査報告書第46集 桑原地区の遺跡Ⅱ
福岡市埋蔵文化財センター	福岡市埋蔵文化財センター年報第13号 平成５(1993)年度
岩手県教育委員会	岩手県文化財調査報告書第94集 平泉遺跡群範囲確認調査、同第95集 岩手県内遺跡発掘調査報告書(平成５年度)
胆沢町教育委員会	埋蔵文化財報告書第25集 尼坂遺跡
仙台市教育委員会	仙台市文化財調査報告書第171集 富沢・泉崎浦・山口遺跡(5)、同第182集 中田

	南遺跡、同第192集 南小泉遺跡、第21回文化財パンフレット
米沢市教育委員会	米沢市埋蔵文化財調査報告書第40集 一ノ坂遺跡発掘調査概報第４集、同第41集 矢子山城跡第１集調査報告書、同第42集 遺跡詳細分布調査報告書第７集、同第43集 塔ノ原発掘調査報告書、同第44集 米沢城発掘調査報告書、同第45集 直江石堤谷地河原堤防測量調査報告書、同第46集 窪平遺跡調査報告書
いわき市教育委員会	平成６年度範囲確認発掘調査概報 根岸遺跡
群馬町教育委員会	群馬町埋蔵文化財調査報告書第38集 南部遺跡群、同第39集 町内遺跡Ⅱ
富士見市教育委員会	富士見市遺跡調査会調査報告第41集 御庵遺跡第14地点発掘調査報告書、同第44集 富士見市内遺跡Ⅱ
東金市教育委員会	東金市の文化財、平成６年度 東金市内遺跡発掘調査報告書
富津市教育委員会	富津市内遺跡発掘調査報告書
袖ヶ浦市教育委員会	袖ヶ浦市史基礎資料調査報告書１ 袖ヶ浦の仏像・仏具、同２ 袖ヶ浦の民具、同３ 袖ヶ浦の諸職、同４ 袖ヶ浦の建造物[神社・寺院]、同５ 袖ヶ浦の建造物[民家]、袖ヶ浦市内遺跡発掘調査報告書 房根遺跡・谷ノ台遺跡・西ノ谷下遺跡・寒沢遺跡
市原市教育委員会	平成６年度市原市内遺跡発掘調査報告
吉田町教育委員会	山手２号古墓発掘調査報告書
山武町教育委員会	平成６年度 山武町内遺跡発掘調査報告書
日野市教育委員会	日野市の文化財、一般国道20号(日野バイパス万願寺地区)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書、日野市埋蔵文化財発掘調査報告15 日野ＳＳビル建築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査概報、同16 (仮称)浅川公会堂建設予定地埋蔵文化財発掘調査報告書、同17 日野市埋蔵文化財発掘調査輯報Ⅵ、同19 南広間地遺跡４、同22 平田建設株式会社による建売住宅建築に伴う埋蔵文化財発掘調査
境川村教育委員会	境川村埋蔵文化財発掘調査報告書第10輯 仲原遺跡・真福寺遺跡、同第11輯 金山遺跡
明野村教育委員会	明野村文化財調査報告８ 神取
佐久市教育委員会	佐久埋蔵文化財調査センター年報１、佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書第３集 芝間遺跡、同第４集 新町遺跡、同第６集 淡淵・屋敷前・西片ヶ上・曲尾Ⅲ・曲尾Ⅰ遺跡、同第７集 高師町遺跡・西久保遺跡、同第９集 梨の木遺跡、同第10集 菅田遺跡Ⅲ・新町遺跡Ⅲ・宮の上遺跡・中曽根遺跡・藤塚遺跡、同第12集 西祢ぶた遺跡、同第13集 薊沢遺跡・蔦石遺跡、同第15集 腰巻遺跡・西大久保遺跡Ⅱ・曲尾遺跡Ⅱ、同第16集 荒田・上金井・東赤座Ⅱ遺跡、同第17集 薊沢Ⅱ・琵琶坂Ⅵ・梨の木Ⅱ・宮の上Ⅱ遺跡、同第18集 森下遺跡、同第19集 金井城跡、同第20集 南上中原・南下中原遺跡・上聖端遺跡、同第21集 鶉ヲネ遺跡、同第22集 東大門遺跡・菅田遺跡Ⅳ・中金井遺跡Ⅱ、同第23集 聖原遺跡Ⅰ、佐久市埋蔵文化財調査報告書第13集 上高山遺跡Ⅱ発掘調査報告書、同第15集 蛇塚Ｂ遺跡群・野馬久保遺跡、同第17集 市内遺跡発掘調査報告書1991(１月～３月)、同第26集 藤塚古墳群・藤塚Ⅱ、同第27集 枇杷坂遺跡群・上久保田向遺跡Ⅲ発掘調査報告書、同第28集 曽根新城遺跡Ⅴ、同第29集 筒村遺跡Ｂ・山法師遺跡Ｂ発掘調査報告書、同第30集 市内遺跡発掘調査報告書1992、同第31集 筒村遺跡Ａ・山法師遺跡Ａ発掘調査報告書、同第32集 東ノ割遺跡発掘調査報告書、同第33集 聖原遺跡Ⅶ・下曽根遺跡Ⅰ・前藤部遺跡２、同第34集 西一本柳遺跡Ⅰ調査報告書、佐久市埋蔵文化財年報１ 平成２年度、同２ 平成３・４年度
伊那市教育委員会	上ノ山遺跡、辻西幅遺跡、伊勢並・赤坂遺跡
小杉町教育委員会	小杉町埋蔵文化財発掘調査一覧 1993年度
小松市教育委員会	松梨遺跡
加賀市教育委員会	熊坂花房砦跡
福井県教育庁埋蔵文化財調査センター	福井県教育庁埋蔵文化財調査センター年報８ 平成４年度、福井県教育庁埋蔵文化財調査センター所報４ 北堀貝塚
福井市教育委員会	福井城跡Ⅱ、下中道木遺跡

静岡市教育委員会	静岡市埋蔵文化財調査報告22 駿府城三ノ丸、同23 蛭田遺跡、同27 平城遺跡・平城古墳群、同28 猿郷１号墳、同31 有永１号墳、同32 国指定史跡 賤機山古墳、静岡市の埋蔵文化財発掘調査の概要 昭和62年度、同昭和63年度、同平成元年度、ふちゅ～るNo.１ 平成３年度静岡市文化財年報
浜松市教育委員会	浜松市指定文化財 古墳
稲沢市教育委員会	稲沢市文化財調査報告ＸＬⅢ 稲沢市内遺跡発掘調査報告書(Ⅰ)
鈴鹿市教育委員会	第４回鈴鹿市埋蔵文化財展
八日市市教育委員会	八日市市文化財調査報告(15) 建部城遺跡発掘調査報告書、同(16) 小山遺跡・東本町遺跡発掘調査報告書
近江八幡市教育委員会	近江八幡市埋蔵文化財調査報告書ＸＩＸ 九里氏館遺跡・奥野遺跡・一ノ坪遺跡・大手前遺跡、同ＸＸＩ 東田遺跡・鷹飼遺跡・高木遺跡・出町遺跡・寺田遺跡・後川遺跡、同ＸＸⅢ 西車塚古墳・掘上遺跡・寺田遺跡・御館前遺跡・大殿遺跡・宇津呂館遺跡・堂ノ内遺跡・高座遺跡・後川遺跡、同ＸＸＶ、同ＸＸⅦ 八幡山城遺跡・観音堂遺跡・加茂遺跡・出町遺跡・宇津呂館遺跡・入田遺跡・余内遺跡・鷹飼遺跡
蒲生町教育委員会	蒲生町文化財資料集(18) 町内遺跡発掘調査報告書Ⅴ
安曇川町教育委員会	下五反田遺跡発掘調査報告書
泉佐野市教育委員会	泉佐野市埋蔵文化財発掘調査概要、泉佐野市文化財発掘調査報告27 湊遺跡、同37 貝田遺跡、同39 南中安松遺跡、同40 諸目遺跡、同41 三軒屋遺跡、泉佐野の歴史と文化財第２集 泉佐野の遺跡－原始・古代編－
豊中市教育委員会	豊中市文化財調査報告第34集 豊中市埋蔵文化財発掘調査概要
岸和田市教育委員会	岸和田市文化財調査概要20 平成６年度発掘調査概要
赤穂市教育委員会	赤穂市文化財調査報告書(41) 赤穂の民俗その11－補遺編－
出石町教育委員会	袴狭遺跡内田地区発掘調査概報
田原本町教育委員会	田原本町埋蔵文化財調査年報４ 1992・1993年度
榛原町教育委員会	森川千代女(榛原町郷土ブックス１)、榛原町内遺跡発掘調査概要報告書 1992年度、同1993年度、榛原町遺跡分布地図 1993年度
総社市教育委員会	総社市埋蔵文化財調査年報４
吉舎町教育委員会	燎東古墳
山口市教育委員会	山口市埋蔵文化財調査報告第48集 下東遺跡Ⅱ、同第49集 上嘉川遺跡、同第50集 山口市内遺跡詳細分布調査(大内地区)
鳴門市教育委員会	鳴門市埋蔵文化財調査報告１ 桧はちまき山遺跡・桧丸山遺跡・桧寺前谷川遺跡
高松市教育委員会	一般国道11号高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第２冊 谷・松ノ木遺跡、同第３冊 谷・長池Ⅱ遺跡
福岡市教育委員会	福岡市文化財分布地図(中部・南部)、同(西部Ⅰ)
宗像市教育委員会	八所宮 宗像市文化財調査報告書第31集、王丸清勢 同第33集、王丸清勢Ⅱ 同第35集、平等寺向原Ⅰ 同第37集、冨地原上瀬ヶ浦 同第38集、冨地原川原田Ⅰ 同第39集、福岡県宗像市文化財講演会資料５ 古代むなかた史をさぐる
菊水町教育委員会	前原長溝甕棺群
えびの市教育委員会	えびの市埋蔵文化財調査報告書第15集 上田代遺跡・松山遺跡・竹之内遺跡
高城町教育委員会	高城町文化財調査報告書第３集 上原遺跡(第２地点)、同第４集 上原第３地点
高崎町教育委員会	高崎町文化財調査報告書第６集 城の岡遺跡
岩手県立博物館	岩手県立博物館研究報告 第12号
北上市立博物館	北上川流域の自然と文化シリーズ(15) きたかみ民俗散歩、同(16) 和賀一族の興亡 前編
秋田県立博物館	特別展 地球を見つめる小さな眼
栃木県立博物館	栃木県立博物館研究紀要 第12号
浦和市立郷土博物館	浦和市立郷土博物館研究調査報告書 第22集
国立歴史民俗博物館	土偶シンポジウム３栃木大会資料集、同発表要旨集、国立歴史民俗博物館博物館資料調査報告書６ 日本荘園データ１・２
流山市立博物館	流山市立博物館年報 No.16 '94

芝山町立芝山古墳・はにわ博物館	平成６年度 芝山町立遺跡発掘調査報告書
出光美術館	出光美術館 館報第89・90号
世田谷区立郷土資料館	館蔵 近世の絵画
大田区立郷土博物館	大田区立郷土博物館紀要第５号 1994年度、重要有形民俗文化財 大森及び周辺地域の海苔生産用具
横浜市歴史博物館	開館記念特別展 弥生の“いくさ”と環濠集落
小田原市郷土文化館	小田原市郷土文化館研究報告 No.31(人文科学No.16)
氷見市立博物館	特別展 氷見の天神
石川県立歴史博物館	真脇遺跡と縄文文化
三方町立郷土資料館	三方町文化財調査報告書第12集 舘薮遺跡
土岐市美濃陶磁歴史館	市制40周年記念事業 特別展「美濃桃山陶の系譜」
浜松市博物館	川山遺跡、社口遺跡、西鴨江・中平遺跡２、宮竹野際遺跡３、笠井町下組遺跡、博物館資料集４ くらしの中のわら製品、浜松市博物館報Ⅶ
静岡市立登呂博物館	静岡市立登呂博物館館報(第５号)、写真とものでたどるある家族の記録
名古屋市博物館	名古屋市博物館 研究紀要第18巻、あゆち潟の考古学 弥生・古墳時代の名古屋
豊田市郷土資料館	豊田市文化財叢書24 磯谷清市氏寄贈考古資料図録
岸和田市立郷土資料館	武将のいでたち－変わり兜と合戦屏風－
柏原市立歴史資料館	柏原市立歴史資料館館報６、高井田横穴群
吹田市立博物館	平成７年度企画展 博覧会の風景
大阪府立近つ飛鳥博物館	平成７年度春季特別展「鏡の時代－銅鏡百枚－」
大東市立歴史民俗資料館	大東市埋蔵文化財調査報告第10集 北新町遺跡発掘調査報告書
播磨町郷土資料館	館報 1994
香芝市二上山博物館	ふたかみ２ 1992(平成４)年度香芝市二上山博物館年報・紀要、かしばの文化財４ 絵でみるかしばの歴史年表
奈良国立文化財研究所飛鳥資料館	古代の形 飛鳥藤原の文様を追う
橿原市千塚資料館	平成６年度特別展図録 藤原の金工
和歌山県立紀伊風土記の丘管理事務所	紀伊風土記の丘年報 第21号、特別展図録 発掘調査10年の成果Ⅱ
伊都歴史資料館	井原遺跡群 前原市文化財調査報告第51集、篠原岸田遺跡Ⅱ 同第52集、井ノ浦古墳・辻ノ田古墳群 同第53集、篠原熊ノ後遺跡 同第54集、平原周辺遺跡(5) 同第56集、荻野浦の文化財
佐賀県立九州陶磁文化館	九州陶磁文化館年報 平成５年度 No.13
佐賀県立博物館・佐賀県立美術館	佐賀県立博物館・美術館 調査研究書第17集、同第18集、佐賀県立博物館・美術館年報 第24号
國立全州博物館	國立全州博物館學術調査報告第１輯 扶安 竹幕洞 祭祀遺蹟
東北学院大学学術研究会	東北学院大学論集 －歴史学・地理学－第27号
山形大学人文学部	山形大学史学論集 第15号
筑波大学歴史・人類学系	歴史人類 第23号
千葉大学文学部考古学研究室	城ノ台南貝塚発掘調査報告書 千葉大学文学部考古学研究報告第１冊
立教大学学芸員課程研究室	Ｍｕｓｅｉｏｎ40
法政大学文学部考古学研究室	伊藤鉄夫・陽夫考古学資料目録Ⅰ 伊藤陽夫収集資料編
東海大学史学会	東海史學 第29号
愛知大学文学部史学科	愛大史学－日本史・アジア史・地理学－第４号
愛知学院大学文学会	愛知学院大学論叢 文学部紀要第24号
名古屋大学文学部考古学研究室	名古屋大学文学部研究論集122 史学41、考古資料ソフテックス写真集第10集
大阪大学文学部	待兼山論叢 第28号
大谷女子大学資料館	福居狭間・坂元狭間・三反田・石堂遺跡 大谷女子大学資料館報告書第31冊、飯倉Ｄ遺跡 同第32冊、山枝・なめら遺跡他 発掘調査概要

大手前女子大学	大手前女子大学論集 第28号
奈良大学図書館	奈良大学紀要 第23号
岡山大学埋蔵文化財研究センター	岡山大学構内遺跡調査研究年報11 1993年度
岡山理科大学図書館	岡山理科大学 自然科学研究所研究報告第20号
山口大学埋蔵文化財資料館	山口大学構内遺跡調査研究年報ＸⅡ
慶尚大學校博物館	慶尚大學校博物館學術調査報告第９輯 咸安・篁沙里墳墓群、同第11輯 宜寧・禮屯里墳墓群
慶南大學校博物館	慶南大學校博物館叢書５ 固城蓮 里古墳群、小加耶文化圏 遺蹟精密地表調査報告－先史・古代、博物館展示品圖録
宮城県多賀城跡調査研究所	宮城県多賀城跡調査研究所年報1992 多賀城跡、同1993 多賀城跡、多賀城関連遺跡発掘調査報告書第19冊 下伊場野窯跡群
国立国会図書館	日本全国書誌1995－７ No.2007、同1995－11 No.2011、同1995－14 No.2014
(株)名著出版	歴史手帖 第23巻３・４号
(株)メル プランニング	吉村作治の世界おもしろ遺跡探検② 古代中国文明と日本のあけぼの(アジア編)
至文堂	日本の美術第348号 家形はにわ
町田木曽森野地区遺跡調査会	木曽森野遺跡Ⅱ 旧石器・縄文時代編
葛飾区遺跡調査会	葛飾区遺跡調査会調査報告書第５集 葛西城Ⅷ
飯田町遺跡調査会	飯田町遺跡
新宿区法光寺跡調査団	東京都新宿区 法光寺跡
都立学校遺跡調査会	高島平北 都立板橋養護学校内埋蔵文化財発掘調査報告書１、高島平北 同２、無南町、鉢山町Ⅱ、本郷元町
大島支庁遺跡調査会	大島オンダシ遺跡
朝日新聞社	アサヒグラフ 通巻3790号
(財)韓国文化研究振興財団	青丘学術論集 第６集
宮内庁書陵部	書陵部紀要 第46号
厚木市秘書部市史編さん室	厚木市史 古代資料編(1)
遺跡調査団	中井町No.41遺跡
富山市日本海文化研究所	富山市日本海文化研究所紀要 第８号
(社)石川県埋蔵文化財保存協会	平面梯川遺跡Ⅰ
(財)古代學協會	古代文化 第47巻第２～４号、古代學研究所研究紀要 第４輯
(株)淡交社	ミヤコを掘る －出土した京都の都市と生活－
姫路市立城郭研究室	城郭研究室年報 第４号
妙見山麓遺跡調査会	灘・桜口遺跡
但馬考古学研究会	徹底討論 大薮古墳群、シンポジウム資料「古代但馬と日本海」、よみがえる古代の但馬２ 古代但馬と日本海
朝鮮学会	朝鮮学報 第154輯
大和弥生文化の会	「みずほ」合冊 第１～10号、同第15号、大和の弥生遺跡 基礎資料Ⅰ
宮内庁正倉院事務所	正倉院年報 第17号
(財)京都市埋蔵文化財研究所	平成２年度 京都市埋蔵文化財調査概要、同平成３年度、研究紀要 第１号
(財)向日市埋蔵文化財センター	平成５年度 財団法人向日市埋蔵文化財センター年報 都城６
京都府教育委員会	京都府古文書調査報告書 丹後漁業関係古文書
加茂町教育委員会	加茂町文化財調査報告第６集、恭仁京跡発掘調査概要 同第７集、恭仁京跡発掘調査概要 同第８集、山城国分寺跡発掘調査概要 同第９集
田辺町教育委員会	飯岡遺跡第５次発掘調査概報(田辺町埋蔵文化財調査報告書第17集)
京北町教育委員会	上中城跡第２次発掘調査概報(京都府京北町埋蔵文化財調査報告書第５集)
夜久野町教育委員会	高内鎌谷遺跡発掘調査概報
弥栄町教育委員会	青龍三年鏡シンポジウム 鏡が語る古代弥栄

峰山町教育委員会	新蔵古墳群発掘調査報告書(京都府峰山町埋蔵文化財調査報告書第17集)
向日市文化資料館	向日市文化資料館報第9号 平成4年度、企画展 にしのおかのほとけ
向日市立図書館	渡邊武コレクション図録 向日市立図書館開館10周年記念 特別展「椿尽くし」
宇治市歴史資料館	宇治文庫6 宇治をめぐる人々、平成5年度 宇治市歴史資料館年報
加悦町古墳公園はにわ資料館	第2回加悦町文化財シンポジウム はにわの成立と展開
京都大学文学部考古学研究室	琵琶湖周辺の6世紀を探る
京都市文化観光局	京都市文化財ブックス第10集 京の古代社寺
八幡市郷土史会	郷土史双書 やわたの道しるべ、文化財分布図、八幡市の教育 平成6年度版
亀岡市	新修 亀岡市史 本文編第一巻
足利健亮	考証・日本古代の空間
大森　宏	松ヶ瀬2号台場跡調査概要
賀川光夫	Primitive Agriculture in Japan
亀井正道	日本の美術第346号 人物・動物はにわ
小池　寛	富田林の文化財、日韓古代都市計画、朝鮮通史(上)、韓國史時代區分論、貝塚に学ぶ、古事記と天武天皇の謎、古墳と古代宗教、貝塚の歴史と文化、近江の原始・古代、北野天神
中尾芳治	難波宮の研究
中村幸夫	第6回埋蔵文化財調査研究会・シンポジウム 石を並べた縄文人
平口哲夫	日本海セトロジー研究 日本海の鯨たち
松井忠春	平成6年 正倉院展目録
水野正好	まじなひの文化史－水野正好主要著作目録－、奈良大学平城京発掘調査報告書第1集 菅原遺跡

編集後記

情報56号が完成しましたのでお届けします。

本号では、55号に続いて杜正勝先生の論文と、当センター職員の日頃の研究成果を掲載することができました。また、本号は年度のはじめの情報でもあり、今年度の調査予定と、前年度の成果のあった調査についてのまとめを載せました。御高覧下さい。

（編集後記＝土橋　誠）

京都府埋蔵文化財情報 第56号

平成７年６月26日

発行　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
〒617　向日市寺戸町南垣内40番の３
Tel (075)933-3877（代）

印刷　有限会社　真　陽　社
〒600　京都市下京区油小路仏光寺上ル
Tel (075)351-6034（代）